

い。信州では蛇の蒲焼を山鰻と云つて珍重してゐると聞くが、海蛇の蒲焼は海岸地方ではよく喰べてゐる。

海蛇のうちで、青灰色に暗褐色の横紋を現してゐるエラブ鰻、背が焦茶色、腹が黄色いセグロ海蛇などは、遠く海を離れた奉天省とか、山の中の吉林省あたりの料理家の中庭に大甕おほがめに小さい目の網の蓋をし、澤山に圍つて、客の求めに応じては料理してゐる位で、かなり行き渡つてゐる。

支那の首都、南京の有名な蛇料理店の一軒である安樂酒店アンレクの龍鳳會リウフウカイと云ふ名の料理は、蛇肉と鶏肉を煮合したもので、値段も頗る高いが、味もまた無比と云れる評判の一つであるが、蛇料理店のうちにも、それ／＼に手ぎはよくうまく喰せるものがあるので、それがまた美食家の垂涎的になつてゐる。

かうした料理の材料は普通に、青大将と違ふ有毒蛇の青蛇。水蛇と云ふ縞蛇、ハブなどが一番に味がよいとされ、この方面に多く利用されてゐる。

蛇酒になると、無毒蛇より有毒蛇の方を用ひ、蝮は云ふ迄もないが、みづちのやうに足のある蛤龍ハコから黒褐、黄色、白斑のあるのを利用してゐる。

この蛇酒も、蛇料理も、何れも不老長生の妙薬とし、補心強精になると信じて愛用してゐるのである。

蛇薬としては、あらゆる蛇の種類から單に肉許りでなく、皮から骨、膽などは最も有用な所で、蛇ぬけがらまでも各方面の病氣を治すのに用ゐてゐる。

琉球や臺灣福建に産するハブの類、性質が臆病の癖に一度、人が咬まれると、この毒が猛烈で、すぐと腦の中樞神経を侵し、些の苦痛もなく死んで行くアマガサ蛇。大きさは三四尺位で、山鼈やますつぽんと云はれるコブラ、咬まれてから百歩も歩かないうちに、人は毒が廻つて死んでしまふ百歩蛇、姫ハブ、サキシマハブ、キクチハブ、青蛇、鬼王ハブ、アリサンハブ、タイワンハブのやうな類まで、毒を以て毒を制すの式で薬用にしてゐる。

強壯回春に效用があると傳へられ、一般からもさう信じられてゐる蛇の利用は、料理にしても、薬にしても、いろ／＼に配合される他の材料薬草などの影響をうける點が多いので、蛇肉がその膽と共に、永く連用する時、白髪もまた黒くなるとの迷信さへある位だ。支那料理は知つての通り、何れもカロリーの多い、精力を増進する物が多く含まれてゐるが、薬にしても、人參や藥草を與へて飼養してゐる鹿の袋角、その牡の陰莖を乾し固めた

強壯回春
によい

のを鹿鞭と云つてゐるものや、生きた鹿の血を吸ふたりすると同じに、蛇の膽も生きてゐるのを取つて用ゐたり、乾し固めて香料を加へ、丸薬にしてゐるものなどもある。

何れも強壯劑として珍重され、殊に膽を主劑とし、各種の配薬の如何に依て、老人用とか、婦人用とか區別されてゐる。

それから支那の料理位に、動物の血液を巧みに生かして使用してゐるのも少い。豚の血にしても、鶏の血にしても色彩の配合色取りとして用ゐる許りでなく、血そのものの持つ成分を生かして調理してあつて、饅頭や菓子にまで動物の血が利用してゐる。

これは捨てる可き血を用ゐる許りでない。いかなる動物でも、支那人はあらゆる所を利用して、薬にし料理にして居るので、贖物料理などは早くから支那に發達し、一般の家庭の常食の域にまで入つてきてゐる。

蛇にしても、捨てる所は頭と尾の少しと、膽を除いた贖物で、外は骨でも、皮でも、肉け云ふ迄もなく、蛻までも巧みに利用してゐる。蝮蛇のやうな大蛇になると、五六丈からあるのを、頭と尾を三四尺位、毒があると云ふので、取り捨てるし、小さい蛇になると一二寸位を捨てるのが普通で、外は全部利用してゐる。

蛇のぬけがらにしても、龍子衣とか、弓皮など云はれ、昔からさく／＼また薬方がある。

支那の荊州では五月五日と十五日の兩日間に田野や山間で、この蛇の蛻を見つけてくるのを最良としてゐるが、これは別に深い根據のある所とも思れない。

草土の中から少しだけ、形を外に現してゐるのは蝮の類で、長く出てゐるのは赤棟とか埋頭蛇のぬけがらとされてゐるが、一般に石上に全形をぬけてゐるのが、薬として最もよいとしてゐる。

青黄色いのや蒼白いのは不良として用ゐないで、白くて銀色の如きのを用ゐる。

蛻を薬用にする前、支那人は先づ地を一尺二三寸位掘つて、一晝夜を泥の中に埋めて置き、翌る日取り出してから酢につけ、炙つて乾燥したのをを用ゐるが、近頃では簡便横着になつて、石鹼で洗つたのを竹にまきつけ、酒とか酢、蜜の何れかへ漬け、黄色味をもつ位まで形の崩れない程度に焙つたのを使用するやうになつて來た。

主治效用として、支那人が信じてゐるものは、小供の驚癇、癩疾、舌足らず、寒熱、腸痔、蟲にさされた毒を消すと云ふ。大人にはその利用法如何で、諸惡瘡を治し、瘡を止め安産の妙薬とされてゐる。

本草綱目に、蛇の蛇の薬の作り方が数十種類載せてあるが、ここでは省く。

蛇でさへ澤山な用途がある位であるから、蛇の骨、皮、肉、殊に一番に効用があると思われらるる膽になると、更に一倍の用途がある。

蛇に咬まれると、ヘモラギンとか、ヘモリヂン、ノイトロキシーンなどと云ふ毒素が皮下や筋肉に喰ひ入り、注射をされた状態となつて、一命にもかかわる大事になるが、それが口から胃腸に入つたのでは、粘膜を多少刺戟する位の程度に過ぎないのが普通であるので、これ等の怖ろしい毒蛇の膽を生きてゐるうちに取り、薑とか、密柑の皮、胡椒などを混じ、ねり合して丸薬にしたのが、支那には少からずある。

何々蛇膽丸とか散とか、或は蛇膽胡椒など云ふ風に名をつけ、薬舗で販賣してゐる。

そのうちで、不老長生、若返りの薬妙とされてゐるのに、蝮と蛇の膽が知れて居る。支那の嶺南諸群に棲息してゐる蛇は、一年に一回は鹿を呑むと云ふ位に巨大なものゐて、その膽は鴨位の大きさがあつて、甘苦い味で、少しく毒氣を帯び、蝮と同じく蛇膽丸の原料とされ、強壯回春若返りの薬として珍重される一方に、腹痛、痢病、血止め、腦熱、疔瘡、齒痛などの諸病にきく妙薬とされてゐる。

昔、顧含と云ふ人が、養つてゐた蝮が失明したので、蛇の膽が特效のあることを傳へきいたので、含が艱難して、これを漸くに求め、盲目になつたのを治したと云ふ故事があるが、蛇膽が精力を増し、元氣を恢復するに役立つと云ふ支那人の信念から、こんな説が生れてきたのであらう。

鰻の膽が鳥目にきくと云ふのと變りがない。蛇の膽を齒痛の時に、齒のウロへぬり込んで治ると云ふことは、わが國でも一部の地方では信じて行はれてゐることだ。

蛇肉は心氣を温め、鬱結を散する効用が大きいとされてゐるが、中でも蛇のやうに大きい蛇のは、どう云ふわけか、舊四月頃は絶対に喰べないことにしてゐる。

主治効用としては喉に小物がつかへて出ない時や疔瘡、瘰癧瘰癧を除き、手足の風痛によく、疥癬惡瘡の質の悪い皮膚病には殊に好として用ゐられてゐる。支那の嶺南地方ではこの蛇肉をいろいろに料理して用ゐると、瘰癧瘰癧をうけないとされ、一般に常用してゐる位で、肉は焼いても煮ても、膾にしてもよい。前述の諸病の輕症は三四日を用ゐると治り、重症でも連用すること百日を出ないで全癒すると云れる。

有名な蛇酒はこの肉を主として醸造するもので、不老長生の妙薬と信じてゐる。

蛇肉の効用

白花蛇とか、シロマダラの肉は、舊曆の九十月頃に捕へたのを焙乾したのが佳いとして
 るて、多く酒と一緒に喰べると、蛇毒を消し、效用を示すとされてゐる。

主治效用としては中風濕痺、筋脈の引きつき、半身不隨、骨節の疼痛の甚だしいのや脚
 弱く久しく立つてゐられないもの、瘡癩、大風疥癬に妙である。

土人が全身の疥癬で、諸薬も效の無い時、生きた白花蛇を捕へて、幾片かに切断し、土
 器で焼いたのを酢蒸しにし、骨を去つて肉だけに五味を和して頓食し、一晝夜を経過する
 と綺麗に治ると云れてゐる。

驅風膏と云ふ風癰皮膚病の膏薬も、この蛇肉を主としたものである。その他、癩病や花
 柳病の薬としても、支那ではこの蛇肉や烏梢蛇、まむしなどが用ゐられてゐる。

直接に蛇肉を食用にする許りでなく、間接に用ゐる薬とする方法もあつて、烏蛇などは
 一度、その肉を取つて焙り、米粒大の丸薬にし、白烏鶏に喰べさせ、それを全て喰べ終つ
 た時、鶏を殺してからゆで、肉を取つて焙つて研末にし、酒で用ゐる薬にすることなども
 行れてゐる。

これなどは蛇肉を直接に用ゐないで、鶏を介して、その効を更に得やうとするわけで、

果して利くかどうかは判らないが、支那では今でも用ゐられてゐる。

もう一つ同じやうな方法であるが、烏蛇を殺し、爛れるまで打つて、水二碗に七日間漬
 けて置き、皮と骨を去り、肉を糯米一升の中へ一日だけ浸け、乾燥したのを、腹をすかし
 て置いた白鶏に喰べさせ、次第にその羽毛が脱落してくるのを待つて、その鶏を殺し、肉
 を酒など混ぜて煮て喰べる。

蝮の肉はいろ／＼な病にきくやうに云れるが、まむし酒を造る一法としては、生きてゐ
 る蝮を一匹、醇酒一斗をいれた壺の中に浸け、密封して、暗い所に一年位を圍ふと、蝮は
 すつかり酒に化してゐるから、その時を見計ひ、少量づつ用ゐるとよいとされてゐる。

支那には澤山の蛇がゐる、その用途もいろ／＼あるが、よく兩頭蛇と云つて、體が一つ
 で頭の二つある畸形のを見るが、支那人はこれに出逢ふと、間もなく死ぬと云ふ迷信があ
 り、スツボンが牛血を吸つて化けたなどの説もあるが、一方に平氣でこれを食してゐる土
 人も居るし、瘡を去る呪のやうに迷信され、この乾燥したのを頭に載せる慣習も傳つてゐ
 る。

さすがに廣大な國柄だけ、一方には見てさへ死ぬと怖れられてゐるものを、平氣で喰べ

たり、呪の道具にしたりしてゐるわけで、迷信と云ふものがくだらない事は、これでもよく判るわけだ。

次に蛇皮は、南洋方面から支那へ渡つて蛇味線と云ふ楽器、二胡などの胴に張られて珍重されてゐるが、この外に烏蛇の皮は焼いて粉末とし、酥で和して塗ると、唇の瘡などにきくと云はれ、縞蛇の皮も同じ粉末としたのを豚の油とねつて膏薬とし、小供の骨疽膿血の止まないのに塗ると治ると云れる。

蛇の牙は、腰につけてゐると、不吉と災難を避ける呪のやうに思はれてゐるのも變つてゐるが、赤棟の骨は焼いて粉末とし、丸薬や散薬に作られてゐる。

蛇の卵は諸薬と和して丸薬とし、蛇肉と同じ效用があるとされ、蛇の膏は皮膚病によく、蛇の卵は婦人産後の腹痛に特效があり、耳の薬などにも作られてゐる。

蝮の油

蝮の油で、物を磨くと透き通るやうに綺麗になるし、その骨は蝮許りでない、全て蛇骨は焼いて粉末としたのを三匁位づつ温服すると、赤痢にきくと云れてゐる。

これ等多くの蛇薬は、實際にきくかきかないかは別問題とし、兎に角支那では昔からさうと固く信じられ、行れてゐるものである。

蛇の卵

山海經と云ふ古い本に、巴蛇が象を呑んでから三年にして、その骨を出すと載せてあり、君子がこの肉を食用すると心腹の病がないと云つてゐる所から見ると、蛇を薬としたことは、随分古い昔からであるが見えるが、昔は支那に象をさへ呑むやうな大蛇がゐたと見える。今では鹿を呑む位の蛇は居つて、そんな際はじつと大樹にまきついて動かないで、呑んだ鹿の骨や角が肉を破り、皮をつきぬけ、鱗の間から外へ出るのを待つてゐて、その傷跡を養つてゐる時の蛇は、膏が乗り、光澤があつて、頗るキレイな時とされてゐる。そんな際、山中で出逢つた人は、女の上衣をなげかけると、ジツと蠕つたまま動かないでゐると云ふ事が言はれ、女の髪の毛で大象を繋ぐ故事と一對である。

この外、安南、雲南、臨安、沅江、孟養各地方に居る鱗蛇と云ふ鱗の類、春冬は山中に夏秋は水邊に棲んで、よく人を呑み、傷けるが、土人はこの肉を食用とし大變に珍重してゐる。

これには黄鱗と黒鱗があり、黄鱗の肉を上等とし、味がよいとされてゐる。

貴州、鄧州、四川産の黒蛇、鱗蛇なども、その肉を三日間、酒づけにしてから食用にしてゐる。

竹箴に棲息し、竹と同じ保護色をしてゐる竹根蛇とか青峰蛇などと云ふのが居り、支那では乞食などが大道で蛇遺ひとして馴してゐるが、死ぬとその肉を喰べてしまふ。一般も縞蛇と同じに食用とする。

支那の昔、不考長生若返りの妙薬として、蛇やひき蛙の筋骨、猿や犢の腦、鳩血、狼や大木兎の尾羽毛などが用ゐられてゐたが、これ等の中には迷信的のが多く、實際の効用は疑しいもの許りである。

それには興奮作用を興へる肉桂とか、薑、人參、大麻、液麴、藥香、サフランなどが配劑し、強壯薬としての効用を助けてゐた。

そこへ行くと、蛇の膽は膽それが昔から長壽の仙薬とされ、小説や傳説の中で、白髪の老翁や手を引く童子と森林や險阻な山路で出逢ひ、恵まれた丸薬のため急に若返つた元氣を得て、數百歳を重ねたなど記してあるが、それ等の多くは毒蛇の膽を固めたもので、容易には入手しないものとされてゐた。

こんな傳説から傳統されたわけではなからうが、現在でも支那では、蛇膽は長生不老の妙薬とされ、一般から珍重され、その膽酒は更に老衰を若きに返し、常に用ゐてゐると童

蛇酒の種類

顔で白髪を黒くし、百歳にして一日數十里を行くも疲れを感じないと云ふてゐる。

各種の蛇酒が實效の如何は置くとしても、支那人はその効用の靈妙を固く信じて疑はないので、老人用の三蛇膽果皮とか、婦人用の何々蛇膽散とか云ふ薬と共に、蛇酒の種類は數十種を超え、各地で醸造されてゐる。殊に廣東方面は旺んで、南支一帶、上海あたりにさへ相當に大きい蛇酒醸造所が出来てゐる位である。

多くの毒蛇の酒の方が、無毒蛇より効用が顯著とされ、白花蛇、蝮などを主とした酒が少なからずある。

わが國でも蝮酒はあるが、支那の烏蛇とか、蝮、白花蛇、埋頭蛇を主とした四蛇驅風酒、白花蛇、蝮、埋頭蛇を配した三蛇驅風酒、酒精分が強くドロ／＼してゐる長春酒など數多くあるが、一體に蛇酒は上等の酒を用ゐるので、口當りよく、酒精分はさう強烈なものではないのが普通である。

近頃は蛇許りでなく、いろ／＼な藥草を混入するので、普通の藥酒と變らない香味を帯びてゐるものも出来た。

これ等の蛇酒と劣らない効用があると信じられてゐるに、蛇料理がある。

その料理法は炒つたり、蒸したり、焼いたのや、煮たのや、蒲焼のやうにしたもの、あつもの、油揚げ、酒づけ、醤油づけ、とろ火で一晝夜も煮詰めるものや、干差原別であつて、澤山にあるが、そのうち陸蛇と海蛇の料理法各一種を話して、どんなものであるかをお知らせすることにする。

そのうちで、蒸鱧股と云ふ料理は海蛇を蒸した料理で、元來が滋補に富んで、人參にも増す效用があるとされてゐる。

その料理法は焼くのと、とろ火でとろくと煮るのと二種類有るが、これは干貝と一緒に蒸すと、干貝蒸鱧股と云ひ、ハム、肉片、筍などの相手に依つて、何々鱧股と云れるわけだ。

干貝をいれるのだと、これを酒蒸しにしてから、海蛇の肉を一寸位に切つて、熱湯に通し、油氣を去つたのは陳酒、食鹽、葱、薑などと、醤油、麻油などで調味して作る。

縞蛇のダシ汁を取つて作る料理に、蛇汁燻煮鶏と呼ぶのがある。つまり縞蛇を煮出した汁で、肥えてゐる雄鶏、麻姑、干貝、ハムなどを一緒にとろくと煮る料理で、その美味は他の追隨を許さないと云はれてゐる。

縞蛇を竹片で打ち殺したのはを用ゐるのは、鐵器で殺すと、毒質を生ずる怖れがあると言われてゐるので、蛇の生の肉へは鐵器をふれぬのをよいとしてゐる。

皮を剥ぐにも竹片を用ゐる、首尾を切断し、骨をぬき、臟物一切は出してから水洗ひし、鍋の湯で半日位をとろくと煮る。そして肉がただれてきたならば細い篩にかけてその汁だけを取つて置く。

雛鶏一羽は殺したのは毛をむしり、肚を割いてキレイに洗ひ、麻姑十羽は熱湯で洗つて脚をすて、干貝三十羽は陳酒で蒸して置き、ハム三十羽はよい加減に切つて臭氣と腥さをぬくため黄酒（紹興酒）四十羽と食鹽三羽と毒よけのために葱と薑を少し許り用意する。これからこの材料を用ゐて、とろくと氣長に煮るわけであるが、先づ蛇汁と鶏と葱、薑を鍋に入れてからゆつくりと煮て、陳酒を注ぎ入れ、また蓋を固くして充分に煮、半ば煮えた時を見計ひ、食鹽薑少量と干貝、ハムなどを一緒に加へ、更に蓋をし、改めてとろくと煮るので。

よく煮えてから先づ鶏を取り出し、喰べ頃に切つて碗に盛り、それからその汁をかけて喰べるのである。

支那の蛇肉料理は、何れでも多く葱や薑が取り入れられてゐるのは、全て毒氣を避けるためと、サウダック黄酒で腥さを消すためである。

蛇の膽は、熊を始め各動物の膽と同じに固形して薬用されてゐる許りか、極く特殊の料理に使れることがある。

これ等の蛇薬、蛇酒、蛇料理は年一年と、支那の需要は旺んで、酒や薬などの輸出額も素晴しく激増して行くと云れるが、昔は一部地方の養蛇場をのけて、多くの土人がほんの副業であつたのに、今はどうしてなか／＼大仕掛に五六人から十人位が一組となり、團體を組んで、蛇狩りをすることもある。

蝮蛇ハブのやうな大蛇を捕獲するとなると、今は銃を使ふから一溜りもないが、昔は一人の土人が頭に一杯に赤や紫、黄、白と云ふ風に、色美くしい花を挿して行くと、大蛇は變なものが來たと許り、ジツとそれを注視して動かないので、その隙を伺ひ、側に近寄つた外の土人がだしぬけに首を切断するが、尾力が強いので、やり損じたなら一大事で、首を切られても、一時は全山を振動するやうなのうちと狂躁を繰返し、大地を打つのが物凄いと語られてゐる。

小さい蛇を捕へるのは、毒蛇でないと、そのままに竹片で摘んで、籠や布袋に投げ込むが、有毒蛇であると、一掴みの沙をふりかけ、蟻つてひるむ所を見てから、まんがササミや又のやうな物に引つけて捕へる。中にはその場で縄で結へ、竹片で腹を割き、膽をのけた臟腑を取りすて、保存に便するやうにして、片端から仕末して行くのもある。

土地によつては、蛇の穴を見つけ次第、硫黄を焚いて、その煙に蛇が苦しまざれ、酔つたやうに弱つて、這ひ出してくる所を雑作なく押へつけるとも云はれてゐる。

廣東人などが蛇を捕へに行くのは、私たちが魚を捕へに行くのと變りが無いので、捕へてきた蛇は一匹でも、二匹でもすぐとその家の食膳を賑すことになるのだ。

大抵は蛇肉の切つたのを、鶏肉や豚肉と混ぜてゴタクと煮るのが普通で、料理家のやうな手のこんだことはしないが、これでも酒糟サカベとか、胡椒粉、薑、香菜などを配して用ゐる、中には肉を搗いて、團子にし、汁の實にしたり、油揚げにしたりして食してゐる。

蛇をかうしてあらゆる方面に利用してゐる支那人の慣習を見ると、随分といかもの喰ひのやうに考へられるが、それは喰わす嫌ひと云ふものであつて、かうせち辛い世の中になつてくると、喰へる物は何でも喰ふ方がよい。しかも相當に美味であると云ふに到つては

大いに蛇を利用すべきで、鱒や鮭を喰ふのと變りがなく、支那人はわが國人の章魚を喰ふ方をむしろ不思議に考へてゐる。

阿片の吸引は人體に害を及ぼすが、一方に毒も變じて藥となるで、その主要成分として含有してゐるモルヒネは藥用として重要なものだ。

支那では今でも田舎へ行くと、漢方醫が幅を利かしてゐるので、草根木皮を煎じて服用する漢方藥は盛んに用ひられ、この方面での昔からの權威書——本草綱目によれば、あらゆる草がみな藥用となつてゐる。

草根木皮の漢方藥

歐洲の戰亂が勃發すると、いつも新藥の輸入が杜絶するので、今更の如く草根木皮の漢方藥が代用品として重要視されてくるが、殊に蒙古方面の草原に野生してゐる甘草とか、當藥せんがうなど需要の廣いもので、中でも人參は昔から貴重藥としてゐた。

人參採り

この人參採りにつき、變つてゐる習慣があつて、會て同仁會の機關誌「同仁」へ掲載して置いたものであるが、珍しいことであるから再録する。

支那でも藥用人參に就ては、いろ／＼な面白い傳説や神話がある。

山參——人工で培養しない、天然産のものゝ在る所には多く大蛇や虎狼が巢くつて居り

鬼神が棲んでゐて、暗にそれらを保護してゐると云ふ事が、昔から人參採り仲間には誠にやかに信じられて居る。

これに人參自ら身を隠し、形を避けることも出来て、場合によると遠くへ遷ウツげて了ふものだとさへ云はれてゐる。

人參を採し出した時、急いで紅い籠へいれるのも、同じ迷信からではあるが、それを掘り出すのがまた素晴しく大仕掛である。

わが國の舊劇にも、親の長病ひを治すため、藥用人參を求めると、娘が身賣りまでする場面もあつたやうに記憶するが、支那でも馬鹿らしい位、大切に取扱はれてゐることは事實である。

人參は普通、人蔘レンシユス、略して人蔘。黃參、血參、人蔘レンシユス、鬼蓋、神草、土精、地精、海蔘カイシユなどと云ふてゐるが、世間からは一般に益氣補元として珍重され、長白山脈に産出するのが最も佳良として評判されてゐる。

吉林省舒蘭縣シュランの南東、各鄙村落は山脈が綿亘し、林草が豊かで、三岔嶺サンサリシから茅爾山マールシヤン、珠珙ジュウキョウ、霍倫兩川ホレンリウシヤンへかけての一帶は藥用人參の産地として著名である。

この地方では、毎年立夏後は農夫の殆んどすべてが山へ人參採りに入るのが、副業と云ふよりは本業になつて居る。中にはこれで巨萬の富を得た者も少くない。

この人參は大抵三種に分類され、人工で培植したのを園參と云ひ、三岔嶺一帶にはこの業を専ら營んで生活してゐるのが五六十軒からある。

それから城樹根參またの名を海貨と呼ぶのは、園參の優良種を大樹下に移植し、天然産のやう種々な奇怪な形状を見せてゐるもので、これは天然産のものと紛れる一種である。

山參——深山幽谷の茂れる雜草の間から採し出すので、大山參とも云ひ、値段も高く、買も一番に優れてゐるものとされて居る。

御承知の通りな顯花植物で、高さ二三尺、葉は棗椒葉に似、莖は土を離れる尺餘、頂が獨本にも分岐して居る。二本にわかれてゐるのを二甲子と云ひ、三岐を三匹葉、以下四本、五本……となるに従ひ、彼等の仲間は四匹葉、五匹葉……と呼んで區別してゐる。莖が割れてゐないのは燈臺子と云ふ、何れも立秋前、花を開いて實を結ぶが、これを紅朶子とか紅浪頭とか名づけ、人參採りは大概この時分に山へ上つてゐるのが多い。その實が鮮艶な色をしてゐるので、尋ね見ぬあるに容易であるからだ。

人參採りの迷信の深いことは、船員水夫などの上を行くわけで、彼等は山神、土地五道神を祀つて、人參の神として山上りの前、香を焚き、三頭の豚の首を齎として供へ、爆竹をあげ一行に祝福があり、災難を免れるやう、虔誠を盡した祈りをあげる。

先づ採參の第一日、大勢の中から案内者役の斯道に老巧な者を選んで鋪棍と名づけ、山把頭と稱し、一行の指揮者とする契ひを立てる。そして山中に於ける一切の命令に服従せねばならない。皆はてんぐに釜鏝米鹽刀斧等の身の廻りの品から數日間の食料品に至るまで、身につけて登山するが、夜は多く樹下に露宿し、樹皮で風露をふせぎ、交替に一人の寝ずの番を置いて、絶えず焚火を續けて、一行に暖を與へると共に、毒蛇蟻獸を防ぐ一手段として居る。

彼等が一番に大切な用具は、峻羅棍で、高さが肩位まであり、金剛杖と同じで、峻しい山路の呼吸杖となり、人參を採る道具ともなる。その頂端には穴鏝五六枚を輪にして括しつけ、歩く度に揺らいで響きを立て、仲間が互ひに呼應する合圖として進むのである。

彼等は山へ上り山參を採る時は、決して無駄口を叩かぬやうに戒め合つてゐる。

樹木が青葱で草花が美しく茂り、山水明媚な陰陽自然に平均する土地には、必ず人參が

ある。で先づ一行の首領である山把頭シヤバトウがその地勢を案じ、命令を傳へる。

そこで彼等の活動が始まるが、何しても運賦天賦、一日に一人で數株を見つける時もあるれば、幾十人が數旬の日を重ねて、一つも獲ないことさへある。

人參を探し出すと、烈しく咬羅棍オウラクコンを鳴して合圖をする。そして穴錢アナゼンの繫いだ紅繩ベニヅナを莖の頭へぐるぐると捲きつけ、大きな聲で「棒極バンキョク」と叫ぶ。一行は「おう！」と歡びの應へを揚げて「幾匹葉イクヒエ？」と訊ね返すのだ。

三匹葉或は四匹葉と、その莖の形態を發見者が答へると、一同はすぐと、その人參の傍へ參集する。そして人參發見者は山把頭シヤバトウの許しを得て、自由に休息をし、外の連中がそれを掘り出しにかゝる。

始めに斧ノコギリで、附近の草木を斬り倒し、土石を控ノセき、鹿骨針シカノボネを人參の鬚へ通し、一行は小心翼々、ただ少しでも傷つけるのを恐れながら、山把頭シヤバトウの指圖に従つて掘り出して行き技術の浅い者は手をかけない。

掘り出してから更に附近を探してみるが、その人參は大樹皮にくるみ、濕土苔蘚シツトキサキでかこひて枯稿ヒカガヒを防ぎ、一行は之を背負つて下山する。更に再び豚を殺して鬚ヒゲとし、神へお禮を

人參の年
齡

する式が行はれる。

人參の年齢は、上の節の蘆頭アシトウと呼ぶ所を見ると、すぐにその豆大の把の數で、判別出来る。

一年に一把を結ぶわけで、數の多いほど佳い。中の節は參身で、人の形、禽獸虫魚樹木器物、千差萬別、ただ質量重く、人體の形狀を呈してゐるのが最も珍品として高價である。その下に細根を鬚ヒゲとし、これもまた重要な一部とされて居る。

蛇料理は
北支那で
も喰べる

蛇料理は支那全國、どこでも喰べられることは前述の通りで、十一月頃から翌年二三月まで、寒い穴籠アナカゴをする時が一番に脂肪アブラの乗つた喰べ頃とされ、この頃になると、大きな蛇の脱殻ヒナガラを料理家の店頭へぶら下げ、わが邦で鍋料理始めましたとおなじに、寒くなつて蛇料理を致しますと廣告をする。

犬肉は茶
褐色のが
うまい

猫は婦人病の藥になるといふ言ひ傳へから、廣西省では街頭、籠に置いてある小兎や駒鼠ウサギを賣るやうに商つてゐるが、海南島邊では一般食用に供してゐるといふ。茶褐色の犬は美味と稱され、これは鶏と同じく、南支那では飼つてゐて、焼酒で煮て喰べるが、北支那では餘り犬肉料理は耳にしない。

虫類料理

熊の掌とおなじに鹿の筋が美味とされてゐるが、雲南省では象の鼻を料理して喰べるといふが、これは驚くことだ。

虫類もいろいろ料理にするが、蝗はわが邦でも喰べるから珍しくないが、魚を釣る餌になるごかいの天ぶら、廣東地方で珍重するといふが、冬虫夏草といふ虫か草か判らない四川西藏地方の名産、冬に毛虫に寄生した植物の種子が夏に虫の口中で發芽し、虫の體と續いてゐるモヤシの如きもので、虫の變形で多く薬用にしてゐる。

源五郎虫に似てゐる丸い油虫の揚げたのも賣つてゐるが、支那では油虫のゐない家庭は貧乏のドン底で、あそこには油虫の喰べる物さへ無いのだと蔑視する風がある。ものは考へやうだ。

南京虫は
お國風

南京虫は臭虫と云ひ、支那人もこれのゐることは餘り悦ばしくないが、日本の家庭で虱のゐる程度にしか考へてない。たゞ南京虫はお國風の慾張りで、一遍に二ヶ所づゝ食つてゆくのが變つてゐる。

追に支那人も南京虫だけは食用にしてない。草では蘆と眞菰の若芽の玉蘭片、これはよく料理に使用し、わが邦の簡単な一品支那料理にも使つてあるのを見受けるだらう。

日本のと
違ふ支那
の餅

蒙古産の茸の口蘑、或は蘑菇に、香菇（椎茸）と、四川省の竹の林に出る竹筴、白い木耳のうちの銀耳なども有名だ。

支那で餅といふのは、わが邦の糯米から作るのと違ひ、殆んど小麦粉に水を加へ、こねて大福のやうな形にして油で揚げた油餅、おなじく焼大福に似てゐる燒餅、煎餅のやうに堅く焼く烙餅などがそれで、高粱粉で煎餅にしたのがあるのは前述した通りである。米から作つた餅はすべて糕といふ名をつけて、菓子にこの名稱が多い。

料理法
の種類

支那の料理には何炒とか何燉とかいふ名稱がついてゐるが、これはその料理法を示してゐるのであつて、大體心得てゐると、これはどうして作つたのだといふことは判る。

炒

炒鶏といふ料理は鶏肉へ片栗粉を加へ、豚の油と鹽と黄酒（糯米で造つたので紹興酒などもこの一種）、砂糖、醤油で味つけて炒る外に葱、生薑、白菜、薺、栗なども加へるが炒鶏片など云ふのは鶏肉を薄く切つたもので、炒は全て以上のやうな調味料を加へて炒りつけるもの、片がつくのは薄く切つた肉片で、鋤焼の肉の如きものをいふ。栗を茹でて皮を去り、實を入れたのが栗子炒鶏、白菜の芯の入つたのは菜心炒鶏など、それ／＼用ひる材料に據て名稱は異なつてくる。

次に蒸といふ料理法は蒸すのであるが、支那のはわが邦のと違つてゐて、蒸湯鴨などといふ料理は、ハム、干貝、蒙古産の茸、葱、薑、黄酒（前記参照）、醤油などの材料を鴨の臓腑をぬいた腹の中へ押し込み、大きな深い盆に載せ、充分に出し汁に浸した上からもおなじ深い盆で蓋をし、鍋へ入れて蒸してから更にとろ火で二時間位して喰べるが、鴨肉へいろ／＼の味が滲るとおなじに、鴨の脂肪がそれ／＼にしみ通るのだ。

鴨を載せるのと蓋の盆はピッタリ合つて、隙間のないことと、鍋の蓋も堅くすることを注意してある。

蓮の葉に柏餅のやうに雞鶏の肉片や牛豚肉、葱、薑などの味つけしたのを米粉で包んで、鍋で蒸すのを粉蒸肉と呼んでゐる。

燉といふのは湯より濃いスープを用ひる料理で、鹽だけで味つけするのを白燉とか清燉と云ひ、醤油で味つけしてあるのを紅燉といふが、燉魚翅（鱈の鰭の燉料理）、燉鮮魚（生魚の燉などいろ／＼ある。

燉といふのは所謂燉製で、支那の燉肉は粗い紙を鍋底に敷き、菜種油を一面に塗り、その上へ砂糖や香料を撒き、更に金網を蓋するやうに置き、煮てある豚肉とか腿を載せ、鍋

の蓋をし、枯草などを焚いて作るが、鍋底の紙が燃え、香料の香が移つて燉製になるのだ。

燉魚、燉鶏、燉青豆、燉鴿子（鳩の燉製）など、これにも種類が多い。

炸は澤山の油で揚げる料理で、炸蝦球（エビ肉揚團子）や炸粉肉片（豚肉天ぷら）など、これもなか／＼製法の數は澤山にある。

煨は蒸し焼きで、煨燻裏鶏といふのは、肥えた鶏を殺して、よく洗ひ、塩の中へ入れ、葱、薑、黄酒、醤油、水などを加へて、塩の口を嚴重にし、泥で封じ込み、枯草の中に置き、火をつけて蒸すのだが、この肉は保存に適し、夏に鹽漬の白菜などに混ぜて喰べると香りがよく美味である。

烘は蒲焼きで、烘鰻魚はわが邦の鰻の蒲焼と同じであるが、その製法が支那のは少し違ふ。

燉といふのは土鍋で煮るので、醤油が入つて煮るのが紅燉、鹽で味つけするのが白燉で燉燕巢（海燕の巢の鍋もの）、蛇汁燉鶏（蛇の出し汁で鶏鍋）など、燉といふのはとろ火で煮るので、黄燉鶏の如きは黄酒を混じ、三回も煮返すのだ。

煮も煮る料理だが、煮神仙鴨といふのは、鴨の臓物をぬいた跡へ葱、薑、鹽などを納め、黄酒を充分にいれた鍋で、六時間ほどゆつくりととろ火で煮る。

おなじ煮るのでも醤油で煮詰めて赤くなるのを紅焼と云ひ、紅焼鶏、紅焼鮭魚など何れもこの煮方である。

醃は一遍煮たのを冷却させ、三杯酢のやうにして喰べるので、醃鮮蝦は生きてる、エビをよく洗ひ、酒につけ、更にそれを鉢に移し、醤油、胡麻油、白砂糖、胡椒などと掻き混ぜて食膳に供する。

外に油で揚げる炮、爆、葛かけ料理が蜜餞、溜は柔いものを掻き廻しながら煮る。砂糖漬のやうに砂糖で煮つめるのが蜜餞、蜜餞山芋（山芋の飴煮）などこれだ。砂糖と油とでどろ／＼に糸を引くやうに煮るのは拔絲。肉を細く千切りにしたのは肉絲、卵の白味に葛を混じてドロ／＼に煮た汁を芙蓉。おなじ作り方で鶏の摺身をませたのは鶏蓉。

支那料理の献立を見ると、屹度以上のうちから料理名稱を見出だすであらうが、その材料に據て、作り方を想像し得るわけだ。芙蓉蝦と記してあれば、鶏卵のことを芙蓉の花に譬へて綺麗にいふので、これはエビ玉

子の料理であることが判り、炒鮮貝は貝の柱の甘煮、紅焼鯉魚は鯉の丸煮などである。

湯のつく料理は汁物で、羹は前述した通りに葛かけで、會鴨羹は合鴨の葛かけ煮。肉片湯は豚肉の薄切りスープ。麵のつくのはソバ類で、誰もよく知つてゐる又焼麵（焼き豚ソバ）とか、又焼雲吞麵（焼豚ワンタンソバ）など。

わが邦では五目と記してあるが、支那では八寶と云ひ、さまざまの材料の採り入れてある料理で、八寶飯は糯米に砂糖、栗、棗、梅、銀杏、蓮、瓜に果物など混ぜ合して蒸した御飯だ。

それから十錦といふ言葉もよく料理名に使つてあるが、これは豚、鶏、ハム、海參、鮑、エビ、苟、椎茸などを共に煮たもので、前の八寶にしる、十錦にしる、支那式の形容に過ぎない。

蛇料理には龍といふ字を用ひ、鶏は鳳、猫料理は虎。蛇と鶏との料理に龍虎、蛇と猪肉料理に龍虎菜といふのがあり、海南島土人など盛んに猫を喰べるさうだ。

動物の脳髓を支那では料理の材料に用ひるが、これも廢物料理の一つで、營養價があるといふので、わが邦でも喰べるやうに奨励する人もある。

豚の腦の
燻製

豚の腦の料理に炒豚腦といふのがあつて、腦を碗の水に浸け、薬で紅い血筋を巻き取るやうにし、水を捨ててから黄酒、葱、薑、鹽などで蒸し、薄く切つて用ひるのだが、これに味つけして蒜、エビ、苟、茸などを加へて、甘煮にし、酢を落して喰べる。

燻腦子といふのは、豚の腦の燻製で、前記してある支那式燻製法で作るが、甘草粉末とか香料を用ひ、臭味を消すことにしてゐる。

豚腦料理

川 惱花といふのは、日本人向きにした豚腦料理で、材料は豚の腦一つ、椎茸五つ、サヤインゲン五本、鹽、酒、ヒネシヨウガ、片栗粉、これにスープをコップに五杯。

腦膜、血管を去るには前に記した方法で、水に浸けて取るのが一番で、更にそれを酒、鹽、薑に浸してから薄く切り、これへ片栗粉をまぶして熱湯でゆでて取り出して置く。

椎茸は水に浸して柔かにし、腦と同じ大きさに切り、これも片栗粉をまぶしてゆで、サヤインゲンは青ゆでにして細く切り、次にスープを温めて、茶匙山もり一杯の鹽か醬油で調味し、前の材料をいれ、熱いうちに器にもつて喰べるのだ。

營養が高く、強壯的ホルモン料理として推奨されてゐる。

煮鴨腦湯は鴨の腦を十個ほど求め、ぐちやぐちに潰さないやうに腦殼から取り出し、煮

立てたスープにハム、苟、菌、干貝など適當に切つたのを鍋でよく煮て、これも熱いうちに食膳に供するのだ。

煮蝦腦羹はエビの頭から腦汁を絞り出し、適當に切つたハム、苟、油、鹽を一緒に鍋のスープで煮沸し、黄酒を注ぎ、再び煮立て、から齋を加へ、また煮て、味を調へてから片栗粉を加へてどろどろに攪拌し、矢張熱いうちに胡麻油、香味を加へて喰べる。

腦と臟腑とか臭味のある調理には屹度黄酒が打ち込まれるが、これはそれを消すためで、煮龜肉といふ龜の子料理、この肉も相當臭味があると見え、龜の肉三斤に黄酒一斤を用ひて煮てゐる。

龜の子料
理

龜の子料理などは珍しいから、ついでに記して置くが、これはスツボンでなく、川や田圃にゐる泥龜で、見かけが汚いので、人は嫌がるが、支那では婦人の強壯的食品としてゐる。

先づ龜肉三斤を水煮をし、よく洗つて細く切り、膜など去つてから、強い火にかけた鍋の油でじり／＼といたため、黄色くなるまで炒りつけ、黄酒をいれるが、これは多いほど臭味が消える。蓋を堅くし、中の氣の漏れないやうにして煮つけ、更に醬油、鹽、葱、薑に

豚の舉丸
料理

水を混ぜてとろ火で半日位は煮る。そして氷砂糖とか砂糖で味つけし、更に煮立て、熱い内に喰べるが、冷めたのを再び火にかけると、味が落ちて不味くなる。

豚の舉丸料理の醋溜伴子は豚の舉丸一つを漬して、薑、茴香、葱を加へ、水を張つてから舉丸が固くなるまでゆでて、皮を剥き、薄く切り、苟もおなじ位の大きさとし、葱も適當に切つて、鍋の油で舉丸をいためたのにスープを加へ、更に酢、醬油、砂糖で煮込んで味つけたのに片栗粉の水ときしのを注ぎ、どろりとした熱いうちに喰べる。

豚とか鴨の肝臓を炒りつけて作る料理に炒時件といふのがあり、炒肝絲といふのは豚の肝臓半斤ばかりを細長い糸のやうに切つて、水洗ひし、黄酒に三十分程漬け、水で洗つてから水をきつて置く。

最初に煮立つた油でこれ等の肝臓を炒りつけ、醬油、スープを混ぜ、砂糖などを加へて煮沸し、鍋から皿に盛る時に胡麻油、蒜などを香味として加へて喰べる。

青魚(川魚)の肝臓などを炒りつける料理を炒茶と云つてゐるし、豚の腸の料理で、廣東料理にはいつも出る蒸香腸。豚の腹の料理に燻猪肚といふのがあつて、これは豚の腹を引つくり返し、両面を石灰と鹽でこし、水洗ひ、石の上か何かで、章魚を太根で叩い

て柔くするやうに棍棒で叩いてから水洗ひし、料理にかかるが、煮て喰ふのでなく燻製だ。

おなじく豚の腸の燻製の腸、腸といふのがあつて、これは大小腸共に箸で引つくり返し、内外共によく洗ひ、甘草や茴香の香がつくやうに作る。

燻肚子は豚の腹にいろ／＼の物を詰めて煮るし、燻肺は豚の肺、燻臓は豚の臓物、煮糯米香腸は豚の腸を袋とし、それに糯米などを詰めて煮る。煮糯米香腸は豚の腹に糯米や卵をいれての料理。糟猪肚は豚の臓物を酒の糟漬にするのだ。

豚の卵巣を生のまま薄く切り、黄酒、鹽、薑の絞り汁に漬け、卵巣を油でいため、小さく切つた葱、椎茸を混ぜ、スープを加へ、更に鹽、酒、醬油などを加へて調味し、水とき

の片栗粉でどろ／＼に煮て熱い内に用ひる。
豚の腸を薑、胡瓜などと一緒に煮て喰べる涼拌腸絲。豚の背髓を材料にした高麗背髓は背髓三本を水に漬けて血管など去り、皮を剥ぎ、適宜に切つて、酒、鹽、薑などの絞り汁に漬け、天ぶらを揚げる調子で、片栗粉、上しんこの衣を卵の白味でつけ、崩さないやうに揚げてから、再び強い火で揚げ返し、香味を添へて熱い内に喰べる。

豚の卵巣
料理

肝臓料理

豚の腎臓料理

豚の腎臓料理としては炒腰片、おなじ材料を燻製にした燻腰片。外に三杯酢にする。腰片などがあるが、兎に角、あらゆる動植物共に廢物を巧みに利用してゐる點は驚く。しかもかうした廢物は現代醫學から見ても、充分に營養價のあることが證明されてゐる。

支那人は昔からこんな風な料理を喰べ、自然に營養を攝取してゐるばかりでなく、宴會料理などの献立の研究は、實に手に入つたもので、次から次に卓上へ出してゐる料理の順序を追ふて喰べてゐる分には、満腹しても決して氣持が悪くなつたりすることはない。

人糞で養殖する魚

これは揚州料理で有名だが、四五尺からある魚——青魚（鯖でない川魚）や草を喰つてるので草魚といふ頭がボラ、體が鯉に似てゐるのや、人糞で養殖してゐる鱈魚の頭ばかりを寄せ集め、醬油で煮た紅燒料理など、食通には悦ばれてゐるものだ。

豚や犬ばかりでなく、魚まで人糞で養殖してゐるところ、追に支那式ではないか。

わが邦でも生の魚は新しく見せやうとし、鯛に紅をさしたり、茹でた章魚に色づけしたりするが、支那でも生の魚の切身には、豚の血など塗つて、いかにも生き／＼してゐるらしいところを見せてゐるのがある。

赤蛙料理

赤蛙の腹を割いて、臟腑を出し、そこへいろ／＼なものを詰めて煮て喰べる料理が福建

省地方にあるといふが、外ではあまり見かけないやうだ。

支那人は動物の廢物ばかりでなく、人間の排物まで利用してゐる。人糞を肥料などにするのは勿體ないとし、豚や犬の飼料、前記した鱈魚の養殖餌にまで用ひてゐるが、その他、食料として、なく人體の排物を薬用とし、昔から利用してゐるが、これは曾て文藝春秋誌上に人體排物處方箋として載せたことがあるし、拙著「支那百話」にも再録してある。

若返り薬

外に珍しい秘薬として、昔から重用してゐるのに、動物の牡が生命線であるものを黃狗腎とか虎鞭と云つて、乾し固めたものを老人の若返り薬として珍重し、値も亦相當に高いので、普通の人には手に入らない。

大小便からとる人中黄とか人中白は尿ホルモンといふところであらう。

一見して桃の種みたやうにカラ／＼に乾からびてゐるが、人間の胎盤を蒸して、陽乾にしたもので、紫河車と云ひ、臍の緒や血管のあとがハッキリと残つてゐる頗る氣持悪いものだが、これも亦支那では強壯薬として、最も重じてゐるものだ。

人間の胎盤を薬用

カワウソの肝臓は水狸百肝と云ひ、新鴨腎といふ鴨の胃の乾物と共にホルモン劑としては根據あるものと云はれてゐるが、支那のかうした秘薬不老長生の名劑と昔から傳るうちに

も、随分迷信と非科學的のも少くないけれども、一方に現在の學說と一致する立派なものもあつて、一概に舊いと云つて排斥すべきでなく、大に醫學的に検討を要するものもあると説いてる學者もある。

蝙蝠の糞
を薬用

これ等の薬のうち、蝙蝠の糞を集めた夜明珠、糞虫と云れる五穀虫、針鼠の皮から製した刺狷皮、カマキリの糞である桑溲蛸、蛇の脱殻の龍衣、これはわが邦でも薬に用ひるところもある。

女の頭髮
黒燒藥

女の髪の毛を黒燒にした血餘、牡犬の生命線の乾物である黃狗腎、オットセイの生命線の海狗腎、鹿の生命線の鹿鞭、おなじく虎のがたね、卵のアマ皮を集めた鳳凰衣、鼠の糞の兩頭尖、龜の甲羅から採つた膠の龜板膠、ガマ油の粉末の蟾酥、虎の膀胱の解虎吐、中でも奇拔なのは虎の眼玉を乾し固めた虎眼、仔鹿の角を輪切りにした鹿耳、鹿角を燒いて粉末にした鹿角霜、便所の中に青竹の筒をさし込み、幾十日か経て、外から竹を通して透み込み、内に溜つた液體を乾したのが人中黃、小便壺の周圍に推積した沈澱物が人中白で、これがどんな病氣に效用があるかは、本草綱目といふ古い書籍に載せてある。かうしたホルモン劑と思れる珍奇なのが、支那には二百餘種からあると云れてゐるが、

人糞から
作る人中
黃

すべてが效用あるとは保證出来ないわけだ。

珍貴な不老藥とか、廢物を生かした藥物料理に就ては、まだ外に見聞したこともあるが、大體以上で支那人はあらゆる種類を活用し、利用してゐるかが判つたと思ふ。

十一 宴會・支那劇・支那樂器

支那の宴會では、料理の品数の多いのは、一卓五六百圓と云はれるのからあつて、贅澤は限らないが、先づ普通であると、七八圓からあつて、この一卓子に八人の定めであるが、十人位は着いて、充分に満腹し得る。しかし物價が高騰してゐるといふから、相當に高くなつてゐるのは當然だ。

宴會の招待状

宴會には必ず豫め招待状を出すのが普通で、結婚、壽宴などに就ては別項で詳述するから、ここでは雜事の招待宴などに就て記してみる。

支那人は路傍で、出逢つた知人などに、某日に貴下を何某料理店へ御招き致したいがお差支へなければ是非御責障を頂きたいなどと、調子のよいお愛想を云ふが、それを聽く相手も、ではその際は是非萬障繰合せ、お邪魔させて頂きませうなどと答へるが、これも先方に對しての儀禮で、日が経つに連れ、そんなことは双方共にケロリと忘れてしまつてゐる場合が多い。眞誠に招待する積りならば、紅帖カクハ（紅い紙片）に認めた招待状が来る。

新規開業の招待状

開業の招待状

吉消二月廿三日

敝號 開帳潔樽敬請

同順泰號謹訂

光臨

吉日二月廿三日、敝號（自店のことを謙遜して云ひ、字體も他の文字より小さくするのが普通だ）は開店する。杯を潔くして敬しく御光臨をお待ちする。

同順泰號（屋號）謹訂（謹しんでお約束する）

この招待状の書き方で、先方の御光臨の文字は外の字より一字上げ、大きく記すのだ。これは自店で開宴する場合に用ひる。矢張料理店から卓、椅子はいふまでもなく、箸から杯に到るまで運んで来て、料理人が材料を持ち込み、自宅で調理して客へ出すことになるが、支那料理は熱いうちを賞味するのが多いから、仕出しして料理店から運んでくるのは一般が悦ばない。

つまり出張料理で、支那ではよく行ふ、値段も料理店で開宴と大して違ひない。

會社の開業祝ひ招宴状

六月十八日

敝公司 開幕治癒恭候

光臨

元和公司謹訂

六月十八日に敝公司（これも自分の會社を譲渡して云ふ弊社のこと）開業、盃を準備し
恭しく御光臨をお待ちする。

元和（會社名）會社謹しんでお約束する。

凡て事業開始は開幕といふ。開帳とおなじ意味だ。

新築落成祝ひ招待状

新築落成
の招待状

本月十八日爲

寒舎 草葺落成潔掃候

光

仇振亞謹訂

移轉祝ひ
の招待状

本月十八日に寒舎草葺（自宅を譲渡していふ）が落成し盃を清くし光（御光臨）を候つ。
仇振亞は招待する主人の名、謹しんでお約束する。

移轉祝ひの招待状

是月初五日

舍間 遷移敬備薄酌候

光

孟晋成謹訂

本月五日（初は一日から十日までにつく）、初一（一日のこと）で文章では初一日と日を用
ひるのが多い。初二（二日）……初十（十日）で十一日からは十一日と初がなく日をつけ
て書く）舍間（自家を譲渡していふ）が移轉し、敬しく薄酌（粗末な飲食とこれも譲渡し
ていふ）を備へて御光臨を待つ。孟晋成（主人の名）謹しんでお約束する。
同郷會成立祝ひの招待状

同郷會成
立祝ひの
招待状

陽曆九月三日
陰曆七月廿六日

敝會成立敬具若點恭候

光臨

旅滬雲南同郷會謹訂

會址在重慶路二〇九
號上午十時行成立禮

これは茶話會の招待で、陽曆と舊曆を書き分けてゐる。支那の時日を記すにはかうした書き方が多い。舊曆は廢止した事になつてゐるが、商工農業のうちには依然として舊曆に據てるのが多いからの便宜を謀つてだ。

陽曆九月三日（陰曆七月廿六日）敝會成立し敬しく茶菓を備へ、恭しく御光臨を待つ。

旅滬（滬は上海のこと）、上海居留の雲南同郷會議しんでお約束する。

會址（會場）重慶路二〇九號（支那では號を用ひ、番地は用ひない）上午（午前、午後は下午）十時に成立式を行ふ。

送別會に招宴狀

送別會の
招宴狀

是月十五日爲

顧頡之君祖餞敬請

光陪

呂柏清謹訂

假座半沁園

本月十五日に顧頡之君の租錢（送別）に餞けするため、敬しく御陪席を請ふ。呂柏清（主人）謹しんでお約束する。

假座は假りの席は半沁園（庭園の勝れた料亭）。送別宴などはかうした名勝地とか庭園で開くことが多い。

友の歡迎宴に招待狀

歡迎宴の
招待狀

本月二十八日

爲邱炳鈞兄洗塵潔樽恭候

光陪

程天應謹訂

これは友人が外國などから歸つた場合、よくかうした歡迎宴を開く。

新年招宴
状

本月二十八日、邱炳鈞兄のため、洗濯（かれの風貌變に接すること）し、盥を清くし
恭しく御光來御陪席を待つ。程天應謹しんでお約束する。
洗濯はかうした歸朝の場合、宴會を開いたり、物を贈つたりすることを意味してゐる。
新年招宴状

月之初八日

深具春酌敬候

光臨

寒秋航謹訂

席設本宅申刻恕邀

支那の習慣として、新年に親友知人を招いで開宴することが少くない。これを請春酒と
呼んでゐるが、これもその一例。

月の八日、春の清酌を備へ敬しく御光臨を待つ。寒秋航（主人名）謹しんでお約束す
る。

席を本宅に設け、時刻になつて再び迎ひにゆかないのをお許し下さいの意。

端午節句の招宴状

端午節句
の招宴状

翌午敬備薄酌以賞端陽佇候

光臨

寒作民謹訂

端午節（舊五月五日）も、新年、仲秋節（舊八月十五日）と共に支那三大節なので、よ
く支那人は酒宴を催して客を招待する。

翌日正午、敬しく粗末な飲食を備へて端午節を賞でんとし、御光臨を待んで待つ。寒作
民（主人名）謹しんでお約束する。

仲秋節の招宴状

月之望日酉刻小酌賞月敬候

光臨

梅述祖謹訂

月の望日（十五日）酉刻（午後六時）に小酌し月を賞さんとし敬しく御光臨を待つ梅述

中秋節の
招宴状

重陽節の
招宴状

祖（主人名）謹しんでお約束する。

重陽節（舊九月九日）の招宴状

翌午備酌龍山藉賞重陽恭候

台駕

胡盛榮謹訂

席設龍山浩然亭内

舊曆九月九日の重陽節も亦支那人は野原へ出で、高い丘などに登つて野宴を開く習慣がある。

翌る正午、龍山に宴を整へ重陽節を賞でんとし、恭しく御臺臨を待つ。胡盛榮謹しんでお約束する。

席は龍山、浩然亭内に設く。

冬至に入つて後の招宴状

冬至の招
宴状

月之十三日爲頭九消寒治筵候

教

彭世欣謹訂

これも支那人は宴會を催す日で、一つの習慣だ。冬至に入つて後、九日目毎に集つて開宴するのを消寒會と呼んで居り、頭九は第一回の九日目のこと。第二回目のは二九、つまり冬至から十八日目に當る。

月の十三日は第一回の九日目の消寒會のため、宴を備へて御高教を待つ。彭世欣（主人名）謹しんでお約束する。

忘年会招待状

忘年会の
招待状

月之二十八日敬具小飲藉以餞臘恭候

雅教

朱文錦謹訂

普通の招待状

月の二十八日、敬しく小席を備へ、藉りて饗^{ウツク}（年送り或は忘年）として恭しく御高示を待つ。朱文^{シロコト}謹^{ウツク}しんでお約束する。

普通の招宴状

初二日巳刻聊備粗膳敬候
臺教

閏金如謹訂

二日巳刻（午前十一時）聊か粗^コ膳^{テン}を備へ敬しく御高教を待つ。閏金^{ニクニク}如謹^{ウツク}しんでお約束する。

當日の招宴状

即日酉刻治酌候
光

金祝三謹訂

當日の招待状

招宴状

當日午後六時小酌を備へ御光來を待つ。金祝^{ウツク}三（主人名）謹^{ウツク}しんでお約束する。

招宴状

謹定	月	日	下	句鐘	假座
			號	房間	敬屈
台駕光臨一紋勿却是幸此請					
			先生	台電	
			謹訂	月	日

この招宴状は料理家などで印刷してあるもので、右の餘白へ必要事項だけを記入すればよいやうになつてゐる。

謹^{ウツク}しんで〇月〇日午後〇時（句鐘）に假りの席を〇〇料理店〇號室に定め、敬しく^{ウツク}貴臺の御光臨、御示教を仰ぐ、御辭退なさらねば幸せである。此を〇〇先生の御覽を乞ふ。〇〇〇謹^{ウツク}しんでお約束する。〇月〇日（これは招待状を發送の日を記入する）

宴會出席承諾の返事

宴會出席
承諾の返

謝 遵 殿命謹領

某姓名謹訂

御命令に従ひ、謹しんでお受けするをお禮申上げる。某姓名謹訂。

これは宴會ばかりでなく、承諾した場合に應用してよい。

出席辭退の返事

出席辭退
の返事

心領敬

謝

某姓名謹訂

お志は有難くお受けするといふ、辭退する際に用ふ。これも、前の出席承諾も、用紙は名刺を用ひてもよいのだ。

かうした招宴狀が来て、出席を承諾をし、ここでは指定された料理家へ定刻に出かけた

とする。

多人數であると、主人とか家族が入口に出迎へ、一先づ控へ室へ案内する。とボーイが燃手巾ニエシキナといふ熱い湯の絞りタオルを持つて来てくれ、それで型のやうに顔や手を拭く。

お茶の出
し方

茶碗は両手で捧げるやうに、左の手で持ち、右手を添へる風にして、客の右側に置く習慣だが、これを客が受けるならば、矢張左手で受けるのが禮だ。

巻煙草の
受け方

西瓜の種を油で揚げた瓜子コウジ兒の小皿も持つてくる。更に巻煙草は必ず勸めるが、主人が取つてくれた際は矢張椅子より起ち上つて、それを受けるし、雇人なら腰かけたまゝ、禮を云へば宜しい。

煙草の火を點じてくれるのも亦、主人ならば起ち上つて、火のついたマッチを受け取り、煙草に點火すべきで、それを口に喰へたまゝとか、煙草へちかに主人の手から點火して貰ふと、禮を知らぬ人間として、以後よい感情は持たなくなる。これも雇人が點火してくれるのなら、マッチを自分の手に受け取らず、そのままに禮を述べて、點けても宜しいのだ。

さてこの控へ室で、外の客などと共に、瓜子兒コウジを嚙り、茶を飲みながら談笑し、開宴の

知らせを待つことになるが、茶は飲めば、側からすぐに注いでくれる。

折角注いだ茶だからなどと飲んでみると、料理を喰べない前、お茶で腹一杯、だぶくになつてしまふだらう。

お茶を飲まなくても、別に失禮になるわけでないから、飲みたくなければそのままに放置して置くことだ。

一體、支那では相當の家庭であると、客を招宴するのは、料理家より自邸の客間とか書齋庭園を開放するのが多く、單に飲食の贅を盡すばかりでなく、その主人が珍藏してゐる書畫骨董などを陳列し、この方面でも來客の歡待を怠らない。

料理の容器に粹を用ひ、玉盃などを備へ、勝れた庭を披露して客たちを悦ばせるとか、時には自家のコックが會て名家に奉職してゐたものであると、ちやんと着換へをさせ、來客の前へ連れてきて、かれを紹介するが、それはこれから出る料理がかうした男の手で調理されるといふ豫備智識を吹き込むとおなじだ。

主人は來客の好みに投ずるやうに會場を整理し、談話もその趣味に合ふやうにすること心遣ひ、客の知ること、能ふこと、喜ぶことを主眼とし、その個性に據るを努める。來

其會の場

主人の心遣

客も亦、主人の個性を迎へ、それに話を合せるやうに仕向けるのが、かうした宴會などの場合の第一要諦としてゐる。

大勢の客を招いだ際、獨り黙つてゐる人などがあると、主人は極力話題を向けて、話の緒口を引き出し、啞辯の人に對しても亦、話がしよいやうに誘導してゆく。

それは各自の職業に話題を持つてゆくことで、これならば大抵の人が話をしだしてくるが、決して國事とか政見、學理などは話さないのをよいとしてゐる。口角泡を飛ばしての議論などは支那の宴會では大禁物、どこまでも和氣藹藹たるうちに、談諧を飛ばし、一座を笑倒せしむるなどをよしとする。

一人だけで勝手に喋つてゐることも慎しまねばならぬし、他人が話してゐる横合から、その話を横どりして話すのも失禮だ。

話しながら那麽(そこで)とか這個(この)などといふ無意味な語句を頻りに繰返してみるのも嫌がられる。

或る會社の日本人の支那語通譯が、社長の訓示を履備してゐる支那社員に譯して聽かせた際、いつもの口癖になつてゐるのか、這個(このウ)と那個(あのウ)といふ句を繰返して

這個那個先生

たので、支那人はかれの姓名を呼ぶものがなくなり、いつか這個那個先生と綽名で呼ばれるやうになつてしまひ、いい加減馬鹿にされてゐた。

もう一人の通譯は、一句を譯しては明白麼（判るか）を繰返し念を押す男がゐて、かれのことは明白麼先生（判るか先生）と綽名で呼び、一方に甚だしいのは明白麼是明白、別的都是不明白（判るか判るが、外のは全て判らない）などと悪口を叩かれてゐた。

かれの支那語はあまり上手でないと見え、自分でも内心忸怩たるものがあつて、減け目を感じてゐたと見え、頻りと一句話しては明白麼（判るか）と念を押して訊いたわけであらうが、通譯を聞いてゐる支那人たちは、判るかといふ言葉だけは判るが、外の譯してゐるとは何だか一向に判らないと云つてゐるわけだ。

こんな風で無意味の語句をあまりに繰返すのも耳障りだ。

それから耳打ち、こそ／＼話も禁物。殊に支那婦人と話をする際は壯嚴尊敬の禮容を装はなくてはいけない。稼業女でもない、普通の家庭婦人と打ち解けた、親密振りの話方も悦ばれない。

宴席の準備が整ふと、客をそこへ案内をするが、主賓が居らない時は先づ朋友を先に

宴會で禁物のこと

宴會着席の順序
大宴會の送座

し、次に親戚、更に宗族、これも亦長幼を明らかにし、年配順で導いてゆく。

大宴會になると、送座といふ儀式を行ふが、これは主人が盃を手にし、何某先生とか何さんと客の名を呼び、その客の席に向ひ、敬しく杯を舉げて、客がそこへ來ると共に、酒盃を卓上に置き、客も答禮して席に着くが、近頃は客の姓名を記した紙片を、席に置いて送座の儀式は略されてゐるのが多い。

主人が酒を酌する時には、起立して盃をあげて受けるのが禮で、極めて懇意ならば盃の側へ掌を伸し、謝意を表示すればよい。

普通の宴席では一同が座につく前、八皿とか十二皿の前菜（つき出しとか摘み物）が卓上に列べてある。

前菜

鹽漬の鹹菜と味噌漬の醬菜を冷菜と云ひ、卓の中央に四皿出してあるので、四冷盆ともいふ。その側に煮た小料理の熱菜二皿、外に二點心とか二京果といふ菓子二皿。これが八皿の時の前菜の出し方で、これが十二皿になると冷菜と熱菜が二皿づゝ殖える。

菓子は高い料理でも、一卓に二皿と大抵定つてゐるが、最上等料理になると、六つの大皿

最上等料理

物、六つの中碗物、四つの乾物、四つの生もの、六つの冷菜、飯の菜が四皿などで、井や血類と共にそれに盛つてある料理も充分にあるから一卓八人では贅澤な位だ。
頭等全席といふのが、普通料理家での最上等で、燕巢（海燕の巢）、魚翅（鱈の鰭）、海參（なまこ）などの各料理が出てくるので、四五年前には一卓四十圓位であつたが、今では倍近いといふことだ。

二等海産料理

二等燕翅全席になると、燕の巢と鱈の鰭料理で、海參が入らないので、値も少し安い。魚翅席は鱈の鰭がこの一卓に出る料理の王座を占めるので、更に値が少し安く、燕菜席は燕の巢を主とするので、値も二三圓安い。

一等なまこ料理

頭等海參席は一等のなまこ料理で、いろいろの料理の出るうちで、なまこ料理が外を代表してゐるので、これは大抵最上等料理の半額位だ。

便席

次に二等海參席は少し皿数が減るので、値も安くなる。
一番簡単な宴席料理は便席といひ、一卓八圓から十圓位のもあつた。これでも四つの大皿、四つの煮物、飯の菜四皿、四冷菜、菓子一皿の料理で、一卓八人や十人で喰べても満足したものであつた。

定食

支那の定食は和菜といひ、これは二三人から四五人で利用し得る一卓料理で、料理二皿にスープ物一皿で一圓から料理一種増す毎に五十錢増して、四つの大皿物、四つの煮物、四冷菜で一卓六圓のまでである。

以上は支那料理店の一例を示したままで、土地とか格式により、その値段もまち／＼であることはいふまでもない。

西瓜や南瓜の種の瓜子兒は出してあるから、客は先づ本格の料理が出る前、これ等の前菜とか瓜子兒を摘んで談笑してゐる。

そのうちに料理番が腕を振つた熱菜が、大皿や大井、底の深い皿に盛られて、次から次と卓上へ運び出されてくる。

ボーイへ祝儀

人数の時は別とし、一人か二人で招かれた時、そこが料理家であつたならば、宴席へ着く前、ボーイへ若干の祝儀を呉れてやることは、主人の面子をよくするので悦ばれる。

本格の料理が出る、最初のを頭道、二番目を二道……などと呼んでるが、頭道菜（一番目の料理）が出た際、主人は客へ一遍だけ酌をして廻るので、料理は先づ主人の側へ運び出し、客の側へは持つて来ないのが禮だ。

宴会の中
趣み

燕菜（海燕の巢）とかエビ、スープ料理は匙を用ひ、鱈の鱠、鶏、鴨の料理は箸で、菓子を食べると同時に花茶か杏酪湯を出す、飯は任意に幾ら食べても差支へない。宴会が長くなり、料理の多い献立であると、甘い料理を出して、一度中憩みをし、煙草を勤めて廻り、或は別室で話をしたり、庭へ出るとか、互ひに詩を作つたりする。そして再び第二回目の宴会に移るが、日本式の二次會と違ひ、他所へ出かけて飲み廻るわけではない。

大宴会

大宴会になると、豫め献立表が示してあつて、第二次會にはどんなものが出るか、前以て判つてゐるから、適當な好きな料理に箸をつけてゐないと、最も代表的な佳い料理が出た時、満腹で箸をつけられないで、残念ながら見てゐなければならぬ端目になる。

宴席の應酬

支那料理はわが邦のやうに、各自に装ひわけてくれず、大皿とか大井のから思ひ／＼に箸をつけて喰べたり、散蓮華で掬つて飲んだりするので、時には先方が喰べてる箸で、料理をはさんで呉れたりするが、これは極めて親密な所作であるから、嫌つてはいけない。むしろ悦んで頂くことにするのだ。これがまた禮である。

卓上に冷水が井に置いて出してあるが、これは西洋式に指さきなどを洗つてはいけない。

支那酒の
飲み方

蜜餞香焦（バナナの餡煮）とか蜜餞山芋（山芋の餡煮）などの舌を焼く熱い餡煮料理を喰べる際、箸ではさんで水へつけて喰べるのだ。

わが邦で肉の鋤焼に玉子をつけて喰べるとおなじ心理から出てゐる。

それから支那酒といへば、種類に構はず、氷砂糖とか砂糖漬の青梅などを、盃にいれ、紹興酒を飲んでる人もゐるが、これはこの酒の味を殺すもので、アルコール分の強烈な高粱酒とか焼酒などにいれて用ゆべきだ。

火鍋子

便席（簡単な酒席）で、火鍋子（鍋とコンロを一緒にした銅錫製で、鍋の中央に烟突が立つて居り、廻りに鳥獸魚肉や野菜類をいれ、下の火氣と煙は烟突からぬけるやうになつてゐる）が出ると、宴会は終りで、この汁を飯にかけて喰べるが、これは北支那地方のもので、南支那では見かけない。

宴会中に座興を添へるため、支那藝妓を呼ぶことは出来るが、これはボーイに話せばすぐに知らしてくれる。

その代り藝妓は弦子（三味線に似て胴の丸い、柄の長い楽器）弾きの老爺を供につれて、宴席へ乗り込んで、芝居の唄や流行唄を歌つてみせ、客の間を酌をして廻る。

土地に據ては酌をしない、ツンと済してゐる藝妓もゐるさうだが、北支那のはなか／＼
愛想のよいものだと思つた。

支那はいかに懇意の間柄でも、盃の献酬はしない。たゞ乾盃と叫んで、相手に敬意を表
する場合、盃をあげてみせ、先方もおなじくすると、ボーイが双方の盃へなみ／＼と酒を
注ぐから、それを飲み干して、盃の底を見せ合ふことを繰返してゐる。

乾盃

これがわが邦での、まづ一杯いかゞといふので、盃をさしつけると同じことだ。
乾盃をされて、酒の飲めない場合、もう駄目だとか、飲めぬといふことを言葉に出すの
は失禮なので、たゞ手を卓の下へさげ、極めて細かく左右へ振つてみればよい。あまり
大袈裟に振つてみせるのもいけない。

拒絶の手 振り

何か拒絶の意思を通じる場合、日本式に手を振るのは、何のことか意味が通じない。支
那では指を揃へて立て、戸か門でも押す調子にして、そのまゝ左右に動かしてみせれば、
謝絶とか拒絶の意になるが、宴會で酒をことわるのに、この方法はいけない。矢張前述の
やうにするのが一番だ。

宴が終つたなら、用事があるのはその旨を主人に通じ、禮を述べて立ち去つてもよいが、

普通は再び控へ室に退き、そこで茶など飲み、暫し談話をして別れる。

料理がすつかり出完ると、擦手巾ニモシヤウチ（熱い湯の絞リタオル）を持つて来てくれるから、
これで顔や手を拭く。

夏でも、冬でも、殊に北支那は黄土が街頭に舞つてる日が多いので、このお絞リ（手拭）
は誠にさつぱりして氣持がよいものだ。

酒を酌め
る方法

なほ支那の宴會では酒を飲ませる方法がいろいろあつて、拳を打つて負けると罰杯、象
牙の籤を引き當てたものが杯を重ねるとか、昔は藝妓の靴などを利用し、これに或る距
離から小豆とか豆を弾き擲げ、入らなかつたものが罰杯など、その外、時と場合で各種の
酒令があつて、この酒飲の規則に據て、各自が酒を飲むやうに仕組んでゐる。

支那人との交際で、酒も飲めず、煙草も飲めないのは、鳥渡手持無沙汰で、宴會などに
は困ることがあるかも知れない。

宴會で、拳でも打つやうになると、興は酩酊たげなほとでもいふべく、賑やかな談笑、天井も割れ
る程である。殊に北支那の人々はカン高い調子で物をいふし、秘密な話も出来さうもない
やうな大聲で話をする。

かれ等は子供のうちに聲帯を破られてゐるのだともいふし、耳が多少聾になつてゐるからではないかなどと疑りを持つ外國人もゐる。

それは支那の私塾、寺小屋式の學校になると、朝から晩まで教師の讀む通り、文字に就て大聲に讀んでみるのは、一字一音で、その文字の数が甚だ多いと來てるので、かれ等はどうしても文字の讀み方を覺えるのに、幾百遍となく口に出して繰返して覺え込む習慣になつてゐるのだ。

そこで支那の田舎へゆくと、數町を離れてゐる山の向ふに、學校が存在してゐることはすぐに判る。

なぜならば、その方面から數萬匹の蜂の唸り聲の如き、兒童たちの讀誦の聲が凄じく流れ傳つてくるからだ。

かうして騒々しい學校で、幼い頃から育てられるのでどうしても微妙な旋律などといふのはピンと頭に来ない。耳を聳する音楽か突き刺すやうな音色の笛か、芽出たい時の爆竹騒ぎで、かれ等が讀誦する音楽は日本の嬰兒に聽かしたならば、屹度虫を起すやうな種類が多い。

私が支那の奥地の寺小屋式私塾を見た時、そこは寺院の一室で、老教師は炕の上に小机を置き、前には生徒が三四十人、机を並べ、出きる限りの大聲で、勝手に小學だか論語だかを素讀をしてゐた。

そこでは話をして、その聲音が判らない程に騒然たるものだが、老教師は胡座を組み暖い春の日であつたが、窓から射し込む陽光に馴れてゐると見え、長い柄の煙管を机上に置いたまゝで、コクリ／＼と居睡りをしてゐたが、時折薄眼を開け、生徒たちへ怠けるでないぞと呶鳴つてゐる。

月謝の代りに、栗とか鶏を持つてくる子供が多いと話してゐたが、兎に角話も判らない程に騒々しい場所で、小さい時から過してゐるので、他に負けまいと大聲を張りあげるところから聲帯を損ね、耳の方も自然に感覺が鈍くなつてきてゐるのだといふ説も、あながち否定し得ないかも知れない。

結婚にしても、葬式にしても、その他の奏樂が銅鑼や胡弓、板子（板を叩く）を始め金屬製樂器のいかに調子の高いことであるかは、誰でも驚いてゐるであらう。

この代表的は支那芝居だ。

初めて支那芝居を聞いた日本人の誰もが異口同音にいふことは、何といふ騒々しい奏樂であらうか、二三十分も辛棒してゐると耳が聾になりさうだといふが、眞正にその感は免れない。しかし長く支那に住んで、馴れてくると、環境と同化してゆくのか、調子外れと思つた芝居の音楽にさへ、何ともいへない調和を見出だしてくる。

芝居は聽戲といひ、看戲といふ芝居を見るといふのは、新派とか新劇に限られ、外のはすべて唄を主とした歌劇で、殆んど背景とか大道具などがなく、わが邦の能に似てゐるが、勿論能は支那劇から轉化したものに違ひない。

歌詞で筋を運び、仕草と臺白がこれを援けるわけで、小道具なども極めて單純なものを、用ひ、卓子とか椅子に乗れば城壁とか高い丘などに上つたことを意味し、鞭を振つて乗馬を形容させるとか、門の門をばづしたり、はめたりする仕草は門を開閉のこと、もしもかうした動作をしないで、役者が對立して唄ひ且つ語るのには門の内と外との場合。門を出入るのは右足を軽くあげ、敷居を跨ぐ眞似をする。椅子の片脚をあげ、腰をかがめるのは小さい門の出入。

着物の裾をつまみ、腰をかがめ、横に小刻みに歩くは階段を上下する意。車に乗つてゐる

のは水平にした茶褐色の旗の間にはさまり、その旗を後から従者が持つて押してゆく。

白い紙を丸く切つて兩眼にべつたりと貼つてゐるのは盲目、旅行とか病氣には長い茶色の鉢巻をし、眼のふちに白い點をつけたのも病中、長い白い鉢巻を耳から垂れてゐるのは幽霊、細に三角紙を貼つて出ないところが日本と支那との亡者の相違だ。

斬られると赤い布を出し、頭にこれを覆ふたのは死。しかし女が頭に飾りのある赤い布を冠つて出たからとて、死んだ幽霊かなどと早合點してはいけない。

これは縁儀のよい結婚の時であるから、赤い布も一概に血とか死を意味してはゐない。火事とか化物の出るのは黄硝石を燃し、日本の芝居でいふ怪し火とか狐火のやうに焰をあげてみせる。

權を持つてゐるのは船上、櫓に布をつけたものが付き纏ふのも船中、波模様旗は水中、神仙が登場には雲模様旗を持つて出る。石垣を描いた旗は城壁、その中央から出入るのは城門、鞭を持つてゐる者がくゞる眞似をするのは馬を繋ぐ場合を示すのだ。

後から小さい兩開きの幕をかざすのは輿に乗つてゐる態。椅子と卓とを並べ、その上に乗つてゐるのは山へ登つたこと、四つの椅子と兩開きの幕は寢臺、二つの椅子に兩開きの幕を

つけ、それを絞つて、中央に卓を置くと祭壇とか法廷。幽霊と物語りする人は黒い紗の布を冠つてゐる。

この外、多くは手眞似足眞似で意味を通じ、年代とか職業、何をしに登場したかなどは唄と臺白で説明してゆく。

上場門と
下場門

支那芝居はのべつ幕無しといふ通り、開演から終演まで、舞臺に向つて左方の上場門（登場口）から出て、右の下場門（退場口）から退き、全部の役者が舞臺を退いた時が一幕終りで、すぐと次の芝居の役者が引き続き登場してくる。

見馴れないと、どこが幕の切れ目か判らないし、通し狂言といふのは少く、大抵二三分から一時間前後の一幕物を幾つか並べて、一興行の定めとしてゐる。

日本へ來
た支那芝
居

支那芝居は先年、梅蘭芳、綠牡丹、韓世昌、小楊月樓各一座が東京の帝劇や歌舞伎座へ出演してゐるから、聞いた人は知つてゐると思ふが、相當に賑やかな奏樂であり、伴奏である。本場の支那であると、舞臺の中央に陣取つてゐるこれ等樂師の一團は、演奏中に手洗はかむ、啖は吐く、なか／＼變つてゐる見物であるし、役者も舞臺で、自分の持役が一句切りになると、長い袖で蔽ふてはゐるが湯だか水だかを飲んでゐるのもあつた。

わが邦へ來た支那劇一座のうち、韓世昌が珍しい崑腔である外、京調とか京劇と云れる徽腔ばかりであるが、支那では全國を通じ、この京調が流行し、滿洲には梆子腔といふ芝居も盛んであつたこともあるが、近頃は矢張京調に押されてきた。

京劇と樂
器

京調は北京で盛んになつたので、かう呼ばれるに到つたが、この芝居の曲は徽腔又は二黄、西皮から成つてゐるので皮黄とも云れ、湖北省の黃陂から起つて、支那南北を風靡して隆昌になつたが、二黄は圓穩、西皮は悲壯の感を催させる曲で、囃子は胡弓に似てゐる胡琴が主樂器であるが、鼓のうちの太鼓と小鼓、この小鼓は單皮鼓とも云ひ、三本脚の臺に載せてある厚さ五寸位、直徑七寸位の木をえぐつて皮を張り、底に直徑一寸位の穴をあけてあるもので、これを右手の撥で叩きながら左手には四つ竹に似てゐる板で、カチカチ調子を取る。外の樂器はこれにリードされてゆく形になつて、大鑼、小鑼、喇叭、鉦、鈸（銅盤を打ち合す）月琴、南弦子（三味線に似てゐる）などを合奏する。

崑曲

崑曲或は崑腔は江蘇省の崑山から出たもので、所謂南曲であつて、低調合唱に適してゐる俗音だが、極めて優雅で、難解の句が多い。

主樂器は横笛で、懷鼓、單皮鼓、鉦、簫、大鑼、小鑼、板、笙、琵琶、月琴、胡琴、海

に爪を嵌めて糸を弾くのだ。

これは日本の三味線が糸を弾くと共に胴の太鼓を打つことが屢々であると異り、多少の共鳴りはするが、糸を弾く響きのみである。

宴會で藝妓などを呼ぶと、伴奏の老爺が抱へて来て、妓の唄に合して弾くのはこの弦子である。

支那の舞臺には花道や橋掛りはなく、役者の出入りは正面後方の左右にある口からであることは前述した通りであるが、舞臺下の土間を池子と云ひ、簡単な屋外宴會場にでも用ひるやうな粗末な細長い臺が卓代りに置いてあり、腰かけも亦細長い、幾人かが掛けるものだ。

卓代りの臺には、瓜子兒や茶碗を載せ、夏ならば西瓜位は割つて喰べながら芝居を聴いてゐる。

出方がたへず熱手巾（絞りタオル）を持つて来るし、お茶をさして廻り、茶館のボーイと同じく、お茶の注ぎ方にいろ／＼の技巧があつて、上から注いでも一滴をも外へ流さないのをよいとしてゐる。

芝居の場

土間の池子は上等の席でなく、後は立見席、階上の兩側、階下の棧敷に當るところが席とか廂座といひ、上等席だ。

以前には一二幕後に場代を集めに來たもので、それまでに入場見物し、面白くなければそのまま出てしまつても差支へなかつたが、近頃はかうした制度は少くなつた。

芝居が高潮に達すると、好（よいぞ）とか嗓子好（喉がよいぞ）などと掛聲をして、讚美するところ、わが邦の大向ふが音羽家とか大統領などの掛聲に似てゐる。

出演する役者の役柄により生、且、淨、丑に分けて、男優を名角、女優を坤角と呼んでゐるが、袁世凱が洪憲皇帝の夢を實現して、明智光秀の三日天下式に天下を取つた少し前、女優一座は風紀を亂すといふ筋で、一切を嚴禁し、かの女たちは全て妓女に早變りしたこともあつたが、近頃では復活し、男女優合演の一座なども現れてきた。

役柄のうち生といふのは男役で、唄は一體に調子が高く、老生或は鬚生とでも云ふのは繩暖簾式の長い髯を耳の附根から鼻下へかけダラリとさげ、口を蔽ふてゐるのは唄を歌ふに妨げにならないためと云れる。顔を隈どり、塗らないで、唄を主とし、忠臣宰相學者に扮するので、孔明、伍子胥などの類。

生

芝居の役

紅生は髯はあるが、面を紅く染め、唄が主で、關羽の如きはこれだ。
文武老生は老生に武人役の加つたもので、唄の外に立ち廻りなどをし、岳飛や黃忠に扮するもの。武老生は老生の立ち廻り専門。

武生は髯がなく、立ち廻りを主とし、武藝に長じてる、華やかな趙雲などの役。

小生は二枚目、若旦那、年少の英雄、色男役で、このうちに小役の娃娃生がある。

崑曲での末とか外は老生に似た役柄だ。

且は女形の總稱で、花且は唄より仕事を主とし、藝妓淫婦などの妖艶な役どころ、崑曲では貼といふ。

青衣或は正且は唄を主とし、端麗な節婦烈女役。

閨門且は花且の一種、小且ともいひ、若い娘などに扮するもの。

武且は女武者、武藝は柔かに荒つぽくなく、どこか美しい型の立ち廻りをみせる。

刀馬且は武且とおなじだが、馬に乗つてるのが違ふ。

老且は老女役、唄を主とする。

彩且或は女丑は女の道化方で、面の中央を一寸白く塗る。

淨は敵役で、これも男役ばかりだ。

大花臉は黒頭、大花面、銅鑼淨とも云ひ、顔を一色か二色で隈どり、唄を主とし、仕事も重々しく、元老大臣に扮し、姚期の如き役柄。

架子淨は大花臉と變りはないが、奸雄などの敵役で、曹操などの類。

武花臉は顔を二色以上に隈どるところから二花臉といふが、神猛な恰巧をしてゐる敵役で、立ち廻り専門だ。

次は丑(道化役)で、文丑は文人役の道化方、面の中央を小さく白く塗る。宦官など。

武丑は開口跳とも云ひ、武人劇の道化役で、矢張鼻柱から眉間にかけて顔の中央を白く塗り、烏帽子の如きものを冠り、チョビ鬚、素迅こくて精悍な態をみせなくてはいけない。

以上の役柄のうち、異様な隈どりを拾つてみると、淨(敵役)の黒仕立ての青隈、鼻柱の黒い線など、どこか狸に似た感じがして、支那人があれを見て凄味を感ずるといふから聊か奇異の思ひをしてゐる。

雷公(雷神)の隈取も亦珍しい。額と兩頬と顎へ赤く渦巻を描き、閻魔さまの冠る赤い冠をし、赤い袍を着、両手に圓い鏡を以て、銅鑼の音と一緒に樂屋口から舞臺へ跳ね出し

笛、弦子などを合奏し、これに和して唄ふのだ。

外に支那芝居として餘り一般化してゐないが、秦腔と弋腔（高腔）がある。

秦腔は梆子腔ともいひ、滿洲地方に盛んであつたが、山西から起つて、陝西省から滿洲へ移つて流行した。曲は激越な俗音で、上品でないところから鄭衛の音とし、支那人は排斥するのが多い。

これは女優が唄つて演ずるのが多く、哀婉凄楚の調子を帯び、胡琴に似てゐる碗琴が主樂器で、大鑼、小鑼、鈸（銅鑿樂器）、笛、大鼓、小鼓などの外、拍子木のやうに叩く梆子と呼ぶ幅一寸、長さ四五寸位の木の板を左手の掌上に持ち、右手に一尺足らずの木棒を持って、カチ／＼と叩くのがあるところから、梆子とも呼んでゐる。

この曲の主樂器である碗琴は呼琴とも云ひ、南洋の椰子の實を胴として作つたもので、外は前述した西皮の胡琴と構造は同じだ。

京劇の二黃西皮とか崑曲では決してこの梆子は用ひないから、支那芝居で棒で板を叩いてる樂器があつたなら、秦腔だと思へば間違ひはない。

前者をグランドオペラとすれば、後者はコミックオペラとでもいふべく、高尚と卑猥、

高腔

幽雅と低俗との相違があつて、昔から官廷とか豪家の壽宴その他の催しの餘興に、西皮二黃の京劇は演じてゐるが、秦腔は演じたことはない。下層社會に歡迎されてる芝居だ。

次に弋腔（高腔）は江西省の弋陽から出たもので、大鼓、小鼓、大鑼、小鑼、板などの打樂器だけの伴奏で演ずる歌劇で、笛や弦子のやうな弦樂器を一つも用ひないので、曲は殺伐の調があると云れてゐるが、質樸な田舎の音樂を聯想させる。

これが現在支那芝居の基調をなしてゐる音樂であつて、これに和して俳優は唄ひ、所演してみせるのだ。

弦子

それから支那の樂器として最も普通に行れる弦子、これは男子が弾き、女子は弾かないため、柄がわが邦の三味線から見ると頗る長く、丸い胴に張つてゐるのは印度か南洋産の蛇皮で、蛇味線とか蛇皮線と呼ばれてゐる。

昔、南洋方面から移入してきた樂器に違ひなく、前述した椰子の實を使ふ呼琴（碗琴）と共に支那に發生したものでない。

糸は三味線とおなじく大中小の三本で、馬（駒）の形は違つてゐるが、用ひてゐるのは同様で、弾くのに撥は用ひず、わが邦の琴を弾くやうに右手の拇指、人指指、中指の三指頭

に爪を嵌めて糸を弾くのだ。

これは日本の三味線が糸を弾くと共に胴の太鼓を打つことが屢々であると異り、多少の共鳴りはするが、糸を弾く響きのみである。

宴會で藝妓などを呼ぶと、伴奏の老爺が抱へて来て、妓の唄に合して弾くのはこの弦子である。

支那の舞臺には花道や橋掛りはなく、役者の出入りは正面後方の左右にある口からであることは前述した通りであるが、舞臺下の土間を池子と云ひ、簡単な屋外宴會場にでも用ひるやうな粗末な細長い臺が卓代りに置いてあり、腰かけも亦細長い、幾人かが掛けるものだ。

卓代りの臺には、瓜子兒や茶碗を載せ、夏ならば西瓜位は割つて喰べながら芝居を聴いてゐる。

出方がたへず燃手巾(絞リタオル)を持つて来るし、お茶をさして廻り、茶館のボーイと同じく、お茶の注ぎ方にいろ／＼の技巧があつて、上から注いでも一滴をも外へ滾さないのをよいとしてゐる。

芝居の場

土間の池子は上等の席でなく、後は立見席、階上の兩側、階下の棧敷に當るところが麻席とか麻座といひ、上等席だ。

以前には一二幕後に場代を集めに來たもので、それまでに入場見物し、面白くなければそのまま出てしまつても差支へなかつたが、近頃はかうした制度は少くなつた。

芝居が高潮に達すると、好(よいぞ)とか喉子好(喉がよいぞ)などと掛聲をして、讚美するところ、わが邦の大向ふが音羽家とか大統領などの掛聲に似てゐる。

出演する役者の役柄により生、且、淨、丑に分けて、男優を名角、女優を坤角と呼ぶが、袁世凱が洪憲皇帝の夢を實現して、明智光秀の三日天下式に天下を取つた少し前、女優一座は風紀を亂すといふ筋で、一切を嚴禁し、かの女たちは全て妓女に早變りしたこともあつたが、近頃では復活し、男女優合演の一座なども現れてきた。

役柄のうち生といふのは男役で、唄は一體に調子が高く、老生或は鬚生とでも云ふのは細暖簾式の長い髯を耳の附根から鼻下へかけダラリとさげ、口を蔽ふてゐるのは唄を歌ふに妨げにならないためと云れる。顔を隈どり、塗らないで、唄を主とし、忠臣宰相學者に扮するので、孔明、伍子胥などの類。

芝居の役

生

紅生は髻はあるが、面を紅く染め、唄が主で、鬨羽の如きはこれだ。
文武老生は老生に武人役の加つたもので、唄の外に立ち廻りなどをし、岳飛や黃忠に扮するもの。武老生は老生の立ち廻り専門。

武生は髻がなく、立ち廻りを主とし、武藝に長じてる、華やかな趙雲などの役。

小生は二枚目、若旦那、年少の英雄、色男役で、このうちに小役の娃娃生がある。

崑曲での末とか外は老生に似た役柄だ。

且は女形の總稱で、花且は唄より仕草を主とし、藝妓淫婦などの妖艶な役どころ、崑曲では貼といふ。

青衣或は正且は唄を主とし、端麗な節婦烈女役。

鬨門且は花且の一種、小且ともいひ、若い娘などに扮するもの。

武且は女武者、武藝は柔かに荒つぽくなく、どこか美しい型の立ち廻りをみせる。

刀馬且は武且とおなじだが、馬に乗つてるのが違ふ。

老且は老女役、唄を主とする。

彩且或は女丑は女の道化方で、面の中央を一寸白く塗る。

淨は敵役で、これも男役ばかりだ。

大花臉は黒頭、大花面、銅鑼淨とも云ひ、顔を一色か二色で隈どり、唄を主とし、仕草も重々しく、元老大臣に扮し、桃期の如き役柄。

架子淨は大花臉と變りはないが、奸雄などの敵役で、曹操などの類。

武花臉は顔を二色以上に隈どるところから二花臉といふが、猙獰な恰巧をしてゐる敵役で、立ち廻り専門だ。

次は丑(道化役)で、文丑は文人役の道化方、面の中央を小さく白く塗る。官官など。

武丑は開口跳とも云ひ、武人劇の道化役で、矢張鼻柱から眉間にかけて顔の中央を白く塗り、烏帽子の如きものを冠り、チョビ鬚、素迅こくて精悍な態をみせなくてはいけない。

以上の役柄のうち、異様な隈どりを拾つてみると、淨(敵役)の黒仕立ての青隈、鼻柱の黒い線など、どこか狸に似た感じがして、支那人があれを見て凄味を感ずるといふから聊か奇異の思ひをしてゐる。

雷公(雷神)の隈取も亦珍しい。額と兩頬と顎へ赤く渦巻を挿き、閻魔さまの冠る赤い冠をし、赤い袍を着、兩手に圓い鏡を以て、銅鑼の音と一緒に樂屋口から舞臺へ跳ね出し

てくるが、日本の雷さまは素ッ裸體に虎の皮の褌ふんどし、小さい太鼓を一面、腰の廻りにぶら下げてゐるのに、土地變れば品變るとは云へ、支那の雷公は鏡を兩手に搦にぎんで、ピカ／＼させやうといふわけだ。

顔に描いてある四つの蚊取線香のやうな渦巻はごろ／＼と鳴る太鼓を象取かたどつたわけであらうか。

おなじ淨ずいでも三枚目の敵役、半道はんどうは口から上を直角の紅隈べにぐまで、鳶とびの嘴くちばしのやうな尖つた赤い頭巾を載せてるのも珍しい組だ。

河の神は猿隈さるぐまに、眼の縁まぶたを黄色く塗り、水色の頭巾で手に大きな笏しやくを持參だ。道化役のうちで、鼻の頭を赤く塗り、でん／＼太鼓を持つて登場する場面がある。

城隍ちやうほう神かみ或は土地神は産神うぶかみの役どころで、赤い衣裳に顔はお面を冠つたやうに眞白く塗り立て、赤い點々がつけてあるのは、疱瘡かそうがら刺さをも意味してるといふ。

亡者の扮装

亡者が爵金うしきんの道服、水淺黄の投頭巾なげづかみで現れてくるのがあつたのは、鳥渡意外だが、日本の芝居の幽霊と較べてみると面白いではないか。

芝居の材料

かうした役者の演ずる藝題の濫本の多くは新作物を除き、在來の演義小説類から取材し

たので、その一幕物を類別してみると、三國志から出てゐるのが九十種近く、水滸傳と隋唐演義が各二十餘種、この外に東周列國志、兩漢演義、封神傳、說岳全傳などからも十種乃至二十種内外、今古奇觀、西遊記から抜いたのも少くない。

そして全國に流行し、現在隆盛である京劇は北京の口語體を用ゐるし、時には巧言花語をあやつり、ここには偏僻な地方語や譯の判らない言葉など滅多に用ゐてないので、これ等の支那脚本を研究することは、支那人の風俗や氣質など即ち國民性に通ずることを得るので、支那を知らうとする人には頗る効果のある捷徑ちやくけいである。

支那芝居の脚色を知るはいふまでもないが、支那の歴史の側面觀、社會の内情をも知るし、支那文學の趣味を辿たどることを得て、茫々三千年に渉る天下國家の大事から、市井しやう閑巷かんきやうの瑣聞さごんまで、社會萬般の出來事を總て網羅し、舞臺に登場する人物は王侯大人、英雄奸傑、才子佳人、烈婦義僕等があつて、その舉動は千種萬様、或は忠烈世を動かすものがあるかと思へば、喜樂よろこ歡よろこぶべきものがあり、或は悲哀嘆すべきものがあるかと思へば、滑稽笑ふべきものがある。或は男女の情愛を説いたものがあるかと思へば、神仙怪異を仕組んだものがあるといふわけで、小説などより面白く、簡單で、變化に富んでゐる。

芝居は正史の側面

支那芝居は日本で見られなくとも、その脚本はあちらにゐる知人に頼めば容易に入手し得るし、草本式であると、七八種の脚本を集めてあるので、僅かに一冊二三錢位だ。

支那人と芝居は昔は王侯から匹夫まで、上下を通じて狂に近いまで好きで、宮中の外苑に舞臺を作り、役者の演戲を見るばかりでなく、王侯大官自らが粉墨して舞臺に立つたものさへ澤山にゐる。

革命黨と 新派劇

日本の新派劇の前身、壯士芝居當時の意氣を持つて、支那革命黨の志士、オウレン黄興その他が舞臺に立つて、その主義の鼓吹に努めたといふ事實などもあるが、これは趣味道楽からといふのではない。しかし現在なほボロを纏ふ苦力たちまで、道を歩きながら芝居の唄の一節を口ずさんでゐるのが多い。

眞続に支那人は芝居好きの國民だ。

宴會と芝 居

都會でも、田舎でも、祝儀不祝儀にも、五十歳の誕辰祝ひに、三日間も晝夜打通して、一流俳優を買ひ切つて、芝居を演じさせた有名な將軍もゐるし、結婚のお祝ひ芝居、葬式の供養芝居、豊作だから芝居、飢饉年の義捐金募集の芝居、寺院喇嘛の開帳から市場の開業、何でも芝居でなくては夜が明けないやうな芝居流行だ。

北京の有名な呉服店では朝から夜まで、引つきりなしに店頭で、支那芝居の蓄音機のレコードをかけ放したので、通行も出来ない人ばかりであつた。

大官の壽宴には芝居はつき物で、この時は支那一流の俳優すべてを、自分の出身郷里へ呼び集めて、演戲をやらせるといふ、頗る大がかりの多いし、これを誇りともしてゐる。

宴會の話がいつか芝居のことに飛火し、意外に廻り路をしたが、再びここで宴會に戻るが、芝居好きであると共に、宴會好きであるといふことは無理もないと思ふ。

十二酒・菓子・果物・煙草・阿片

昔の宴會

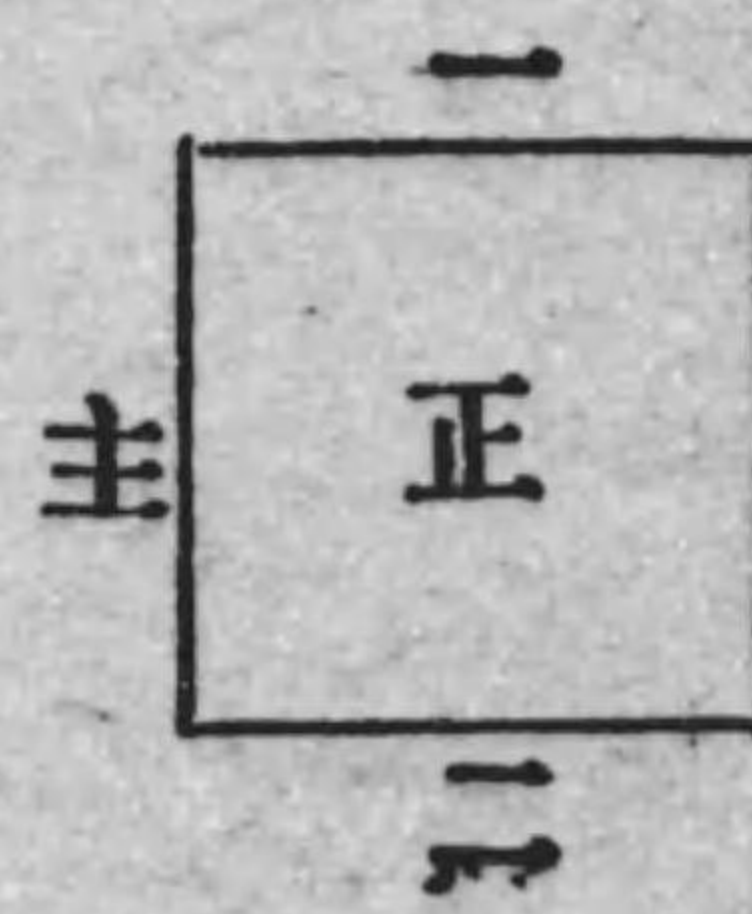
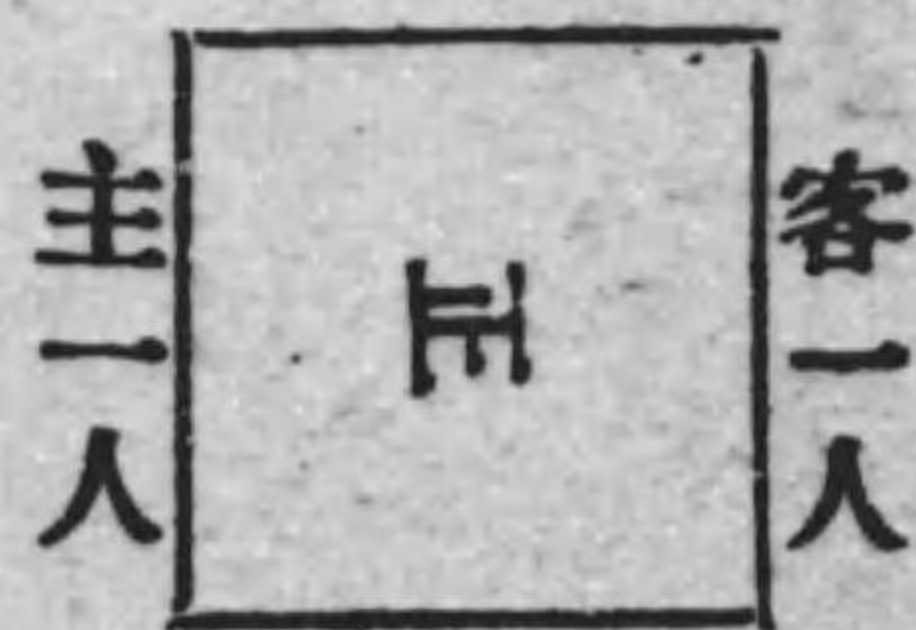
今から約三千年前、周の時代、既に郷飲酒の禮といふのがあつて、三年毎に一部落の人を集めて酒宴をなす習慣で、郷太夫が主人となり、その郷の父老を賓客とし、その父老中で禮儀を習得して宿老一人を賓とし、外は衆賓とし、年長順に座を定め、酒宴の時には樂人が来て、詩を歌つて樂を奏したといふが、こんな時代から一郷村をあげての宴會が催されてゐたと見える。

支那では長幼の序といふことを、大變矢釜しくいふが、宴會でも儀禮を兎や角といふ國柄だけ、席順はなか／＼面倒臭い。

左の席次は右側、西向きを下位とし、左側、東向きを首座とする。四角は八仙卓として主客それ／＼の位置だ。

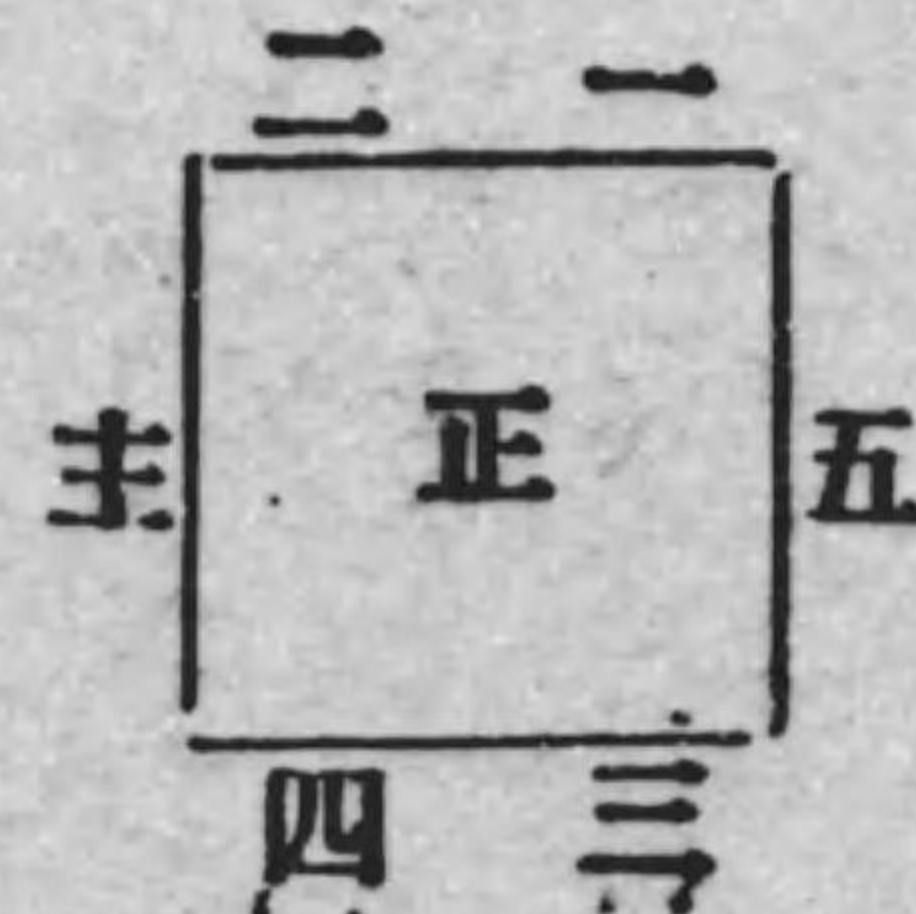
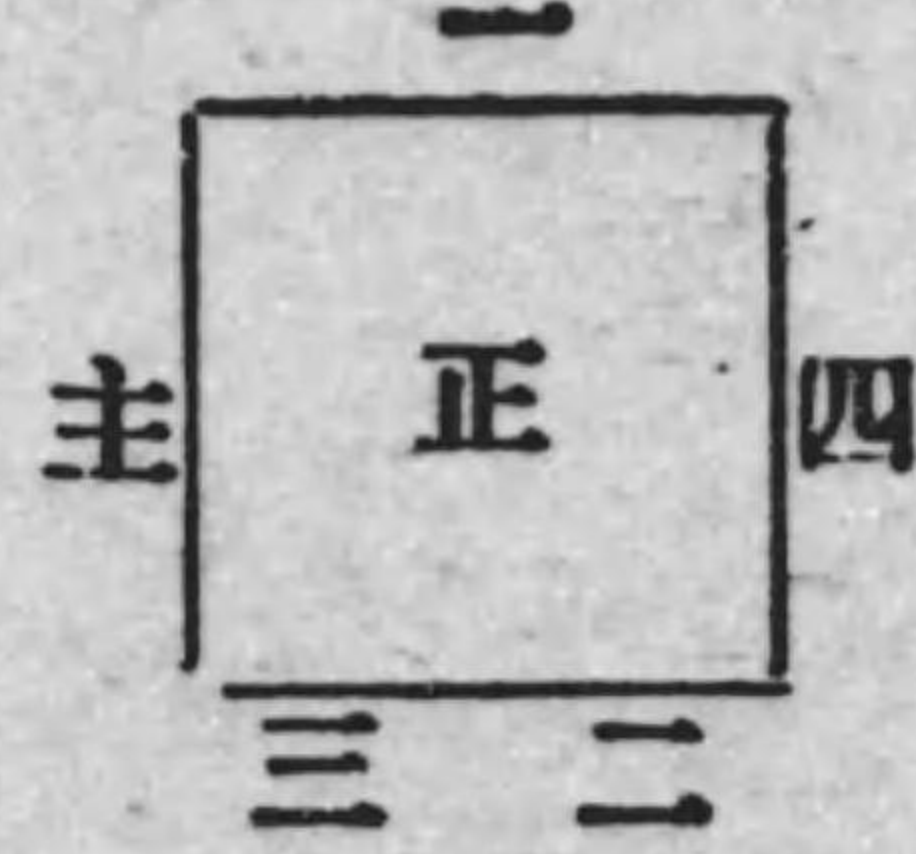
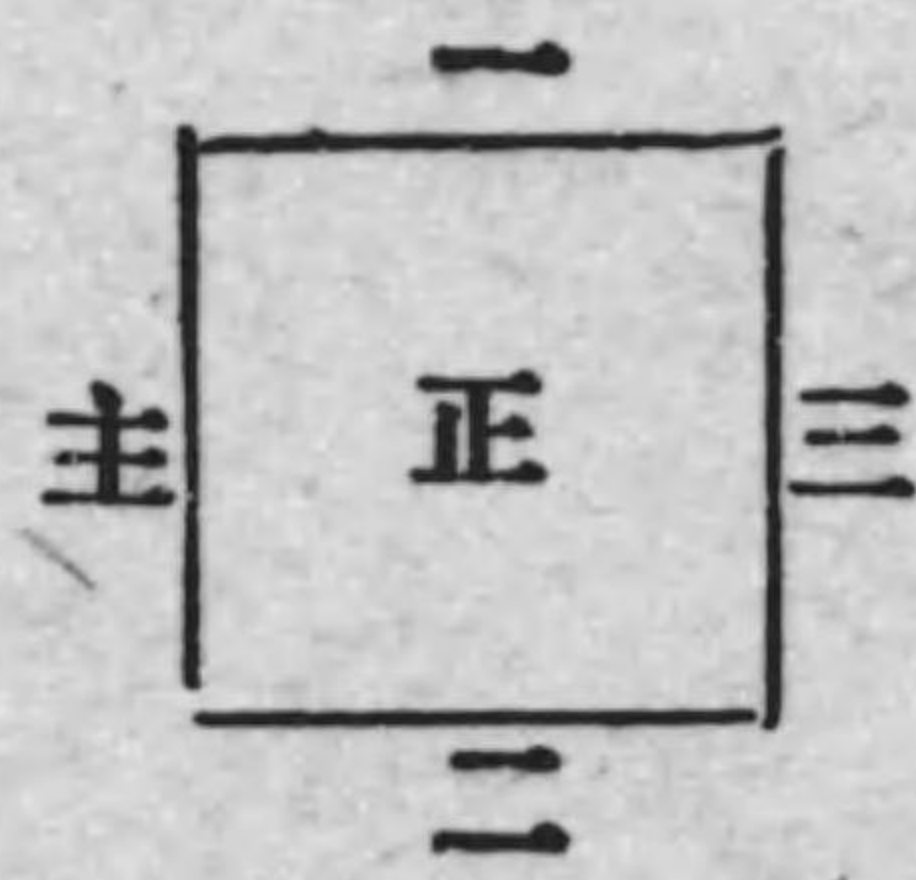
宴會主客の位置

【一】一席に主客二人乃至三人の對座（正は卓の正しき位置を示す）

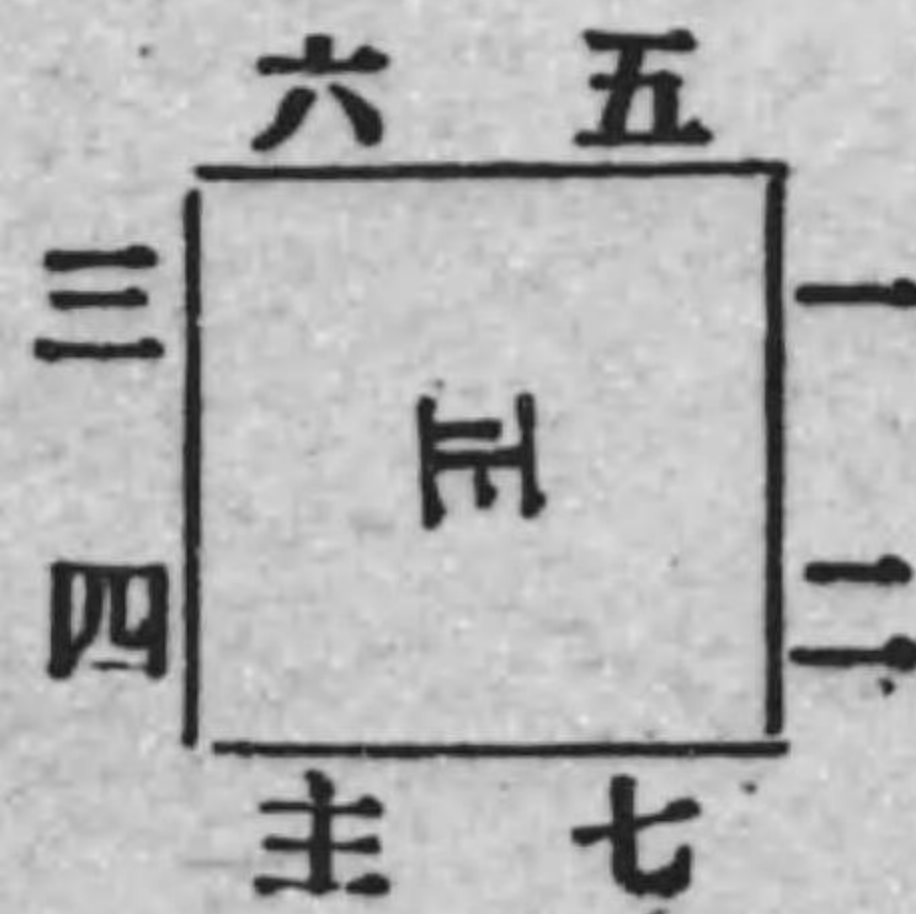
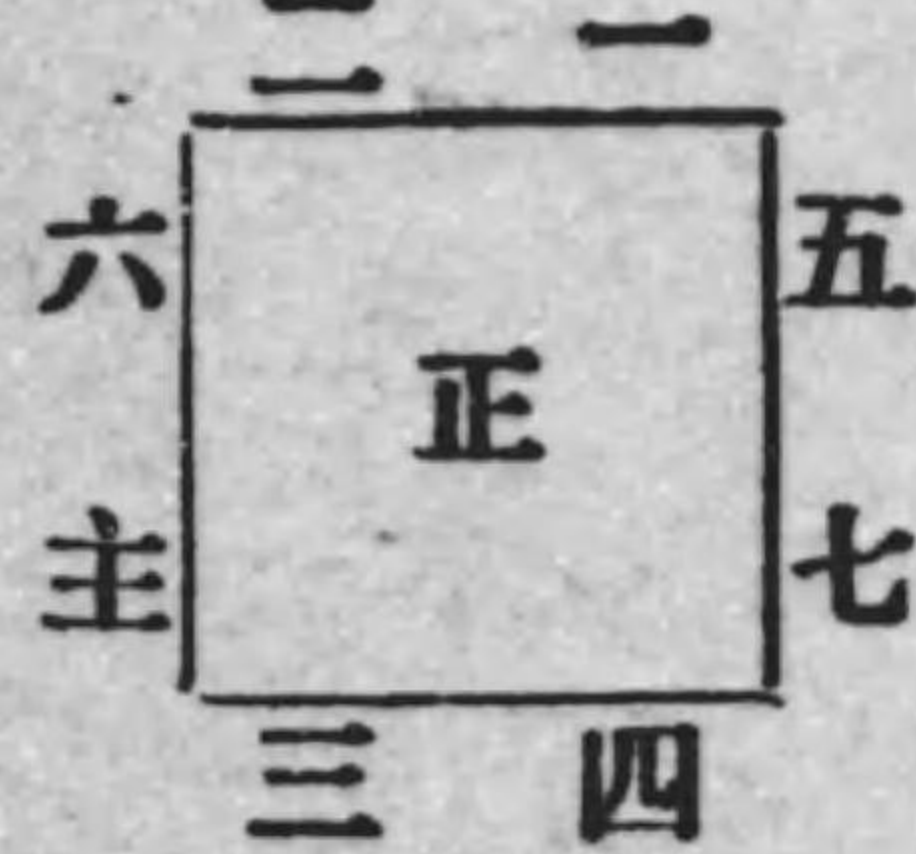
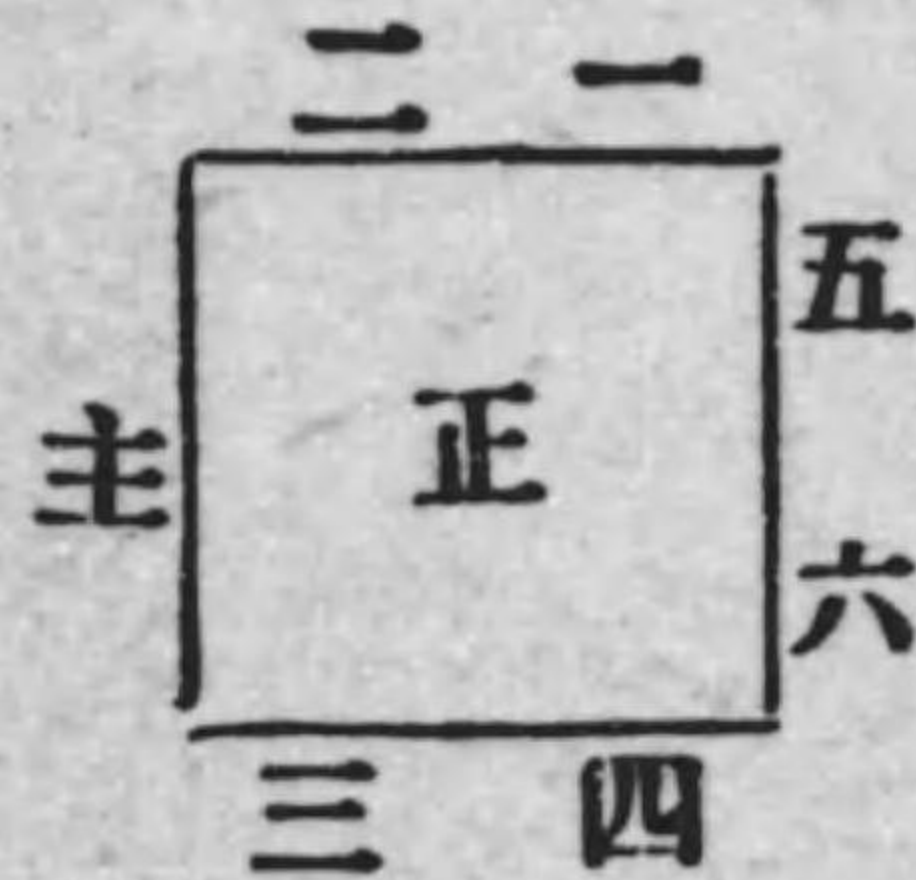


中圖は卓横に座を取つた時で、下圖は一席に主客三人の場合。

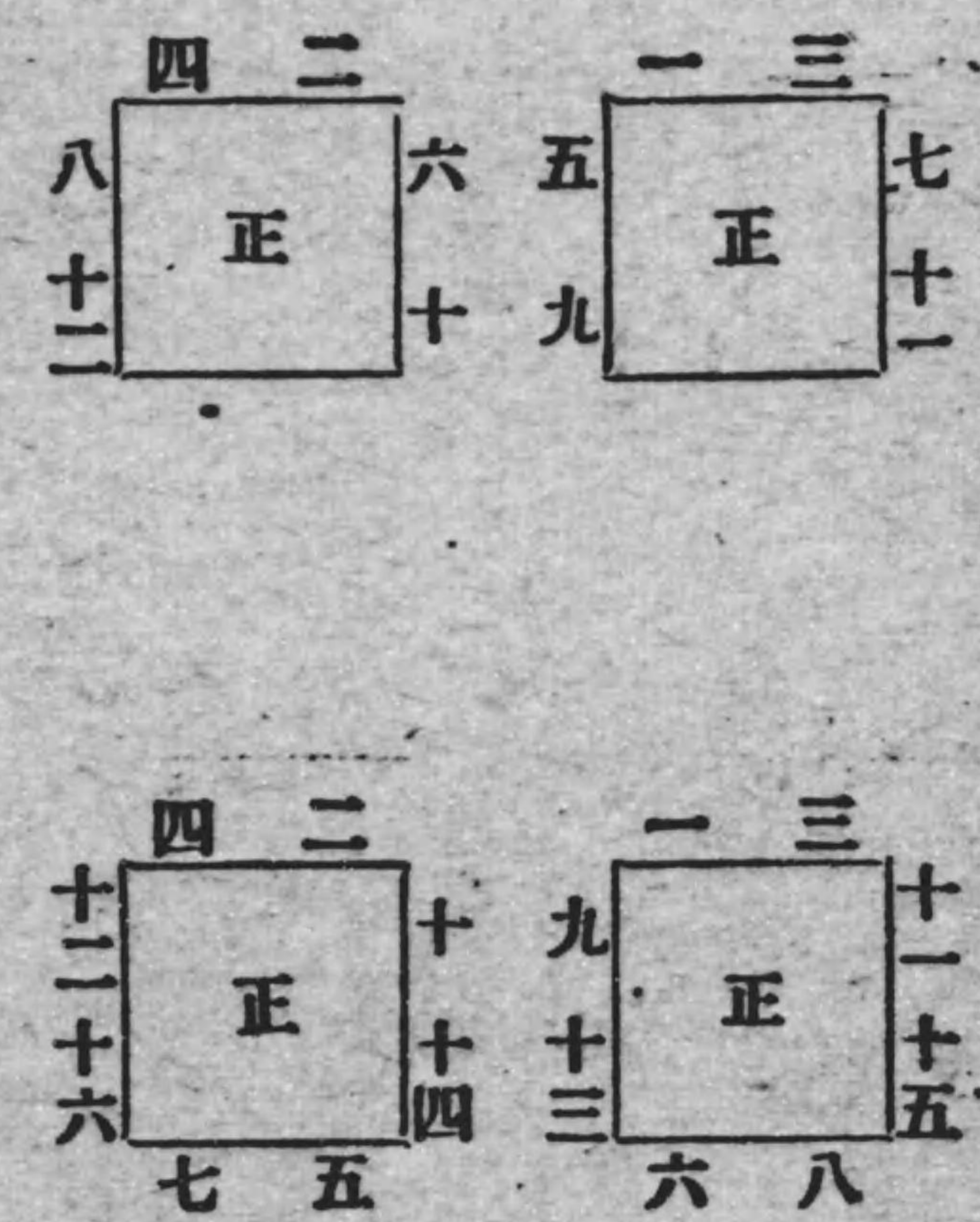
【二】一席四人乃至六人



【三】一席七人乃至八人



【四】二席正面（主賓）の空席と満座

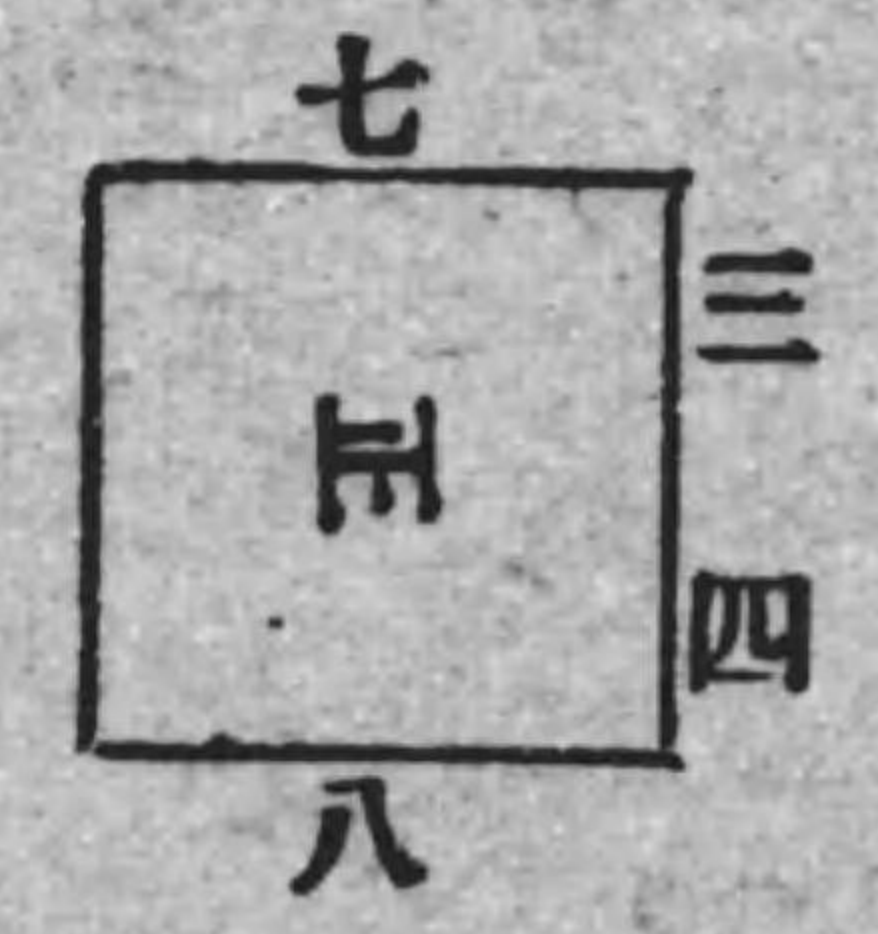
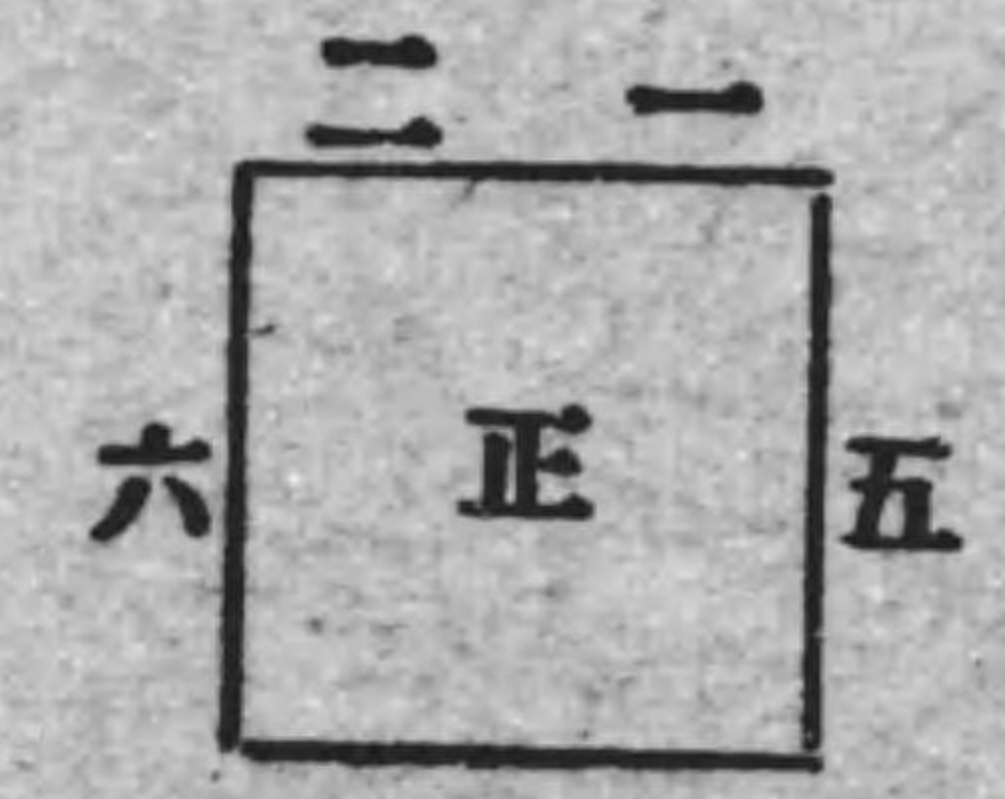
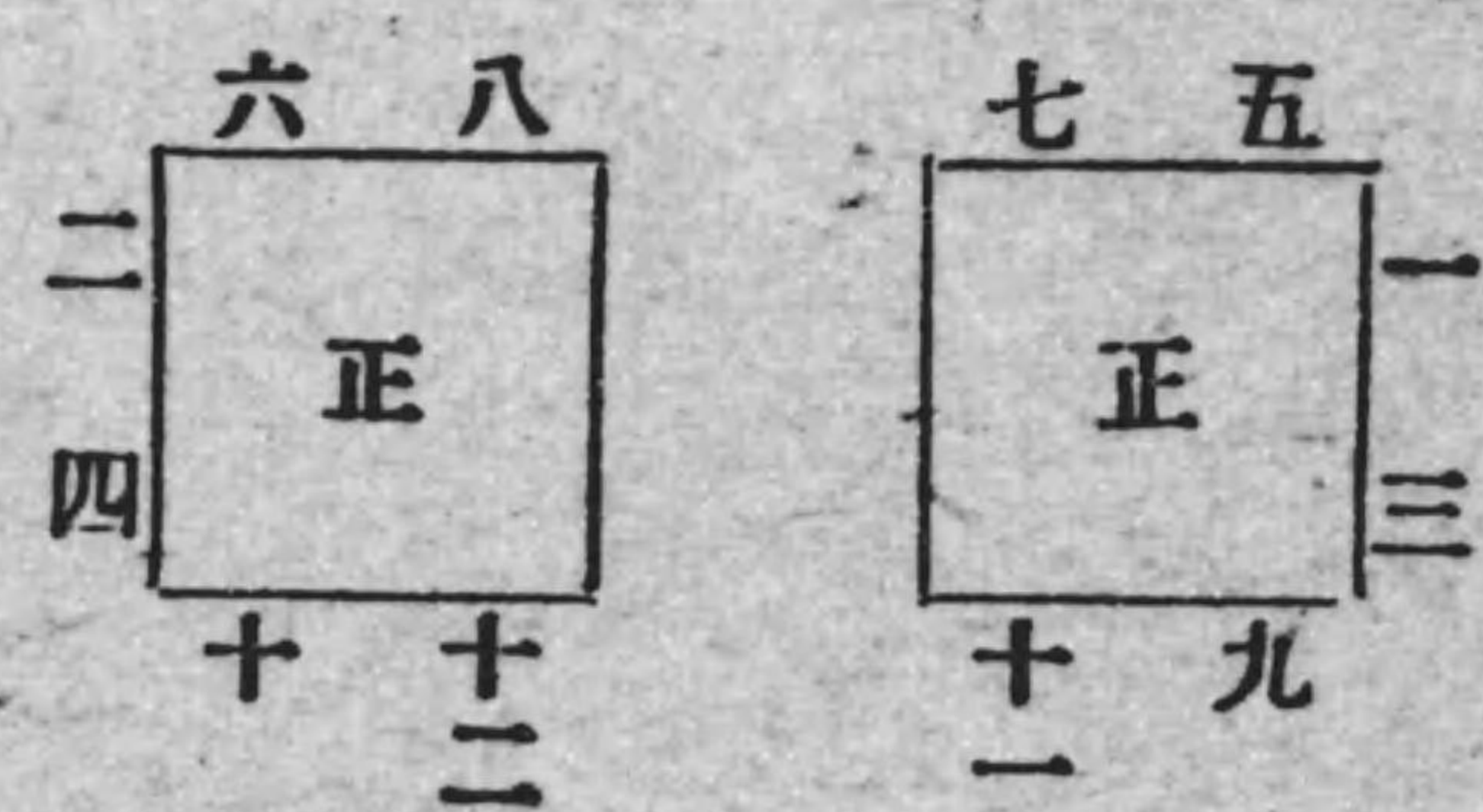


凡て四席、六席、
八席、十席はこの
【四】例を参照すれ
ばよい。

【五】二席直下と横向

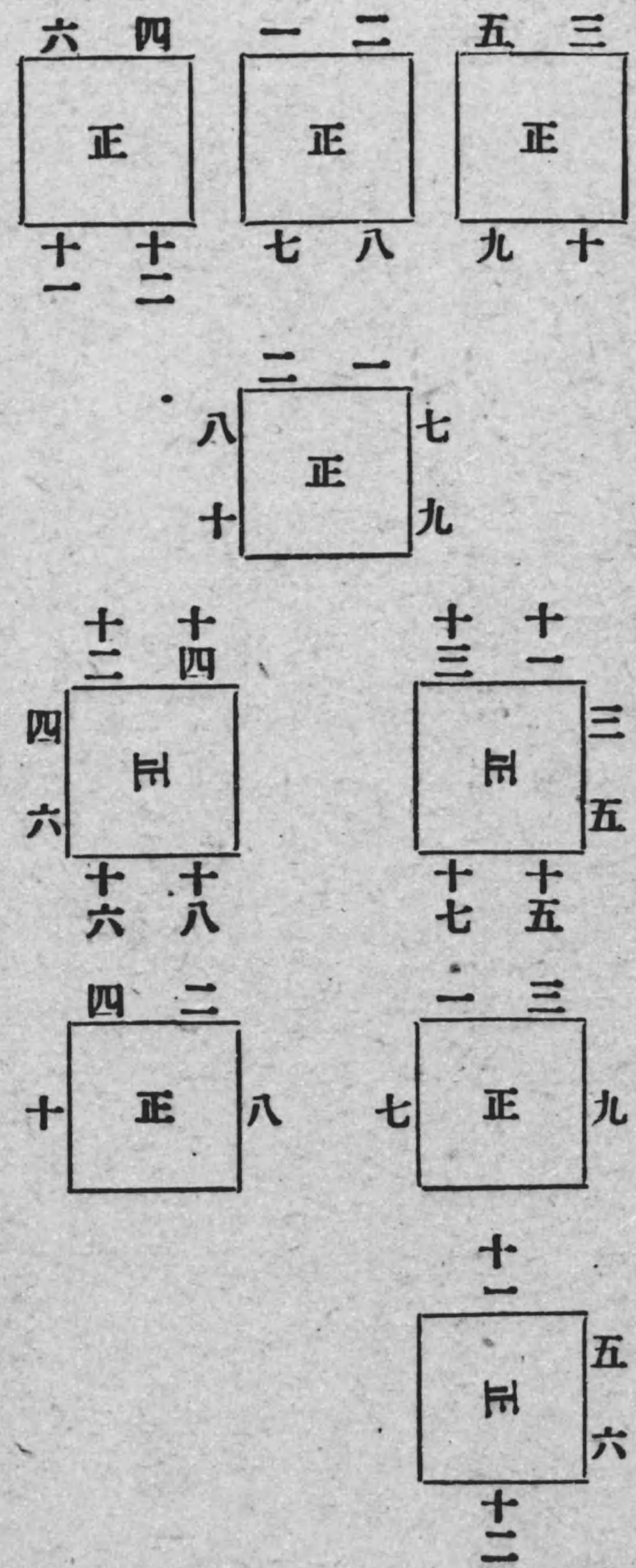


【六】二席の中座空けと、二席一正一横（卓の位置が一つは正しく、一つは横に置く場合）



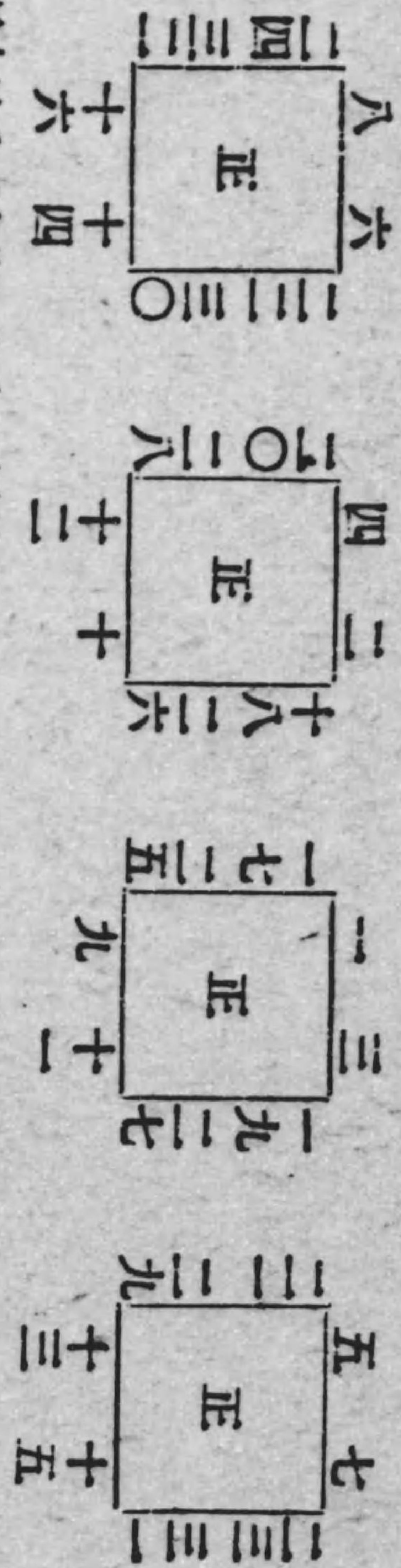
一正一横の卓の置き方は、客に親族尊卑の関係があつて、並んで着席するに都合悪き際
にこの式を用ひる。

【七】三席正位と三席一正二横と三席二正一横



凡て五席、七席、九席、十一席などの奇数は何れも前記上圖を参照すればよい。下圖は親族尊卑の關係から並んで着席が都合悪い際にこの式を用ひる。

【八】四席正位



便宜上から直下に卓を並べたが、本來は六、八席が左端、五、七席が右端で、平行して横に卓を並べてある。

ぐるぐると廻りの宴

支那の宴會へ招待された客たちは、またその主人を主賓として招待するので、大きな宴會でもあると、客が次々と列席者を招待し合ひ、當分の間は宴會の持ち廻りとなる。

來客一同が着席した際、主人は一場の挨拶をし、自家のコックの腕が誇るに足るものであれば、その旨を披露し着換へした本人を呼び出して紹介することは前述してある通りで、夏であれば支那の禮装である、わが邦の羽織に該當する馬褂兒マツコを脱いで、ゆつくりと寛いで召し上つて頂きたいと附け加へる。

それから來客中の一番大切な主賓が着席するまで、大抵は主人が導いてゆくが、それが

済むまで外の客は請坐チンワシヤウと云ふと請々チンチンと繰返しながら、互ひに遠慮し合ふのが儀禮となつてゐる。

こんななまでに席次を矢蓋しくいふのであるから、前記してある席順は一通り心得てゐる方が支那人に對する交際には必要だ。

次に宴會はいふまでもないが、普通の支那家庭でも必需品である飲料——酒、茶、その他、水菓子、菓子などから煙草。阿片に就て、大體述べて見やう。

支那の酒といへば第一に紹興酒シヤウキウで、紹酒とも云ひ、浙江省の紹興縣から産するので、この名稱がある。

産地附近の南支那はもとより支那全國に廣まつて上流とか智識階級の愛飲するものであるのは、昔から同地方が文筆に名ある人々を多く出してゐるところから、自然とこの酒が用ひられ、原料は糯米と麥麴カウジ、麴は古い程よいとされてゐる。外に香料として蜜柑の皮をいれるが、黄金色といふよりは茶褐色で、十年以上も貯藏したのは色が赤味を帯び、酒精分が比較的少なく、口當りが上品になつてくるのでこれを花雕オウチウと云ひ、美しい唐子人形の描いた壺にいれてゐる。

おなじ紹興酒シヤウキウでも、この花雕は値が高く、酒の王座を占めてゐるものだ。

わが邦の灘ナタと支那の紹興は酒の名産地としての双璧スウヘキと稱すべし、殊に後者は支那に珍しい、美しい清水の湧く地方で、運河も綺麗であるし、一帯に水の美しいので、酒造地として天下に名をなしたのであらう。

北支那の酒としては黄米オウミ（糯米）から造るので、黄酒といふのが有名だ。

これには古酒の老酒オウサウと新酒とがあつて、前者は原料を焦して造るので幾分褐色で、苦味を帯び、新酒は黄色で稍酸味を帯びてゐるが、山東省の青州が本場で、同地方の宴會は殆んどこの老酒を用ひてゐる。

酒精分は紹興酒のやうに弱くなく、百分の十二内外で、日本酒よりも強い位だ。

高粱酒オウリヤウは焼酒シヤウキウで、高粱（糯米）と、大豆、大麥又は蕎麥などの麴を酸酵させ、錫製の蘭引ランビキにかけて蒸餾して造つたもので、滿洲國の特産であり、酒精分は百分の七十五内外といふ、頗る強烈なもので、灼酒シヤウキウとも呼んでゐるが、宴會などには餘り用ひない。そこへゆくと老酒は中流階級以下の家庭で一般に愛用されてゐる。

黄酒の紋り渣シヤからも亦、大糟燒といふ焼酒が造れる。

高粱酒

黄酒

老酒

汾酒

外に山西省の太原の側を流れる汾水附近から汾酒といふ酒が出るが、これも酒精分が強く、同省の下層階級に愛飲されてゐる。

それから都市の住民に需要の多い混成酒である藥酒、草根木皮とか蝮、蜥蜴などの酒で甚だ種類が多い。

藥酒

これには不老長生とか、精力増進とか、いろいろの効用が説かれてゐるが、強壯劑を兼ねてゐる舒筋和絡藥酒、滋養補血の効用あると云れる溫養氣血藥酒、保健營養の調和營養酒、傳染病豫防の避除疫癘酒、健胃強壯の補脾養胃酒など、幾らもある。

蒙古には牛乳を絞り縮めて、腐敗酸酵させた奶酒、燒酒に玫瑰^{メイコイ}花を漬けた玫瑰酒、桃から造る桃釀酒、林檎から造る蘋果酒、梨から造る香檳酒、葡萄から造る葡萄酒などの果酒がある。

酒は斤量賣り

酒の賣買はわが邦と異り、一斤幾何であつて、秤を用ひ、樽は用ひない。支那の一斤はわが國の三合五勺に當る。

運搬には樽でなく、泥燒の十斤入りとか二十斤入りの壺で、周圍は川端柳か萩の莖で編んだ籠でびつたりと包み、この籠の内側は豚の血と石灰をまぜて幾十回となく、漆のやう

に塗り固めてあるので、丈夫なことは想像以上であるから、海外へまで運んでも、中の壺が壊れないのである。

高粱酒のやうな燒酒は熱燗にして常用するが、品のいい紹興酒や黃酒は錫製の銚子で、人肌程度に温めるをよいとしてゐる。あまり熱いのは味を殺すので悦ばれない。

支那人の酒量を海量と云ひ、大酒家を海量大などといふが、随分大酒呑みもゐるが、街頭で酔拂ひ、醜態を示してゐる支那人を未だ見かけたことがないのは、かれ等は自分の酒量を知つてゐると、酒の趣味を解してゐるからだと思ふ。

支那にゐる日本人のうちには相當地位にあるもので、泥酔のあまり、酷寒の夜、街頭へ打つ倒れ、そのまゝ凍死してしまつた事實を少からず知つてゐるが、支那人には未だ一人もかうしたことを聽いてゐない。

昔の昔、澤山の人が經驗済みで、かれ等は冬の夜、深く酔つて、外を歩くことがいかに危険であるかを知つてゐるからであらう。

支那人はなび多量に茶を飲むか

北支那の空氣は乾燥してゐるためと、水が悪いので、非常によく茶を飲む國民だ。夏など一日に四五升を飲むのが普通だと云れてゐるが、白湯は殆んど飲まない。その代り

大酒家を海量

お茶の飲
み方

茶壺といふ爐で煎じる茶などは、色が出るまでいつまでも湯をさして飲用し、更に口茶をし、四日が五日でもそれを用ひてゐる。

一方に普通の飲み方は、茶葉を蓋つきの茶碗にいれ、熱湯を注ぎ込み、蓋を少しすらし、隙間から飲むので、これは茶に趣味を持つ人々の飲みつぶりだ。前の色さへついてればよいといふのと聊か違つてゐる。

支那の茶に就ては、各名産地から種類、用途その他を拙著「支那商店と商慣習」茶行の項に詳述してある。

尙支那の煎茶式は極めて僅かの人に限られ、一般はかうしたことに無關心だ。

支那人と對談してゐて、茶が出てしまつたからとて、新しく茶を入れ換へ、茶碗を高くあげて、相手の顔を見たりすると、これは當方に用事が迫つてゐるのに、愚圖くされては迷惑であるから今日は戻つてくれといふ言外の意味を示すわけだ。

理山を知つてゐて、この手を用ひるはよいが、知らないであると、折角話の中途に、先方は戻つて行つてしまふだらう。

長つ尻の
客を追ひ
返す手

長つ尻の客を追ひ返す手でもあるが、直統に用事があつて、これ位で戻つて貰ひたい場

合、それを云はないで、言外に腹のうちの察して貰ふわけだ。

お茶を勧めるのはよいが、自分の茶碗を眼のあたりまで持つて來て、相手の顔を眺める。これがそもく、いい加減にお戻り下さいといふ催促に當る。

わが邦でも時にはかうした無言、直接に當方の意を達する方法があると、頗る便宜な場合が多いであらう。

客の下駄裏に灸をすへたり、次の間で箒を逆^{さか}に立て、手拭を冠せ、女房から女中、子供まで總出演、團扇で煽ぎ立てる必要はなくなるわけだ。

それから支那人はよく水果子を喰べる。殊に北支那は果物の本場である山東を控へてゐるので、さうした物を口にする機会が多いせいかも知れない。

甘栗として知れてゐる支那産の栗子、わが邦で賣つてゐるのは山東^{山東}兗州地方のか、朝鮮平壤附近産の多いけれど、本場は北京の西南にある良郷^{良郷}で、これは支那全國到るところ、栗といへば良郷産を看板^{看板}に出してあるが、その實、同地産のは北京と天津の需要にさへ應じ切れない位であるから、何れも偽物で、良郷の名を冠してゐるに過ぎない。それ程に有名である。

支那人の
好む水菓
子と名産
地

大きい栗では安徽省の安慶、徽州地方産、稍粒の小さいのでは山東省の兗州、山栗のやうに小粒の毛栗は浙江省の上虞地方が全國に知れ渡つてゐるが、支那栗は何れもわが邦の栗のやうに煮ても、蒸しても餘りうまくない。矢張街頭で見かける式の糖砂で焼くのが一番で、これを炒栗（甘栗）と呼んでゐる。

甘栗は甘黨の下戸ばかりの賞味するものと思ふと大違ひで、支那では酒呑みの上戸黨も亦大いにこれを嗜んでゐる。

日本料理にも栗きんとんなどといふものもある位だから、炒栗が上戸黨に悦ばれてゐたとて不思議はない。

秋から冬へかけて味覺をそそるのに、甘栗の外、北京の白薯（薩摩薯）が有名で、壺燒式のが貧富の論なく垂涎を誘ふに充分である。それに代用食としても簡便で、値が安いから下層階級はこれで腹を充たしてゐるものも多い。

次に甘栗の外、支那から日本へ輸入する果物に山東とか上海から柿餅があるが、これは普通の乾柿を上から扁平に押し潰したもので、近頃は大部多量に來てゐるらしいが、湖南や杭州産の甘柿よりも矢張山東龍山のが直徑四寸からのを産し、有名である。

北京では熟柿をそのままに凍らして、凍柿子といふのを作つてゐるが、柿の自然冷凍ともいふのであらう。

桃は山東肥城産の白桃が王座を占め、次は杭州、天津産。外に季節外れの十月に實る王母桃は洛陽から産する。

梨も山東萊陽の圓筒型のが代表で、その他、林檎、棗、葡萄も山東から相當に出るが、杏子の産額は非常に多い。その種子の仁から採る杏仁は支那料理を始め廣く食用薬用にしてゐる。

北支那地方産の小さい林檎を沙果とか花紅と云ひ、北京の西北にある貫市はこれが集散地である。

前記の果物の外、青梅、蜜柑、枇杷から無花果、西瓜、南京豆、蓮の實、蓮根などが砂糖漬の菓子となつて、蜜餞糖果と呼ばれ、四季を通じて賞味してゐる。

栗とか蓮の實の甘煮に似てゐるのを栗羹、蓮子羹と云つてゐるが、どろ／＼してゐる白砂糖の汁に蓮の實や栗をいれてゐるので、中でも蓮子羹（蓮子湯ともいふ）はどんな料理家でも大概作れるし、上下戸の別なくうまいものだ。

餅々

饅頭は豚肉とか餡の入れてあるのもあつて、これは菓子といふよりは食事代りに用ひ、餃子（柏餅のやうに豚肉、野菜などを包んだもの）や焼賣などと同じだ。

餡のない蒸饅頭に餅々といふのもあるが、菓子として油濃い餅類が多く、油で揚げた饅頭、生菓子の種類がいろいろある。

雲片糕（糕は糯米で作つたもの）のやうな干菓子、仲秋節前後に多く製造される月餅、新年用の年饅、端午節用の粽子なども菓子として、どこか家庭でも用ひてゐる。

月餅と云へば、數年前に上海で有名な食料品店冠生園が大世界といふ歡樂境へ、一個の値段一百圓といふ大きな月餅を廣告代りに出品陳列して、世間を驚かしたことがあつた。

支那の子供たちが悦んで喰べる糖果兒は山楂子を幾つか串に通し、團子のやうにしたのを餡で包み、赤とか黄色とかで見た眼も頗る綺麗なものだ。

これを商つてゐるのは露店でなければ、街頭を數百本、菓づとにさしたのを擔いで、大聲で呼び賣りしてゆく。

菓子のことを點心と譯してゐるのが多いけれど、小食——簡単な食事といふに近く、よく

點心と小食

梅花を細く嚼んだのが點心で、その意を釋いたのであるともいふし、禪宗から出た語であつて、菓子で心を黙する意味だとも説いてゐる。

點心には南支那で多く米粉を用ひるが、北支那では小麦の麵粉を用ひ、これで饅（蒸菓子や蒸餅）、糰（糰子類）、餅（月餅とか烙餅——紅梅燒風の菓子）、餌（粉菓子）など各種類を製造する。麵條（うどん）は南北支那共に遍く行れてゐるが、たゞ各省の調味が同じでない。

點心のうちうどん類なども含んでゐるのであるから、大體は菓子が主であるけれども、間食——本式の食事の間の小食と解釋するのがよいと思ふ。

支那人は一日に一度が米で、一度がうどんと云れる位に、毎日うどんを喰ふが、その種類も頗る多く、日本では麵をすべて蕎麥と呼んでゐるので、炊麵を五目そば、炒麵を五目焼きそば、炒粉を五目焼き米そば、火腿鶏絲麵をハム入鳥そば、三鮮昌粉を五目米そばなど數十種類がある。

蝗の油い それから北方支那人が悦んで喰べるのに、南方支那人が喰べないのに蝗虫の油炒りがあつて、これは天津地方など四季を通じて、商店で賣つてゐる。

蝗虫と云ても翅の生えない蛹を採つて、油で炒りつけるので、晩秋に子を生む頃から冬へかけ、これが市場へ現れてくるのだ。

蝗は一斤七十錢位であつたが、市場へ出てくる數量は物凄しい程で、どこにこんな澤山な蝗がゐるかと思ふ程であるが、支那では昔から蝗と早魃とは関係があつて歴史上からしても大早魃には蝗の繁殖が甚だしい。

それに大早魃は不思議と兵亂の後に來るので、大兵の後、必ず凶年有りとか、白居易の詩の和氣盡蠶化して蝗となるなどと云れてる通りだ。

支那では蝗害豫防対策として、治水會議のやうに治蝗會議といふのを開催する。先年も南昌で七省の治蝗會議を開き、その工作を談した。

匪賊の討伐や洪水防止などと共に重要な會議で、それだけ支那には蝗の發生が多いと思はざるを得ないが、白樂天の詩にも、一蝗死すと雖も、百蝗來たる、豈に人力をして天災に勝たんとするやで、蝗害の恐ろしさは早魃、洪水と變りがない。

蝗が風に乗つて舞ひ下る時、遙か遠くから眺めてさへ、一團の黒雲となつて、二三ヶ村の作物は忽ちの内に喰ひ荒してしまふ。

蝗害豫防 対策

これを避くるのは撲殺より外に方法はないのであるが、限りある人力ではどう手の下しやうがない。

全村の老若男女が總出で撲殺に努め、蝗の屍骸が畑から道路へかけ一面に膝を没する深さに積んでも、風が變つて、また外の村へでも飛び去らぬ限りは、全村の作物は全滅となつてしまふ。

早魃に蝗が多く繁殖することに就て、支那人はこんな観測を下してゐる。

雨が多く、河川に水が多いと、水中に生棲してエビとなり、旭魃で水がないと、蝗になるのだといふわけで、エビと蝗とを同一に見てゐる百姓が多い。

無教育なかれ等の考へさうなことであるが、蝗がいかにか多いかといふことは、北支那へ行つて、支那市場を見た人にはよく了解し得るであらう。

支那商店では、その主人自ら読み得ないやうな文字を、黒漆の地に金泥の文字も麗々しい大看板に書いて出してゐるのが多いが、菓子屋も亦この例に漏れない。

商店の看板が廣告裝飾の一つになつてゐるからであらうが、堂々とした立派な文句が彫りつけてある。

エビが蝗 に化ける

わが邦でいふと、一文商ひの駄菓子屋に相當する店でも、自造京式餛飩品一應俱全(自製京風菓子一切整備)などといふのであるから、看板と店とを見較べて、大抵は驚くより呆れてしまふのであるが、支那人でこの看板文字の讀めるなど幾人も居らぬし、外に菓子屋は一目して、それと判る共通の目標を掲出してあるから、看板の方は店の飾りに過ぎないわけだ。

小さくとも店舗を張つてゐるのは別とし、夜の街頭、鍋焼うどん賣り式に呼び賣りし、流して歩く食物に炸豆腐、硬面餛飩、餛飩の三種類がある。

これは夜半といふより夜通し商つて歩いてゐるもので、豆油とか落花生油で豆腐をあげ、それに残つた茶葉と玉子、蕪、薬味香料をぶち込んで煮たものを添へて出すので、熱いうちに喰べるところが値打だ。

夜業の職人とか、夜更けまで起きてゐる人々にとり、この呼び聲は魅惑となる。

硬面餛飩イシエヌボウはメリケン粉に玉子と白砂糖で作つたもので、光頭コテトウ、薄脆バウクエイ、糖鼓蓋カンク、硬面鍋子イシエヌチオツ、牛舌頭ウシゼツトウなどいろいろの種類があつて、製法と形がおなじでない。

この中では光頭餛飩コテトウボウが一番上品で、うまいとされ、硬麵鍋子は多く子供たちの喰べ物、

その餘のも甘黨に向く品ばかりだ。

餛飩は麵館ウエヌトク(そばや)とか飯館イハク(料理家)のと違ひ、うどんに用ひる肉なども骨についでるのを削つたものであるが、外の飲食店など全て火を落してゐる夜半であるから、大道賣りにしては値もあまり安くはないが、遊び歸りに腹を空かしてゐる人にとつては、この上もない珍味としてゐる。

回々マヒク教徒が豚肉を喰べないことは前述してあるが、かれ等は在裡教徒と同じく煙草も飲まない。

支那人は五六歳になると、既に一人前として煙草をすばり／＼と吸つてゐるが、殊に阿片が禁止されてから強烈な英米兩國産の兩切などを用ひるのが殖え、支那の市場には世界中のあらゆる國の煙草が集つて、賣り出されてゐる。日本産のも相當に賣り込んでゐるが、何しても排日貨などの運動で邪魔されてゐたので、一時はかなりの苦境にあつたが、新國民政府が強化されてゆくにけれ、再びその販路を取り戻してきた。

街頭で煙草の一本賣りがあるのを見ても判る通り、さうして買はなくは求め得ない最下層階級の人まで煙草を吸つてゐるのだ。

支那人は男ばかりでなく、女も大の愛煙家で、どこへ行っても茶と煙草の接待は儀禮の一つになつてゐて、客になれば屹度巻煙草を勧める。理髮店などでも煙草をサービスしてゐるのがある位で、お茶を出せば必ず煙草も出すのだ。

中には水煙袋（水煙管）のやうに、吸ふ度に煙が通つてくるので、こぼくと低い音を立てるのから、途方もない長煙管、贅澤のは自分で火をつけず、一々吸殻をボーイに掃除させ、更に火を點じさせ、痰をべつたまま飲んでゐるのさへある。

葉煙草を飲んでゐるのは百姓か田舎の人々位で、大抵は巻煙草を用ひる。

客に招かれた時、主人は巻煙草を摘んで、「請（どうぞ）」と云つて勧めるが、吸へないならば矢張り立して「我不會（私は頂けません）」と謝絶し、飲めるならば「謝々」とか「道謝道謝」（有り難ふみます）と云つて、起立して受けるべきで、主人が起立して勧めるのに、客が椅子にかけたまままで挨拶をするのなど失禮の上ない。

時には主人自らマッチを摺つて、煙草へ火を點じてくれやうとするが、この際も起立し、火の點じてあるマッチを奪ふやうにして、自分で煙草へつけるのが禮で、この事は前述してあるから省くが、兎に角椅子へ腰かけ、煙草を喰へたまま頭をつき出し、火を點じて

貰ふのなど甚だしい失禮になるのだ。

下男とか、召使の場合は椅子に腰かけ、煙草を咬へたまま差支へない。支那人の巻煙草の吸ひ方は拇指と人指指で、パイプをはさむのが日本人と違ふ。

阿片は煙草と違ひ、表面は禁止され、その中毒患者とか特殊な人々へ許可してある外、絶対に吸引が出来ないことになつてゐるのだが、事實はさうでなく、まだ相當に嗜んでる人が多い。

懇意な間柄になると、煙草を勧めるやうに阿片吸引を勧める支那人もゐて、その道具を下男などに運んで來させる。

阿片は知つての通り罌粟の實の液汁を採つて作つたもので、純粹の阿片ばかりは少く、すべて混合物があつて、阿片六七割といふところは上等の部で、甚だしいのは阿片の偽物ばかりのさへある。

吸引する際には阿片膏にしてあるが、これは阿片液に牛皮、豚皮、麥粉、胡麻、杏仁なども混入するものもあつて、これは餘り上等でない。膏と氷砂糖を煎じたものを何回か煮たり、乾したりして作つたのが上等膏だ。

阿片に中毒してゐる人を癮ニクとか烟鬼ニコイと呼んでゐるが、一日のうち一回でも、二回でも阿片を吸はないではゐられないので、この氣が切れると、精神は朦朧とし、仕事どころの騒ぎでなく、餘唾よだれをだらりと流して、まるで阿呆と變らない態をしてゐるのも少くないが、一度、阿片を吸ふと、急に元氣は恢復し、頬は紅潮し、眼はいきいきと精彩な光を放つてくるが、これを繰返してゐるうちに、中毒は深くなつて、次第に身體の活動が衰へ、辛棒がなくなり、顔色は蒼白く、神經衰弱の症狀を呈し、肉が落ち、枯骨凄然たる容姿と變つてくるので、阿片の快味に陶酔する僻がつくと、かうして死ぬまでは廢められなくなつてしまふ。

中毒性の人は一日少くも安い時でさへ、一日に三四圓の分量を吸ひ、中には十圓以上を吸はなくては活動能力を恢復し得ないといふのさへあつた。

支那のやうに生活程度の低いところで、こんな多額の金を捨てなくてはならないから、この苦痛を避くる一手段とし、直接なモルヒネ注射が旺んになつたが、これがまた間接な阿片以上の毒を及ぼすもので、モヒの氣が切れた中毒患者の悲惨な狂態は見られない程だ。

しかし大官とか富豪階級は快樂を需むるために、一日に十圓や二十圓の阿片代を捨つること位は何でもないので、現に今でも旺んに利用されてゐる。

それに資産家はその財産を保護の上から、息子が十二三歳になると阿片を吸ふ習慣をつける。これがどうして財産の安全を保證するかといふと、人にはそれ〴〵賭博とか、女とかの道樂がある。そしてこれ等に凝り固ると全財産を失ふやうな端目に陥ることも少くないが、阿片吸引は一日の量が一定してゐるし、活動力がぶくなくつて、無性になると共に、慾望が少くなつて來るから、外の道樂のやうに、無際限の金を浪費する心配がないので、一番安全な道樂として、阿片吸引を擇んでゐるわけだ。

支那婦人は一體、外出する機會が少く、絶へず邸内に閉ぢ籠りがちなので、麻雀でもするか、阿片でも吸つて快味を食ふより外に方法がないので、自然とこの嗜好に陥つてゆくし、一方に子女も亦その影響を受けるので、誰が勤めるともなく、見やう見真似で阿片吸引僻に囚れてゆくのである。

従來、阿片は密輸入が盛んで、名産地である四川、雲南各省からは税關とか役所の眼を掠め、裝身具に忍ばせ、船では竹棹の節をくりぬいて藏したり、帆桁ほかたの中に詰めたりして

送りつけ、或は桐油籠の底へいれ、轆くわをかついで竹の中へ巧みに筋をぬいて隠したりしてゐたものであるが、個人のは股間にぶらさげたり、トランクの二重底、漬物樽などというくりに利用し、みな何れも發覺してゐるが、大仕掛のは税關官吏を買収し、幾十萬圓とか何百萬とか、汽船で堂々と送りつけたのもあつた。

表面は禁止してゐるとは云へ、支那の家庭を始め、長江の船中など公然と阿片を吸引してゐるし、船着場ではそれを賣りにさへ來る位で、烟館ニコトといふのが阿片中毒患者のため各地に設けてあるのは當然である。

阿片を吸ふのは阿片杖とか槍チヤンといふ、柄の長さ十八吋位、太さ直径一吋四分の一位の節無しの竹パイプ。末端の一つを閉ぢたところから二吋ほどの側面に穴を開け、そこに突起した阿片を詰める口がつけてある。

先づ阿片膏ヤニゴウを小さい阿片盒ヤニコウといふ磁器製のコップ型のに溶かし、長い針に似てゐる阿片ヤニ杆カネを浸け、油壺の上に朝顔型のホヤが冠せてある豆洋燈マメヨウテイの阿片燈ヤニトウで燻くわると、杆カネについてゐる阿片がブツ／＼と微かな音を立て、泡を吹くが、これを五六回ほど繰返すと、阿片が煙草の脂ヤニみたいやうになつて杆カネに附着くっく。それを指さきで槍チヤン（パイプ）の突起してゐる詰め

阿片の吸引法

口に擦りつけ、その上から火カすると、阿片はジリ／＼と焼けてゆくが、それを煙草を吸ふとおなじに、以上のことを繰返しながら連続して吸引してゐると、いつか陶醉境に陥つてゆくのだ。

阿片を詰める口の火皿は小さいので、すぐにつまるから阿片杆カネで浚さらつては吸ひして四五回を繰返すと一ぶくは終る。

側に小さいコップへ水をいれてゐるのは、針カネを濡したり、パイプを潤うるすために用ひる。

阿片を吸ふてゐるのは、大概炕カウとか寢臺シヤウに兩人向ひ合つて、エビのやうに丸く、脚を縮め、寝そべりながらスバリ／＼と吸つてゐるのだが、枕を高くし、足が餘ると足臺をつけ足しあしてくれる所もある。

貧乏人になると、土間に寝ころんで吸引してゐるものもゐた。

兎に角支那人の阿片常用者は三千萬人と云れ、支那四億といふ人口に割り當てると十二三人に一人の割合で、この中毒患者であるわけだ。

阿片はイギリスが印度から輸入し、未だ二百年にもならないのに、一ケ年の飲用量二十億元と云れ、數字から見ても、いかに恐ろしい害毒ガイドクを逞たくましくしてゐるかが判るが、これは

酒と違ひ、元氣を消失させ、無氣力にする消極的作用を持つてゐるのであるが、性慾の衰へたものには、翻道的な一時的効力があるので、一部支那人が愛用してゐるのだとも云れてゐる。

戒煙運動

しかし阿片吸引の害悪は何人も知つてゐるので、戒煙運動——阿片僻矯正運動が各方面に熾烈になつて來てゐるので、新國民政府治下に於てはこんな不自然にして、民族を滅亡へ導く道樂は一層に排撃されるであらう。

街頭に泥醉者を見ることが稀である支那で、飄々として彷徨し歩く烟鬼の多いことは悲しむべきことだと云ふてゐるのはもつとも事だ。

十三 衣服・毛皮・儀禮・四禮制

支那人の 寢姿

支那人は晝寢をする時、大の字なりに寢てゐるのなど一人もゐない。殆ど右か左を下にし、横向きになり、足をエビのやうに縮めてゐるか、仰向けでも足を揃へて寢てゐる。

この寢姿の不覺から日本の軍事探偵であることが發覺し、日露戦に當時に不幸の最後を遂げたものもあるが、御飯を喰へるのでさへ、日本人と支那人とは全然違つてゐるのだ。

支那人の 飯の喰べ 方

支那人はいつ、いかなる時でも決してお菜の方へ先に箸をつけない。屹度白飯から口へ運んでゆき、次にお菜へ箸をつける。

顔を洗ふにも、先づ顔を洗つてから口を嗽ぎ、日本人とは順序が逆だ。しかも口を嗽いだ水を洗面器のうちへ吐くのが普通である。

右と左の 區別がな い支那靴

支那人で猿又や禪などつけてゐるものはない。何れもちかか禪子を穿いてゐるし、黒布製の支那靴は右と左の區別がないので、どちらを穿いても差支へない。しかし近頃は外國風に左右を區別した皮や布製の靴も出來てきたが、普通はどちらを穿いてもよい。

支那人式

頭髮は辨髮といふのが無くなつて、若い人ならオールバック、油でテカ〜に撫でつけてるのか、一分乃至五分刈だ。

眼光が炯々としてゐるのなど、支那人としては悦ばないから、色眼鏡でもかけてるのがよいし、鬚は鯨のやうに垂れてる半嶋人式のが穩厚な君子人として交際往來を迎へるが、短く刈り込んだり、頬髭などは殊なことを云はないばかりか、油断のならない人間のやうに考へてゐる。

さうかと云つて、支那人と交際する日本人が、先方の機嫌を取ることのみ考へ、鬚までダラリとした鯨式になれといふわけでない。たゞ支那人はかうした考へを抱いてゐるといふことを心得てゐて欲しい。

中山服

服装はわが邦の國民服のやうに、孫逸仙（中山と號す）が常用してゐた中山服、詰襟服の襟が打返しになつてゐるのを、文武官吏を始め常用してゐるのが多くなつたが、まだ一般化されてはゐない。

服地

上流階級は依然として襦子、絨織、縮緬、絹袖などを支那服として常用し、中産階級の人々は各種の絹織物で、半分は綿布を用ひて居り、下層社會は綿布か輸入した金巾類を用

ひてゐる。

夏は一般に麻布、冬は北支那の人々は毛皮を着用してゐるのが多い。

これも一枚、數百圓乃至一千圓以上を出してゐるのなどあつて、頗る贅澤のやうに思はれるが、祖父から父、子、孫の代まで、その毛皮は數代に涉つて着用してゐるし、汚したり、破れたりした表だけを取り換へてゐるのは、反つて經濟的なわけだ。

毛皮はなめし皮と生皮とあつて、前者は陝西、甘肅、山西と張家口が名産地として知れてゐるが、張家口へは蒙古方面のが集つてくるので、蒙古人の獵師などと物々交換の當時は狐の毛皮一枚をマツチの小箱一つと交換したなどといふ昔語りもあるが、昨今ではさうしたことはあるまい。

毛皮の輸出額が七八千萬元を超へる程で、國內の需要でさへ一千萬元に近いと云れるが、灰鼠で一襲の外套を作るのに、その毛皮二百乃至二百八十枚を要するので、これ等皮貨の年産額は莫大なものだ。

灰鼠

灰鼠は大きいのは小猫位あつて、灰色に白色斑點の毛は軽く、暖いので、着物とか外套用に適し、價格も亦比較的安いから、中産階級の人々が一番に需要してゐる。

滿洲國吉林省内の各地森林に棲息し、同地方での毎年の捕獲高が約六七十萬頭と云れ、一頭の値段が日本錢で五六十錢から一圓四五十錢見當。

栗鼠 次に栗鼠は大きいのは野鼠と同じ位で、背に花模様があるので、花鼠とも云つてゐるが、毛皮が稍硬いので、一般は餘り重視してない。馬褂（上衣）の裏側に用ひ、一着分が二十五六元から三四十元止りだ。

山犬 山犬の毛も敷物用とし、肉は食用になるが、多く新開河嶺とか張廣才嶺地方に産し、毎年同地方だけで一萬頭内外を捕獲してゐる。

狐 狐は吉林産は全國を通じ有名で、毛が長くして光澤があるのが特長。狐毛は頭、腹、背、足、尾の各部に分ち、澤山の狐からその部分だけを縫ひ合して毛皮一枚分を作る。値も各部分に據て同じでない。

わが邦の婦人の襟巻のやうに一匹をそつくり使用してないのだ。
花狐といふのは一匹が三四十元、狐の大きいのは一匹七十元乃至八十元。これで外套とか大氅（毛皮衣）を作るには背部の毛だけを綴り合すので、一着分が三百元以上。狐の足の毛だけを綴り合したのは最も高く、一着分が一千圓内外はする。

狸 狸は俗に山狸と云ひ、その毛は狐より稍長く、大變に柔軟であるが光澤はない。値も亦安く、毛皮外套を作るに一着分百二三十元乃至二百五十元位だ。

海龍 海龍の毛は褐色で、甚だ柔かく、時には毛皮衣などに用ひるが、大體は上等の冬帽子を作つてゐる。一個が七八元乃至二十元。

熊 熊も吉林省に産するのは二種類あつて、一を馬駝、一を狗駝といふ。
同地方で毎年捕獲高は僅に二三十頭で、多く新開河嶺とか張廣才嶺の森林中に産する。
水獺の吉林産は毛が多く黒く、甚だ柔かく且つ暖いので、外套とか衣物に用ひるによく、冬帽子としても上流階級は歓迎してゐる。

狢狗 狢狗は白色と灰色が雜つて、外觀はあまり美しくくないが、毛が柔く、大變に密生してゐるので、外套とか着物に適し、外套一着分が上等ので四五百元、中等で百二三十元、毛皮衣としては一着二三百元だ。

貂 貂は二種類あつて、一を青鞞、一を紫鞞といふ。前者は毛が茸々として藍黑色、敦化延吉の境にある哈爾巴嶺に棲み、後者は張廣才嶺と牡丹嶺に産し、毛皮衣として一着分一千元以上、冬帽子でも三四十元はする。

野豚

野豚は毛が甚だ粗く硬いが濕氣を防ぐので敷物用にしている。

虎

虎は白頭嶺、牡丹嶺、老爺嶺などと、松花江地方の密林に産するが、毎年の捕獲高は僅に二十頭内外で、一頭の値は大きいので五六百元、小さいのは二百餘元だ。

豹

豹は吉林産のは品質がよくないので、一頭百五六十元乃至二百元。

馬鹿が七
百圓以上

麝香鹿は俗に花鹿と云ひ、或は馬鹿とも呼んでゐる。わが邦で人を罵る馬鹿といふのは、この動物の特性から出た語源であるともいふが餘り當てにならない。

毛皮は實用でなく裝飾品で、角は薬用に、臍が香料になるなど變つてゐるが、容易に捕獲し得るので、近頃では種が絶へてきてゐる。馬鹿と云れるだけのるまなのかも知れないが、麝香鹿角だけ一對で七百元以上もするからなか／＼馬鹿にはならない。

綿羊、兎、
猫皮

この外、綿羊、山羊、兎皮も多く産出するが、狐皮と貉皮は蒙古産が一番で、獺皮は西藏、銀鼠は蒙古、猫皮は全國到る所に産するが、寒い地方のがよく、關東地方のが一匹二元内外なのに、暖い楊子江南地方のは毛が薄いため、一匹が僅に五六十錢に下落する。

以上のうちで、狐皮には紅、玄、黃、白、黒の五種類があり、玄狐が一番に高く、産出も少い。

玄狐

わが邦で婦人が襟巻に用ひてる黄狐は産出が多いので、値も亦甚だ安い。外に草狐、金銀狐（河狐）、吉祥狐（西河狐）などは何れも品質が劣るので値も低くなる。

尖つて細い毛の大きく、潤澤で光りがあるのは上乘で、玄狐には銀針といふ白い尖つた毛が雜つてゐる。

紅狐は毛色が血のやうに赤く、白狐は白い柔い毛が純白、黄狐は黄金色をしてるのがよい。

灰鼠は従來、値も、質も輕便で綺麗なので、毛皮類中では最も流行してゐたものだが、近頃は六割から高騰してきたので、中産階級では鳥渡手が出なくなつて來たと云れる。

毛が墨色でくる／＼と縮んでるやうのが一番佳く、關東（滿洲）産には紅色の大毛が混じてゐるものもあるが、これも亦佳い。

貂のうちでは紫貂と云ひ、滿身に銀針を植えた如く、毛は長く、黒色に光りがあるのは最優等品で、數千金でも求め得ないものだ。

毛皮のうちで一番に普及してゐるのは羊毛で、これにも亦いろいろの種類がある。

羊毛皮

羊毛皮としては山西交城産のが最良で、その品質が柔く光澤があり、九曲三灣の姿態

があるといふのは、一襲が六七十元でも買ひ得なかつた。

同州産のは沖灘皮トシチヤウと云ひ、前記のに較べて品質が聊か劣る。この外に毛の長い平毛ヒシヤウ（二毛ともいふ）は厚ぼつたく、冬至後に着用するによい。毛の短いのを羔毛カウヤウと云ひ、くるくと縮き縮んで、普通の羊毛に較べ、耐久的だ。これは甘肅カンシュ、口莊コウヂヤウ、西口セイコウ、交城チヤウチヤウなどの地方からも産出するが、同州産のが一番によいとしてゐる。

北支那で活してゐれば、中産階級の士女ならば大抵羊毛の最上衣や外套位は持つてゐるが當り前であるが、始めて求める時、低劣な品質のを掴まされることが往々にあるから注意しなくては不可ない。

皮革商のうちには早く賣らうと急ぐため、羊皮を陽で乾したのでなく、炕カウで乾燥したのであるが、これは板のやうに皮が固いから、よく見ればすぐに判る。

それから羊は槐樹の葉を食料としてゐるので、皮に大疔ダイシが発生し、なめしてから皮にぼつくと穴が開いてゐるのが多い。こんなのも永持ちはしない。

牧童が羊を鞭で引つ叩くことが多いので、血が皮のうちに浸み、なめしてから血痕が残つてゐるがあるし、屠殺夫が皮の目方を増さうとし、血と砂とを皮に塗り込んでゐる悪劣

毛皮のイ
ンチキ物

白羊皮と
黒羊皮

羔皮

のもある。羊皮まで斤量で賣買することから、かうした悪辣な手段が考へ出されたのだ。

白羊皮と黒羊皮では、後者が汚れが眼につかないところから需用が多く、大毛ダイマウといふ長い毛のは北支那の人々が防寒用にし、中毛チュウマウといふのは皮地が薄く、大羔ダイカウ、辨羅ヒシヤウ、卜絲フスなどのことで、羔皮は山羊の毛、青種羊は羊種中での傑出したもの、値段も高く、狐や猪の皮と變らない。北支那ではこれを草上霜ソウジョウとも呼んでゐる。

昔、春秋時代に、晏子オンシは一狐裘を三十年間も着てゐたといふことが記してあるが、晏子の節儉といふよりは、毛皮がいかに耐久的に使用し得るものかを示してゐるわけで、體裁を飾るのもあるが、防寒用と經濟的觀念から來てゐるに違ひない。

狐の毛皮では玄狐シユキといふのが百年に一匹捕獲すると云はれる位に珍しいもので、これで作ると、大衣ダイイ（外出用の寛衣）でさへ一着分、數千圓を要するので、毛皮類の王座を占めてゐるものだ。

玄狐といふのは眞黒い狐で、支那では昔から狐が八百年を生きると毛が紫となり、九百年で黒くなり、一千年以上で純白となつて、通靈變化が自由自在となると云はれ、九毛九尾の狐などの類で、先づ傳説的存在となつてくる。

玄狐大會

先年、上海の大集成皮貨局で玄狐大會といふのを開催したことがあるから、玄狐までは現存してゐるといふことは判る。

この會には八匹分を陳列し、公衆の觀覽に供したが、中に一匹だけが純黒色、外は腋下に白毛を生じてゐるので、九百數十年を経た狐であると鑑定された。

壽獸

玄狐は玄模とも云ひ、九百年以上も生きてゐるので壽獸と稱し、鹿の仙獸と共に珍重してゐる。

仙獸

鹿の方は生れながらにして仙獸であるといふのは、これから全鹿丸を始めいろ／＼の藥を作るので、雄鹿の始めて角が芽の如く生えてくるのを鹿茸と云ひ、これを珍重する。

鹿を殺す
鹿を禮拜

藥屋で鹿を殺す時、必ず吉日を選び、その時刻になると、店主から店員一同、線香や蠟燭を點じ、鹿の前に叩頭禮拜する習慣で、これが済んでから扼殺するのだ。さうでないとなりの怒りが有るとして怖れてゐるが、殺す前に禮拜するところなど、重慶地方で兒女が病氣になると、自家で飼養してゐる雄雞雌鶏を集め、保爺と保娘と呼び、夕食後にこの前へ線香・點じ、兒女の病を治してくれるやうにと禮拜をし、萬ヶ一、奇蹟的に治つたとすると、これ等の鶏を料理して喰べてしまふが、この功德により、來世は人間に生れ變てく

保爺と保娘

るといふのだが、これと似て勝手なものだ。

幾ら禮拜されても、鶏は病氣を治した上に喰べられてしまひ、鹿は病氣を治す藥になるから締め殺されてしまふのではやり切れないわけである。

玄狐皮の
効用

玄狐の外套はいかに烈しい霜霰雨雪も内側には浸濕することはないとされ、齊東野語といふ古書に、玄狐は千年以上の修練を積んでゐるので、千變萬化の能を備へ、飲食動靜が少しも人と異ならないので、よく美しい女に化け、若い男を蠱惑する。これが天にゐる玉帝の知るところとなり、獸心未だ去らざるものとして人に捕獲させるに到るのであると記してある。

黃狐の捕
獲法

これが蒙古の庫倫地方に産す、黃狐になると、性質が狡猾なので、晝は山窟とか密林に匿れ、滅多に人に見られないが、土人たちは捕獲するに、無臭無味の藥で半脯(乾した牛肉)を作り、土に穴を掘つて、そこへこれを置き、上から薄く沙をかけて置くと、夜になつて食を獵りに來た黃狐がこれにかかつて知覺を失つてしまふのを、難なく捕へてしまふのだ。

灰鼠の捕
獲法

灰鼠は蒙古に多くゐるが、松鼠に似て、大樹の上に巢喰つてゐるので、舊毛が落ち、新毛

が生え代つた頃を見計ひ、これが棲んでる樹の四方一面へ、網針を刀の山のヤリに細くさして置き、木砲で巨きい音を立てて、急に驚かすと、灰鼠は粉々として地に墮ち、網針の間に盡く死んでしまふが、俗に膽小なること灰鼠の如しといふのは、臆病な灰鼠のかうしたことから生れた言葉である。

紫貂の捕獲法

紫貂も亦貴重なる毛皮であるが、形は狸に似て毛が深く、褐色であつ、性質が慈悲深いと云れ、これを捕獲しやうとする土人は、嚴寒大雪の日、豫め紅砒(藥)を吞んで、上衣を脱ぎ捨て、裸體で雪中に臥してゐると、紫貂はこれを見て惻み、奔つて來てその身の廻りに集り、寒さを防ぐやうにしてくれるので、それを片つ端から捕へて、まふといふが、善心に惡を報ひるので、その志を憐れみ、前朝時代には品位ある大官以外は貂服を着るのを許さなかつた。つまり福が無いのには、この徳獸の功を受けさせないわけだ。

徳獸

この外、毛皮となる野獸を捕獲する方法には、銃で射殺する外に昔から傳る原始的な關王雉、鷓鴣、鴛鴦、鴛鴦子、確塘子、燈板子などいろいろあるが、何れもその獸の特性と嗜好を利用して捕獲するのである。

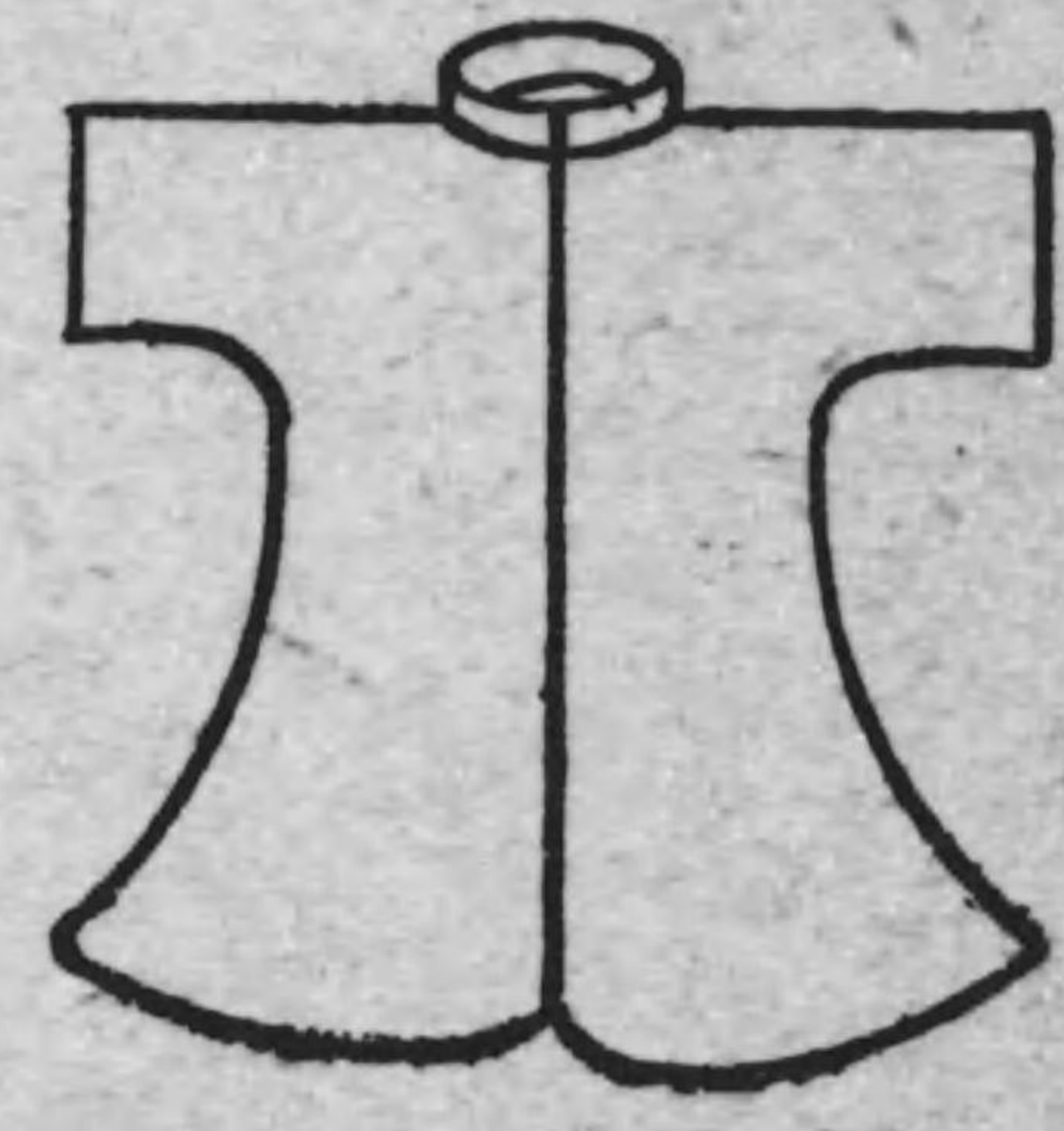
支那服の禮裝

支那服の禮裝で最も普通のは褂式とか馬褂式と云はれる、わが邦の短い羽織と同じ格式

の左記の如きものだ。

褂式

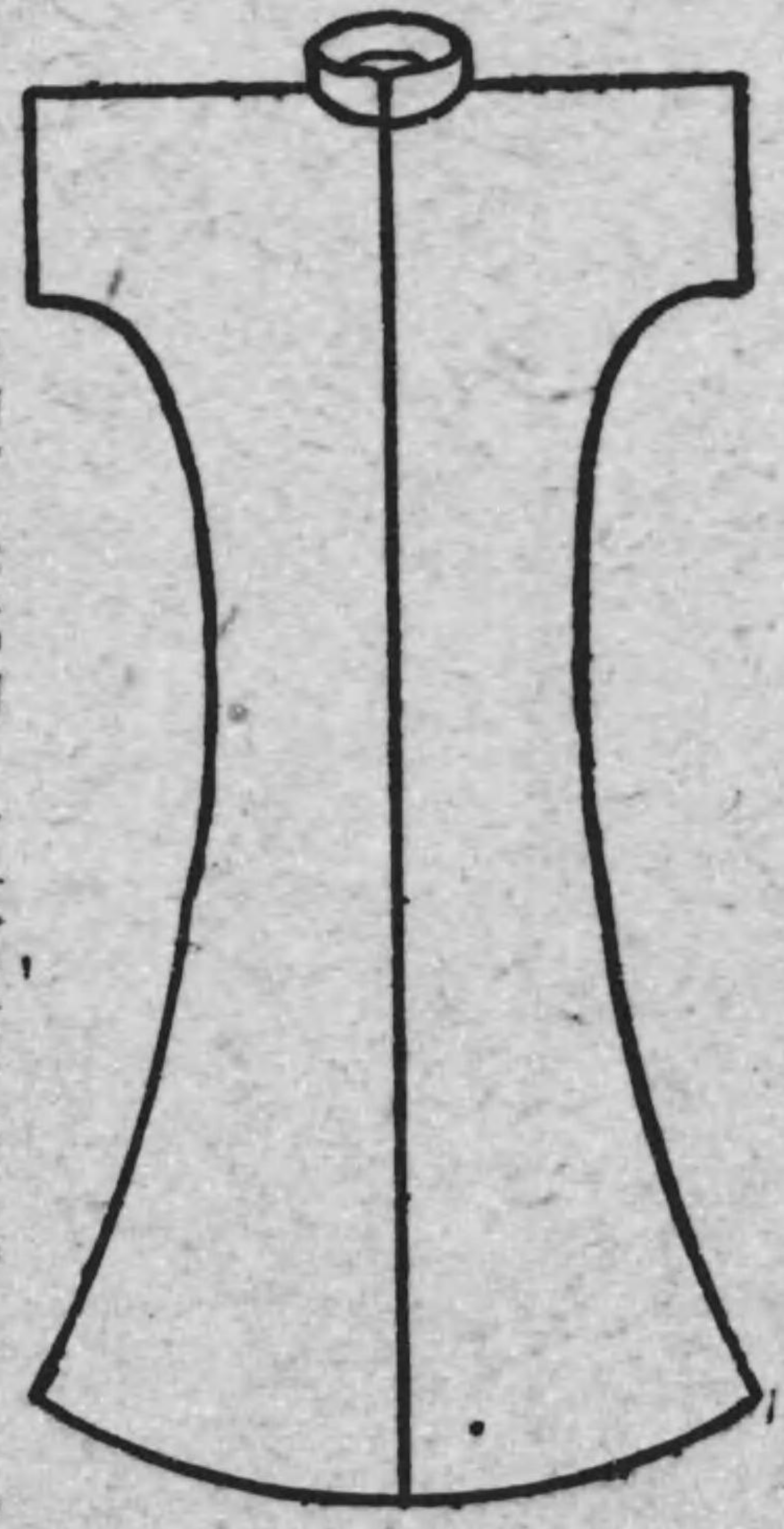
式 褂



長さは臍ぐらひまでの短い上衣であるが、普通に夏は長衫チンシャといふ春秋冬は袍パオ(長上衣)の上に着用する。婦人は馬褂マコは用ひない。地質も夏は紗、冬は緞子、羅紗といふ風に、季節に據てこれづくに異なる。

袍式

式 袍



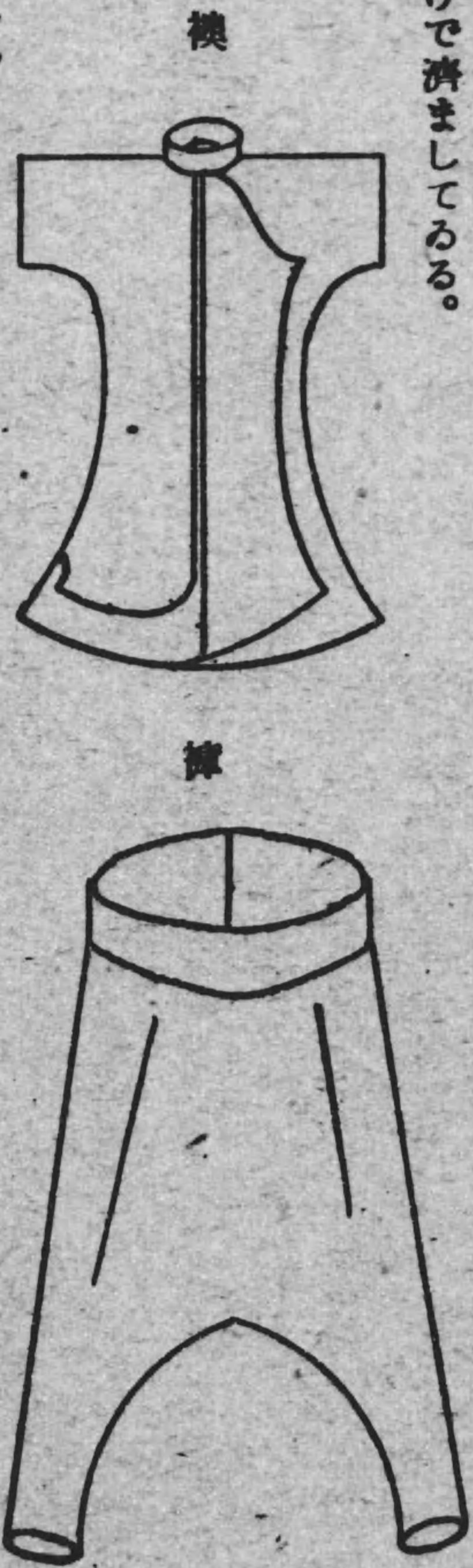
袍は上着のことで、初春とか初秋などに用ひ、袷アキの夾袍カキパオ、綿入ワタイリれを綿袍ワタパオ、嚴寒に着用する毛皮裏付の皮袍ウシパオと云ひ、前記してある毛皮をそれづくに裏につけてゐる

地質は絹物、毛織物など厚地が多い。わが邦の着物と同じに長さ附クサシに達し、婦人は袍パオを着ず、襖アキといふ背廣服とおなじ位の長さのを常用する。以前は長さが膝までのを用ひたが、この頃は餘り見受けない。夏の衫カミは滿州婦人は長いを用ひ、左右兩側が割れ

襖

てる。

襖も袷は肌襖、綿入は綿襖、毛皮裏のは皮襖と云ひ、袴とか襖の下に着る、つまり重ねて着る下着を小襖、労働者とか下層階級の人には袴は用ひないので、夏は小衫、冬は小襖だけで済ましてゐる。



袴はズボンと股引の中間をゆくもので、支那人は袴や猿又をかけずに、ちかちかにこれを穿いてゐる。

これは前後共に塞いである袋のやうな形で、大便は無論、小便をする際にも一々脱がなくてはならないが、防寒用としては暖く、脚もとは袴帯といふ巾のある紐でぐるぐる巻きに結んであるし、腹のところは袴腰を締めて、風の入らぬやうにしてある。

男子の袴子がだぶ／＼してゐるに引きかへ、婦人のはいいので膝位のもあつて、きつちりと腿についてゐる。

この袴子の上に男子は多く袴といふの穿くが、袴と譯してゐる人もゐるが、これは前に膝を蔽ひ、後は尻を蔽はない脛衣で、單衣、袴と綿入とがあり、嚴寒には毛皮裏のを用ひる。

幼童の穿く股引、尻が開放してあるのを童袴と呼んでゐる。

衫は袍とおなじ型で、たゞ地質は薄く、夏季に常用し、麻、絹、木綿などの單衣、これの綿布製小衫は丈短く、袖が窄く、男女用の肌着(シャツ)とし、四季を通じて用ひ、そのまゝ寝巻にもなつてゐる。

支那人は婦人でも冬、一米を纏はぬ裸體で寝てゐるものもあるし、中には龜の子腹掛のやうのをしてゐるだけのものもある。小衫を寝衣に着てゐるのはよい組だ。

以前には禮式として外掛(長さ膝に達した馬褂)を用ひたものだが、國民政府がこれを廢止し、今では馬褂が禮式となつたので、支那人は平生でもこれを着てゐるから、冠婚葬禮には日本人のやうに一々着換へないで、そのまゝ出かけて差支へない。この點、頗る簡便

労働者の
着物

に出来てゐるわけだ。
たゞ激しい労働をする人々は長衫、袍とか馬褂を用ひないで、短衫、短襖だけのが多い。これはさうした着物では仕事が出来ないからであらう。

しつし激しい労働をしない連中、店員とかボーイ、學生、徒弟などは長衫、袍を常用し、馬褂は用ひてない。

大衣

商店主、支配人、番頭、親方、社員、役人などは馬褂を用ひ、夏はこれを脱いでる時もあるが、儀禮としては必ず着用することになつてゐる。

坎肩兒と
馬甲

大衣は外套。一口鐘はサント、背心は袖無し、單衣、袷、毛皮裏つきなどあつて、夏は綿布のを肌着として直接用ひ、冬は防寒用として上衣の上に着用する。

坎肩兒と
馬甲

北支那では坎肩兒、上海地方では馬甲と云ふてゐるが、婦人が外衣として背心を着てる姿はいかにも可愛らしく見えるものだ。

袴子はスカートで、上衣の内側、袴子の外側に着用するが、これには裏のとり方である種類の種類がある。

男子の大禮服はフロックコート、燕尾服の外國物から常禮服はモーニングコート、軍人

大禮服と
常禮服

學生は詰襟服、地質は絹、緞子、襦子など、夏は絹袖、麻、木綿と民國元年十月三日公布で指定してあるが、依然として毛織物が多い。

今でも大概は馬褂、袍子の常禮服で、全ての儀式を間に合せてゐる。

婦人の禮
装

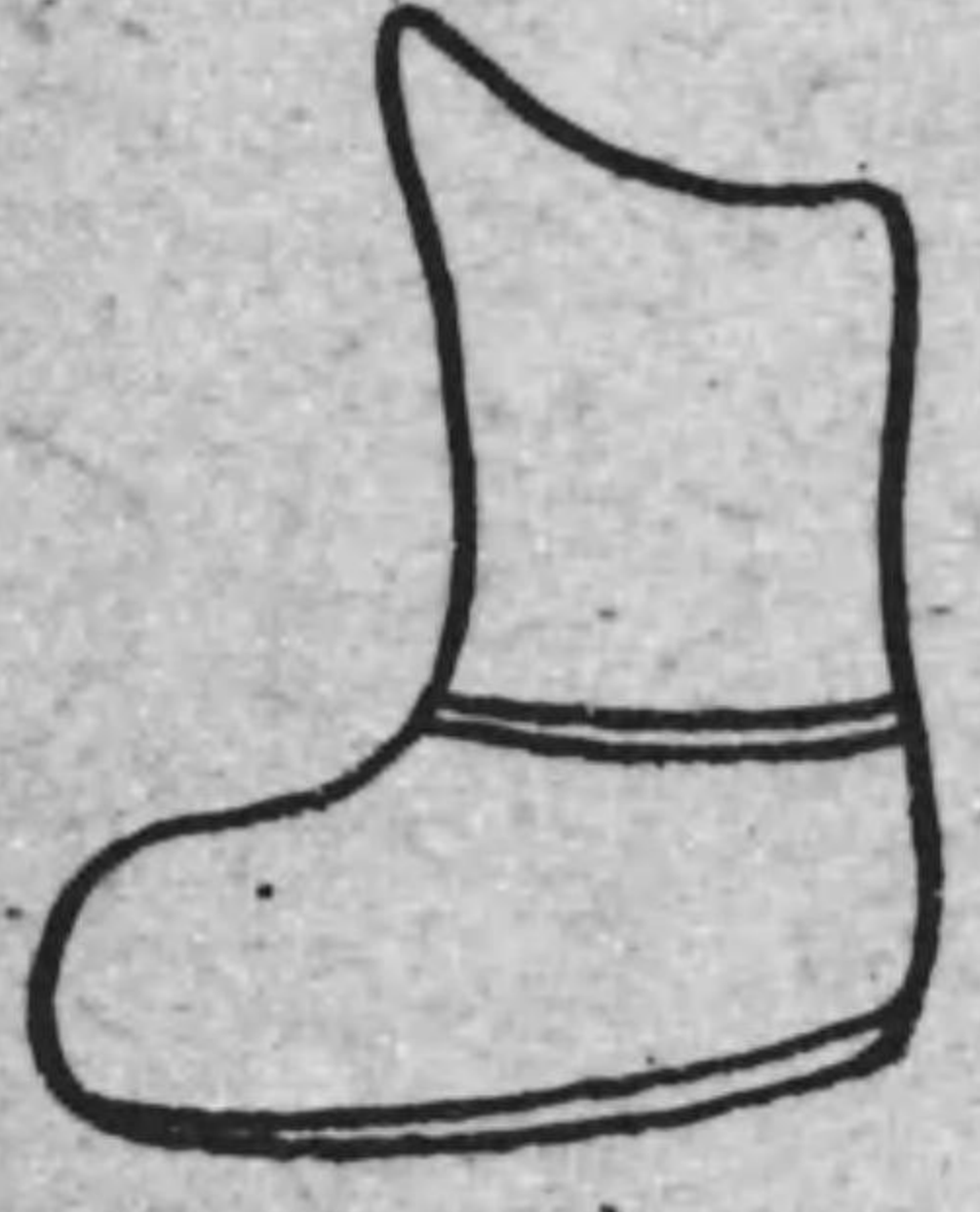
婦人の禮装は對襟の外褂（馬褂の丈け長きもの）と套裙（行燈袴式で襷のあるもの）を着用することになつた。

帽子

帽子は夏は麥藁、ヘルメット、小帽、その外の季節は中折、烏打などで、碗を冠つたやうな小帽は四季を通じて冠る。冬は黒無地緞子、ピロード、夏は紗を貼り、裏は赤い紗。帽頂の飾りは絹糸、毛織の球、黒染の馬毛などをつけてゐる。

靴

靴は皮鞋（皮の短靴）、皮靴（皮の深靴）などから、いろいろにあるが、普通一般に常用してゐるのは禮式用として左記。



色が黒く、長さは脛に及ぶもの。

便鞋



套鞋



便鞋と套鞋との型を較べてみると判るが、双方共に短鞋だが、一方は舌のやうなものが出ているのが違ふ。

四禮制と服制

支那の禮式はあまりに煩雜に過ぎるので、民國元年（大正元年）八月十七日に公布して一定した四禮制及び服制といふのがある。

服制は前述のであるが、挨拶その他の禮儀は左の如く定つた。

禮の仕方

男子の禮は脱帽して鞠躬（上體約四十五度位、前に傾け、相手に注目するので、わが邦の敬禮と同じ）。これが現在、支那での禮となつてゐるが、慶典、祝典、婚禮、葬禮には脱帽して三回の鞠躬禮を行ふ。

鞠躬

公宴、公禮式とか普通の慶弔、交際、宴會などは脱帽して一回鞠躬すればよい。普通の挨拶禮は脱帽だけ。べこべと低頭などすると、先方から蔑視される。丁寧だなどと思ひ違ひをしてはいけない。

軍人、警察官にはこの禮制を適用せず、別に規定を設けてある。

婦人の禮としては脱帽三鞠躬と脱帽一鞠躬を適用するが、脱帽しないでもよいことになつてゐる。支那婦人で外國風に帽子を冠つてゐるのは稀と云つてもよい。

普通の挨拶などは鞠躬だけと制定してある。たゞ婦人の鞠躬は両手膝に重ね、小腰をかがめる程度だ。

握手

軍人、警官は擧手の禮の外、握手が近頃は禮として外國式に行れる。

特殊な禮としての禮頭は、神佛を拜し、喪主が會葬者へ挨拶、大官の前へ出た時、大恩を謝し、大罪を詫び、義父子、義兄弟の盟をする場合などに、右膝を地につけ、左膝を曲げて立て、両手を前につき、額を地につけ或は近くつけるやうに下げるのだ。

老人などの間に残る、昔風の禮に作揖と請安とがある。

作揖

作揖は両手をさげたまゝ、前で右手の握り拳を右手で包むやうに握り合したまゝ、両手を伸して上に擧げ、胸と同じ高さにきた時、胸前に引きつけ、右手の指の外側を上向きにして先方へ注目する。随分と小面倒臭い禮などで、近頃は両手を胸前で組み合わせるだけの簡單なのに變つてきた。

請安

請安は滿州旗人（旗本）の禮で、右足を一步、後にひき戻し、爪先を地につけ、膝を直角に折り曲げ、右足は足底を地につけたまゝ、折敷の恰好で直角に折り、上體を眞直にしたまゝ先方を注目するのだが、今はこの禮は廢れてきてゐる。

初對面

初對面とか餘り親しくない間柄であれば、訪問しても長座しないのを禮としてゐる。そして訪問には先づ自分の名刺を出す、悔みに行くのには名刺の周りに黒枠をつけ、或は姓の下、名の上の左角に小さい制の字を認めてゆくと、先方に對し喪に服してゐる意味となる。

さて應接室にでも通され、主人と面會する際、巻煙草を啣へたままでもたりしては禮を失するわけで、右手で脱帽して鞠躬の禮をするが、着席する際、主人が上座をさし、請座チシツオウ（どうぞお掛け下さい）といふが、客も一應は主人に向ひ、請座チシツオウ（どうぞお掛け下さい）と云つて、先に腰かけるのを辭退するが、再び主人が勸めてから、客も請座チシツオウを繰返し、一緒に椅子に腰かけるのが禮だ。

主人が勸めもしないのに、勝手に腰掛けてゐるのなど、無禮至極としてゐる。

答禮訪問

訪問を受けると、屹度一兩日中に回拜カイバイ（答禮訪問）をするのも慣習であり、儀禮だ。

年賀

年賀は訪問した客が新禧シンシ（お芽出たうございます）と云ひ、主人は同禧トウシ（お互ひさまにお芽出たうございます）と禮を返すが、先方が尊長であれば鞠躬三遍、普通は一遍、客より年小、低輩は主人が呼び出して、客に對し禮を行はせる。

どんな身分の低い家でも、年賀にゆくことは、甚だしく敬意を表する意味になるから、これは交際上から行ふがよい。

年賀の時期は正月一杯は差支へないが、普通に元宵節ユウサウセツ（正月十五日）以後は遅いとされてゐるからこの前の方がよい。年賀を郵便で間に合はせる方法も盛んに行はれてきた。

結婚式の注意

結婚式には、懇意の間柄でも、花嫁を前から知り合ひでない限り、勝手に話すことはいけない。花婿の許しを得るか、紹介をして貰つてから話しかけるのだ。

お悔み

悔みに行くのに、下男などに名刺を持たせてやるだけでもいいが、矢張自身で出向ひて主人に逢ひ、弔辭を述べるのが禮だ。

辭去の注意

面談が済んで戻る時、同輩以上のは主人が表門まで見送り、客が車に乗るのを目送るのが禮で、これに對し目禮して答へるのが禮となつてゐる。

この見送つてくる途中、客は幾度か留歩留歩リウポリウポ（どうぞこれまでに）とか請回チンカイ（どうぞお

戻り下さい」といふ言葉を繰返し、見送りを辭退するのも形式的であるが、行ふべきことであつて、それを知らぬ顔で見送らせるのも失禮になる。

しかし客不送客（客は客を見送らぬ）といふ習慣があつて、客同志では見送りに立たないことになつてゐる。

客が戻る時、室の内側まで見送るか、單に起立して、目送すればよい。

十四 裁判・刑場・出産・迷信

右と左の位置

日本と支那とは位置なども反對で、支那は右を重んじ、左を輕んじてゐる。右に出づるもの無しとか、左遷などの言葉がある通り、座席なども右が主で、左が従となるが、わが邦でも近頃、支那式とか外國風に右を重んずる向もあるが、天照大神を左方に配して以來、古代民族が善惡に對しての宗教的信仰から左方を向ふことになつて、古來祭神が偶數の場合、主神を左方に奉安してゐるし、明治神宮の御祭神の神座を奉安した場合、左方（向つて右）に明治天皇、右方（向つて左）に昭憲皇太后を奉安してゐると云れてゐるが、この一事でも日本は左方を向ふ國であることは判る。

ところが支那人は右を主とする國民であり、更に方位では南北を重んじて、これを經とし、哲學、道徳、宗教の基礎としてゐる。

言葉でも南船北馬を始め、南と北といふ語はよく用ひてゐるが、東西はあまり用ひてな

5。

それはいつも南北との関係の下に文化が興り、戦争が行れ、易姓革命が繰返されてゐる地理的影響からであるが、昔から北極を天の中樞として君位に配し、君の居所を紫宸殿といひ、政治を聽く所を大極殿とし、君は南面し、臣は北面して仕へ、衆星が北辰に迎ふ如きに譬へてゐるわけで、この思想が古來支那を支配して現在に到つた。

日本はこれと反対で、東西を經とし、政治、道徳、宗教の根底としてゐる。太陽を崇拜する思想を基礎とし、地理的にも、文化的にも東西相及び、戦争も亦東西で相對峙してゐたものだ。

わが邦では角力を始めすべて東西に分けるが、南北に分けるのは殆ど無い。支那はこの反対で、すべてが南北に分けてゐて、東西に分けるのは稀である。

かういふ點から支那の國民性——習慣、生活の相異を調べて見るのも興味あることと思ふ。

それから支那人は數の觀念に就ては漠然とした答へをする。もつとも金錢だけは實に綿密で、零細な點まで念入りに勘定をするが、利害關係の伴はない場合、距離にしても、數量にしても、少い時には好幾個（五六個）とか十幾個（十幾つ）、澤山あるのは好些個など

數の觀念に乏しい

不親切と思ふ答へを平氣でやつてのける。

田舎道で里程を訊くと、近い所であると一里多（一里あまり）。ところでこの一里餘りたるや、一支里は約六町だからいい加減に目的地へ着く時分であるのに、またそこで訊くと一里餘り、隨分腹の立つやうなこともあるが、これは珍しくない。

道を訊く注意

市街地で物を訊くにも、煙草でも買つてから、その店で訊けば、或る程度判るやうに教へてくれるが、さうでないとならば不親切な返辭もするし、出鱈目も云ひかねないのだ。

我是我、他是他（俺は俺、彼は彼）といふ考へは、他人がどうであらうと、自分に關係のないことはどうでもよいのであつて、利害關係があれば親友、利害關係がなくなれば他人、利害が反すれば敵となる。

俺は俺、彼は彼

幾ら表面、懇意な間柄を装つてゐても、蔣介石が韓復榘や石友三を體裁よく招き寄せて銃殺したりするが、かうしたことは支那として珍しいことでない。

これは政治、軍事方面のみでなく、あらゆる場合に繰返される事象で、損することさへなければ、一見舊知の交際を續けるし、面子のためには利害をも忘れるやうな様子もしてみせ、いかにも平和を愛するかの如く思れる反面、極端に殘虐なことをやつてのける。す

べて各方面で脱線的行爲の多い國民であるから、なか／＼常識では割り切れないことが少からずある。

支那には各自己の門前の雪を掃き、他人の瓦上の霜を算するを休めよといふ諺があるが、要するに他人のことに構はず、自分のことだけしてゐるといふことで我是我、他是他で、些末なことでも利害関係がない限り、知らぬ顔をしてゐる。

路傍で他人が物を落しても、黙つて見てゐる支那人が多いし、逸早くそれを拾つてゆくのを、羨望して見送る位が關の山だ。

救済も勘定づく

水に溺れさうになつてゐる人が救ひを求めてゐるのに、幾らお禮をするかと交渉してから相談が纏り救助するなどといふ話もある。

まさかと思ふが、或はこれに似寄りのことも少くないと考へる。

渡船賃
一人二圓

奥地の旅で、解氷期のこと、橋梁が流れ落ちて、渡船で河を渡して居つたが、普通は一、二錢であるのを、私たちは一人二圓づゝを請求され、もしこれを支拂なければ渡さないと拒絶されたこともあつた。

そこから橋のある地點まで、上下共に四五里の距離があつて、河向ふには有名な温泉が

あり、その寺院の屋根が森の中に囚か見え、湯の煙が白く、夕暮れの霧の中に溶けこむやうに眺められたが、すぐ眼の先に泊る宿がありながら、かうした難題を吹つかける。

そして部落の人々は殆ど總出で、そこに集つて、成行を興味深さうに見てゐるが、一人として不都合をなじるものもなければ、各自に我不關焉といふ態度をとつてゐるのだ。

排日とか、抗日とかいふ思想が熾烈な當時のことではなく、それ程までに日支兩國が仲の悪くない頃の話である。

かうしたことは獨り外國人ばかりでなく、おなじ支那人同志でも、他郷人となると、よく行はれると見え、見聞した話も少くない。

傳染病でなくても、病人を連れてる旅人は宿屋で泊ることを拒絶するし、支那人は他郷で死んだ人の柩を故郷へ持ち歸る習慣があるので、これがいつも一難題、餘程金でも出さない限り、宿屋へは泊られないのだ。

他人の困るのを傍

雨が降ると、支那の道路は沼澤のやうに急變するが、荷馬車などがそこへ陥つてゐても誰一人として手傳つて、引きあげてやらうなどといふ篤志家はない。

大抵は大勢の群衆が面白さうに、その廻りを取り圍んで見物をしてゐる。多額な金でも

支那の村
には役場
がない

出すとなると、われ勝ちに手傳ひ始めるところなど、實に現金に出来てゐる。
隣家へ泥棒が押入つて、騒ぎ立てても知らぬ顔であるのが多い位であるから、人殺しを
目撃しても、利害のない隣人であれば、證人になどならないし、有利な證言など吐かない
で、口を緘してゐるのが普通だ。

支那の田舎はどこへ行ても、村役場など一軒もない。全てはその村で選んだ村正（村
長）と長老などが話し合ひで、村治を行ひ、割り當てられた税金の取り立てに、書記のや
うな男が本業の側、面倒を見てゐる位で、あらゆる村のことは村でやつてのける。

縣役人の出張などの際、宿の世話とか接待役は書記の役で、その代りこの男にだけは多
少の手當とか穀物などを支給してゐる。

治安維持から裁判までしてゐる村もあつたが、税金以外のことは、縣でも一切關係しな
いことになつてゐるので、村裁判まで行ひ、罪の輕重に據て處罰してゐる。近頃は正式の
裁判所も各地へ設けられてきてゐるが、なほ縣知事が生死の鍵を握つてゐる司法官を昔な
がらに兼ねてゐるので、随分と珍無類の裁判も多く、笑話の種を残してゐる。

事變前に北支那の某縣知事が死刑執行と、その裁判に就てはこんな變つた話がある。

生死の鍵
を握る縣
知事

これは私が警察で、容疑者を取調べ實際を見たのだが、その男は足枷をはられ、頭
から兩腕へかけ、自由が利かないやう嚴重に縛りしめてあつた。そして中腰の恰好で土間へ兩
膝をつかせ、左右の耳を双方から警官が引つ握んで、打つ叩いても打つ倒れないためと、
白情を強ひる場合にこづき廻すに都合のいいやうにしてゐた。

お白洲式
の容疑者
の訊問

卓を前にして取調べの係官、容疑者に向つて卓を烈しく叩き、眼を斜に睨みつけたり、
大聲に嗚鳴つてゐる模様は、時代が逆轉して、支那にあることを忘れ、どうしても徳川時
代のお白洲の取調べ、お揃きでも見てゐる觀がある。

私は當時、その縣知事の息子を書記として、或る會社で私の下に使つてゐたので、自然
と縣衙門とそれに附屬してゐるその警察署へ自由に出入し、こんな場面を屢々見ることを
得たが、容疑者に対しては甚だしい拷問が行れてゐたものだ。

犯人を死刑に處する場合は、その罪狀を認めて省長に差し出し、斷罪の指令が來てから
行ふのが例で、かくくの罪に據て死刑を執行するといふ布告文を、縣城の目ぬきのと
こ、要所に貼り出して一般に告知する。

變つてゐる
死刑宣告

それから犯人に死刑を宣告する場合、大抵は縣公署の庭で、そこには机が一脚、上に赤

インキをいれた小皿と新しい筆が一本だけ用意してあり、外に机上には高粱穀が縦に通してある長さ二尺程のザラ紙で作つたのし餅型の招子、犯行と姓名が記してある。

刑場に犯人を引いてゆく時、この招子を先に立ててゆくし、執行の場合、側にこれを立てて置くのだ。

足枷をはめた犯人を四五人の下役で、手とり足とりしてその机の前、五六歩の位置へ引きかづいできて、どかんと大地へ投げるやうに置く。

そこで縣知事から死刑の宣告が行れるが、知事は机上の筆を執ると、どつぷりと赤インキを一杯に含ませ、罪状と姓名の認めてある招子の上を右の肩にボンと一點打ち、ついで筆を下から三寸位のところに打つて、そのまま眞下まで引きさげ、それをあげないで更に筆を下から上へ、逆に姓名犯行を認めた上へ引きあげて走らせる。

この下から上へ、赤線で引き終つた時が死刑宣告の終りだ。

そしてその招子を後手に縛られてゐる犯人の背中へ挟むと同時に、知事は前にある赤インキの筆や皿の載つてゐる机を、前方へ力一杯に轉覆させ、さつさつと縣役所へ引き揚げてゆく。これが今も尚行れる死刑執行宣告の型である。

宣告が終つてなせ
机を引つ
くりかへ
すか

なんで机を引つくり返すかといふと、二度と再び死刑囚を出すな、縣内からさうした極悪囚を出さないやう、この机も二度とは用ひないやうとの、昔、支那での大岡越前守といふべき包龍圖判官の型をそのまま繼承してゐる形式である。

名裁判官であつた包龍圖は心からさう願つてしたのであらうが、今では形式だけの型が残つて、満州國でも縣知事代理で死刑執行を宣告する場合の參事官など、依然としてこの型を行つてゐるさうだ。

どうも舊慣墨守といふか、かうした支那人の習慣は随分不合理なものも多いが、害にもならない限り、廢止するにも當らないからであらう。

死刑執行の方法もこの頃では銃殺が多いが、以前には絞決といふ絞殺とか凌遲といふ斬首を多く用ひてゐた。

首斬り役
人

直接に刑の執行するものを劊子手と云ひ、昔で云へば首斬り役人で、大抵姜安といふ姓名だがこれは外の姓名でも皆さう呼ぶ習慣なのであらう。

これは清朝の初め、大盜に姜といふ五人兄弟がゐて、群盜を率ひ、四方を荒し廻つてゐたが、惡運盡きて遂に官の手に拿捕され、打ち首となつたが、これ等の靈を五虎神として

鬼頭手と
鬼頭刀

曝し首

祭祀したが、この神さまは殺人を掌るといふので、爾來五虎神の姓である姜をとつて、首斬り役人は用ふに到つたと云れてゐる。

死刑執行人を鬼頭手、その首斬り刀を鬼頭刀と云ひ、四尺からある長いので、柄に鬼の彫刻があり、両手で振冠つて、罪人の首級を斬り落したものだ。

つい最近まで匪賊などは梟首——曝し首にし、人の眼につく所の城門とか、城壁ぎわなどで往々見受けたものである。

張作霖に叛いた郭松齡の首級も、奉天で曝し首になつてゐるのを見たが、近頃はあまり見なくなつた。

囚人絞殺

絞殺は囚人を刑場の杭に後手に縛りつけ、繩を頸に巻きつけ、兩人の下役が兩端を握んで引つ張るのだが、それでも絶命しないと、下役が囚人の腹を蹴りつけて殺すことになつてゐる。いかに馴れてゐても、死に臨む刹那の顔を見るには耐へないと見え、死刑囚には濡した布を顔にかけるが、これは酒に浸けたものだといふ説もある。

斬首も矢張下役兩人が死刑囚の両手を執り、他の一人は頸に巻きつけてある繩を前方へ引つ張り、殆んどその體を地面と平行にしてゐるところを、ヤツと劊子手が斬り落すので

ある。

以前には坑の前へ連れてゆき、そこへ斬り落とし、首級が落ちてから、胴體をその坑へ蹴込んだこともあつた。

凌遲といふのは囚人を眞裸體にして戸板に縛りつけ、最初に左乳を削り、次に右乳といふ風で、最後に頸を斬るまで、さんさんに死の苦痛を與へる残酷な處刑であるが、近頃はこの處刑も廢止された。

最近では三人を一緒に銃殺した處刑を見たことがある。

刑場は北京ならば廣安門内の近くといふ風で、大抵城壁の片隅で、死刑が行れるとなると口から口へ言ひ傳へられ、執行時刻前にはその附近一帶幾萬といふ見物の群衆。小高い丘などは皆それ等が占めてしまふ。

やがて定刻近く、警戒の兵士と共に馬車で死刑囚が運んで來られた。

匪頭であるため、途中の襲撃とか奪回を怖れ、警戒は頗る嚴重を極め、刑場でも執行地域の廻りをぐるりと銃劊をつけた兵士たちが取り圍んで、見物の群衆へ陽光にキラ／＼と輝く銃口を向け萬一を防いだ。

銃殺刑

三尺位の間を置いて立つてゐる枕へ、三人の死刑囚は布で眼を縛り、三つ指の指環をして縛られた。

喇唳たるラッパの音が響き、刑を執行の時刻となつた。

囚人の前、二間ばかりの位置、鬼頭手が銃の覗ひを定めて立つてゐる。最初に額を射られるのは三人の内、一番に罪の軽いもので、次々と打ち、再び同一囚人の胸を打つて、都合一囚人に二發づつで射殺する。

血が傷口から水道の口の如く、さつと奔り出るが、兩脚を大地から離し、縮めてしまつたのが居つた。

この跡片づけは乞食たちの役目で、無造作に席に死骸を包んでしまふが、その血潮を饅頭に浸したのを喰べると、兒女が壯健になるといふ迷信から、手にく、饅頭を掴んでゐる婦人たちまでが、われ勝ちに死刑囚人の屍骸へ近づいてゆくのを見た。

死刑囚の 血染め饅頭

跡片づけの乞食たちに何がしかの金を握せて、血潮に饅頭を浸して貰つてゐるものもある。これは私が滿洲建國前、安奉線の本溪湖で見た一場景であつて、血染めの饅頭は決して出鱈目ではない。

どこの國でも婦人はその兒女のため勇敢にもなり、献身犠牲的な話も少くないが、平素

は家庭から一步も外出しないかの女たち、刑場で殺されたばかり、なほ濡みも残らうといふ死骸の側にまで近寄つてゆくところ、兒を思ふ親の愛情からであらう。

支那では五十にして子なき場合、神佛に祈願し、易占を頼み、後嗣を得ることに努めるが、璋瓦の別は依然として存し、男兒は大切に、女兒は厄介物視してゐる。

何れにしても出産に對しての風習は各地それなりに異り、随分と變つたことを行つてゐるところが多い。

北京の出 産前後の 風習

北支那としては代表的な北京の出産前後の風俗に就て記してみやう。

女が嫁してから妊娠すると、夫の家では何を置いても先づ嫁の實家へそのことを、人を遣つて知らせる。そしてその後、收生婆、俗に吉祥姥姥といふ産婆を頼むで、いつ頃出産をするか、所謂認門といふのを調べて貰ひ、臨月近くなると嫁の實家からは胎兒出産後に用ひる着物、帽子、布圍、枕、生れた時に包む襖衣(産着)と頭櫃(絹とか木綿で製した高さ一尺餘りの隋圓形ので、嬰兒の頭前に置いて風を防ぐ)などの物と、食品を送つて寄越し、これを催生(産を催促する)と呼んでゐる。

催生の禮

産婦の家では一切を産婆の指圖に任せ、その喰べ物まで氣を配り、生れる日待つてゐる

るのだ。

嬰兒生がれると、産婆はその家の人々へお祝ひの言葉を述べ、ここで謝禮を貰ふことになるが、嬰兒の父親はこのことを、最初に家庭で一番尊い位置にある祖父とか祖母と、順々に告げ知らせて叩頭の禮を行ひ、それから先祖の靈が祀つてある祠堂へ香燭や供物をして出産の報告をする。

次に人を遣つて親戚知人へ知らせるが、この報を得たかれ等は何れも黒砂糖、栗、玉子素麵、菓子などを産婦へお祝ひとして贈物をし、その返禮として紅く染めた玉子數個とか數十個をそれ〴〵に贈り届ける。

洗三屆期

生れてから三日後、始めて嬰兒を沐浴させるが、これを洗三屆期と云ひ、支那人のうちにはこの時の産湯と、結婚の時、死んだ際の湯灌の三回きりしか、一生涯のうちに入浴しない人もあるのだ。

この産湯には親戚知人が皆揃つて參觀するのが禮だが、産婆が豫め用意した湯のいれてある容器を産婦の寝てゐる床側の臺上とか、或は炕の上に置き、その側に銅製のお盆を置いてあるが、その中には昔、通用した馬蹄銀貨、銀貨、銅貨などが數枚乃至數十枚いれ

てある。

外に大きな碗に水を一杯、用意してから、産婆は嬰兒を抱へ、産着の絨子を脱がせ、新しい手拭を湯に浸して、嬰兒の全身を綺麗に洗ひ淨めるが、口のうちでは絶へず目出度い文句を経文のやうに繰返してゐる。

その時、親しい人々は交る〴〵に前へ進んで、お盆の中にある金を掴んで、産湯をつかわしてゐる容器へと、擲け込むでゆく。更に碗中の清水を容器の中へ注ぎ、これを添盆と云つて嬰兒の沐浴産湯の式はこれで終りだ。

その容器中の銀貨などは一切、産婆が貰ふことになつてゐて、外に家人からはまた謝禮をする習慣である。

親友たちは改めてお祝ひの言葉を述べ、嬰兒の家では油麵（肉汁をかけた素麵）などを用意し、來客を招待するが、これを吃洗三麵と云つてゐる。

彌月

嬰兒が生れて滿三十日目を彌月と云ひ、親しい人たちから衣服材料とか銀器をお祝ひに送つてくるとか、或は紅い紙に、以前であると外國銀貨一弗一枚或は數十錢をいれてゐるのがある。これを彌敬と云ふ。

ここで出産の家では改めて宴席を設け、これ等の人を招待し、産婦は部屋を出て、皆に禮を述べ、生んだ兒へは家長——その家で一番重い位置にある人が乳名——幼名をつけてくれるのだ。

一年目に
抱養神を
祀る

これがまた頗る簡単で、換子、羣子、升子、來子、捨子……等の名で片づけてゐる。一年目には親しい人が贈つてくれた贈品に據て、出産の家では皆を款待する禮を行ふ。生れた嬰兒の身が虚弱であると、その父母は乳名を書いて、寺院に詣で、丈夫にしてくれるやうに祈願をするが、これを財障和尚と云つてゐる。生れてから一年内に、部屋に娘、俗に天花娘、を祀るが、嬰兒に抱養を豫防するため、これが神の加護を乞ふわけだ。

一家三房

北京では第一夫人である正妻の生む兒は重視し、嫡派と稱してゐるが、その外の第二夫人以下の妻の生むのは、食事などの着席も下位に座してゐる。一家三房といふのは、兄弟三人のうち、一人に男兒があり、外に子のない場合、各自に嫁だけを迎ひ、一人の男で三人の嫁を迎へ、それらの繼承を断たないためだが、この時は親友などに證人に立つて貰ひ、將來財産上での紛糾を避ける手段にしたものだ。これを

兼統といふがその例は少くない。

北京の地安門外、沙井胡同の徐某は蒙古物産販賣業を盛大にやつてるが、兄弟五人で僅に子が一人しかないので、衆議で一決し、各家にそれ／＼に嫁を買ひ、門戸を別にし、その子が五人の嫁を妻とし、現在も尙家業が盛んで、左右隣人が皆之を羨望してゐるといふ事實もある。

承宗桃はわが邦にも行れる方法で、兄に後嗣がないので、弟の子をそれに直すことだ。

支那の家庭では後嗣を定め得ないうちに、家長が死んで、その家が資産家であると、醜い財産争ひをしてゐるのが少くない。

兄弟姉妹
が二十餘
年の財産
争ひ

北京の東城、王廟馬胡同の松某は資産數百萬、子女が十三人有つた、異母から生れたので、松が没後、財産分配のことで紛争すること二十餘年間、今も尙解決しないで、兄弟姉妹が訴訟をし、争つてゐるが、かうしたことは到るところに壽山にある。

月經帶で
作る貯項

鄭州地方では兒女が三歳になるまで、無事に育つてくると、神佛の加護が厚いものとし、母親の月經帶で作つた貯項といふ襟類にかけるものにして、毎年その布を一枚づゝ増して

ゆき、十二歳の時、十二枚になつた時項を取りはづすが、これは開鎖といふ儀式を行つてからだ。

時項には銀鎖で取りはづしが出来るやうになつてゐるので、鎖を開く儀式で、この時は貧富の階級でまち／＼であるが、その兒女の生れた月日に親戚知人を招いで盛宴を張る。庭に天の玉帝を祭る壇を設け、そこには天地三界十方萬靈真主之神位と記した位牌。左右には紙馬、香燭、供物をさし上げ、外では爆竹を放つて慶祝する。

この時、家長が葱と蒜で開鎖する兒女の頭上を叩いて、葱でお前の伶俐聰明を開き、蒜でお前の計數を明らかにするなどといふ偈へごとをするが、この後で來賓を招いで開宴、主人から客一同へ大小の壽桃を象取つた菓子とか素麵を贈りものにするが、貧しい家では親戚知人を招かないで、儀式だけを行ふ。

開鎖の式が終つてから結婚の相手を定め、許婚の約束をするわけで、遅くも男兒は大概十四歳前後までに自分の妻となる女を、双方の両親同志で約束をしてしまふのだ。そして甚だしいのになると、十六歳前後で結婚をするが、相手の花嫁は大抵十八九歳が普通で、嫁が婿より年が多い。

植物姓と動物姓が結婚しない理由

結婚には同じ姓、譬へば李は李といふ同姓の家とは結婚しない習慣で、近頃は幾分この傳統的迷信も崩れて來てゐるが、一般には同姓不婚といふことが常識化してゐる。それから茫姓は郭姓と結婚すると、かれの飯を奪れて貧乏するといふ迷信などあつて、絶對的にこの兩姓は結婚しない。更に面白いのは田とか蔡姓は馬とか牛姓とは結婚しない。なぜかと云ふに、田とか蔡のやうな植物に關係のあるのは、牛とか馬のやうな動物姓と結婚すると喰れてしまふといふ迷信からだ。

この外、結婚の儀式、葬式、北支那の年中行事などに就ては、多くの雑誌とか支那に関する書籍に屢々掲載してあるし、拙著「支那の商人生活」にも詳述してあるからここでは省くが、支那で始めて出産の時、嫁の實家からお祝ひとしての贈物の中に、搖籃がいられてあることは、北支那のやうな土地の生活にはびつたりと調和してゐるものと思ふ。

搖籃は大抵木製で、半楕圓形を二つ繋ぎ合したやうなので、これを母親が側で仕事をしながら水平に揺り動かしてゐるのだ。

夏は南京虫、虱や蚊の襲撃を避けるに簡単な設備で済むし、冬は暖い所に擇んで移動が自由であり、母親は手を休めることなく、兒女のお守をしながら家庭の仕事が出来る。

室内の温度は天井が高く、床が冷く、中央の空間が一番快適な温度であるといふことを云れてゐる上から、抵抗力の弱い乳兒に搖籃は理想的のものとされてゐる。

支那人の生活、習慣だからと云ても、よいものであればどしどし採り入れるし、悪いものは排撃すればよいのだ。

しかし新しい教育を受けた支那人のうちには、日本人も顔負けするやうな外國に感觸れたものが多く、齒の浮く外國語を用ひて平氣である。

先生といふのは何々さんといふ位の意味であるが、〇〇老兄とか、〇〇兄が矢張〇〇さんとか〇〇君に當るわけて、近頃では〇〇君とか密斯脱〇〇（ミスター〇〇）などといふのが現れ、〇〇小姐（〇〇お嬢さん）といふ古い品のある言葉の代り密斯〇〇などと娘の名を呼ぶのさへ現れて來た。

昔の科學の試験にパスした狀元、榜眼、探花の代りに、傳士、碩士、學士などの言葉が使れてゐるのであるから、下堂が離婚となり、妍頭が愛人と變つたからとて不思議はない。

たゞ以前は豆棚や絲瓜の棚下で、蓮の葉の露で、茶を煎じ、胡琴でも抱へて唄ひ且つ清

談に耽るとか、楊柳の塘上に釣を垂れ、竹林に棋を圍み、綠蔭深きところで蟬の鳴くのを聴いてゐるなどは馬鹿臭いといふ人が多くなつた。

若い、都會に棲む支那の青年はダンス、水泳、映畫、コーヒー、ウキスキー、公園の散歩、スキー、自動車で風を切つて馬路を飛ばすのを趣味とし、道樂と考へてゐるのが多い。

古い人は依然として舊慣に囚れて古臭いのを誇りとし、新しがり屋は途方もなく脱線してゐるのを新しいと信じてゐる。

しかし、眞の支那の姿は都會より田舎にあつて、鵜の眞似をする鳥でない、排日や抗日騒ぎを稼業にしてゐる學匪、兵匪、政匪、商匪……等、等ではない。かれ等も亦支那人の一部に違ひはないが、日本人が相手にすべき支那人ではないのだ。

支那は恐ろしく自分を謙遜するかと思ふと、一方に恐ろしく傲慢な態度を見せる國民である。

支那人同志で話してゐる言葉を聴いてゐると馬鹿らしくなる位に自分を卑下してゐる。

問一响好嗎（この頃は御嬢様よございますか）これに對しての答へが、不過鬼混而已（亡者が混つてゐるやうなもので）、自分が役立たぬこと、亡者に同じと謙遜する。

今年尊庚若干（本年。お歳は幾つでしたかね）これに對し、癡長四十五歳了（四十五歳まで啊呆で生きのびました）と、自分を啊呆といふわけだ。

尊夫人好麼（奥さんは御嬢様宜しいですか）賤内托庇平安（お陰様で、下賤な奴は安穩です）といふ答へで、更に甚だしいのになると、令郎幾位（御子息はお幾人ですか）に對し、型に入つた答へは小犬三人（小犬が三四）と、幾ら自分の子息でも犬は卑下し過ぎる。

これを相手方がもしも先方に向ひ、亡者と云ひ、啊呆、下賤な女、犬などと云つたならば大變なことになつてしまふが、かうしたことが虚禮とは云へ、支那人と對談する場合、用ひなければならぬ言葉だ。

婦人の氏

〇〇氏と云ふのは、支那では婦人の姓につけ、韓氏、張氏など記すが、敬稱でなく、うじといふことで、新聞紙などでは駆落女や萬引した娘にも李氏、蔣氏などと氏をつけて書いてるが、日本人から見ると意外である。従つて男性に〇〇氏などと支那で用ひると、婦人と誤れるから注意が肝要だ。

うじは氏なくして乗る玉の輿とか、住所氏名などの氏の義で、家柄を意味してゐる。

十五 鬼神・巫占・仙術・祭祀

現代の支那人は生命より金錢を大切にす国民であるから宗教の必要はない。従つて支那に宗教はないと極言する人もゐるが、鬼に角キリスト教などの外教とか回教は除き、儒佛道三教と陰陽巫乩などの雜教が盛んで、中で智識階級は多く儒教を信仰して外の宗教を排斥するが、一般は儒教と一緒に佛教も道教も、その他の邪教淫祠をも信仰してゐる。

邪教といふのは別に邪惡の宗教といふ意味でなく、祀典に列挙しないで、昔から民間で信仰してゐる數多い神々をさしていふので、これを邪神と云ひ、祀つてある祠宇を淫祠と呼んでゐる。つまり祀典に載せてある正神、正教に對しての區別に過ぎない。

支那で一番旺んである儒教は孔孟を祖とした聖賢の教義に基く、道德、宗教、政治の三者が渾然と融和してゐる立派なものであつたが、その精神が多く理解されないうで、たゞ形式的裝飾である禮を矢蓋しく云つたので、今では形骸ばかりの宗教となり、教義の精神は失はれてしまつた。

そして治者が被治者の反抗を押へる道具としたことは、道教も、ラマ教も同一であつて、封建制度の遺物であるといふところから、蒋介石政府では一時、全国の孔子廟や關帝像の破壊を断行したとさへあつた。しかし後には行き過ぎた秕政を察知し、再び廟の修築を命じたりしてゐたものだ。

文廟と武廟

儒教の大本山は孔子の生れた山東省の曲阜にある孔子廟で、ここにはその末裔が住んでゐたが、全国各府縣に末派に當る夫子廟が造られ、文廟と稱して孔子像を祀つてあつた。

この文の神さまに對し、武廟といふ武の神さまは武侯祠、關帝廟で、四川省成都南門外のを大本山とし、關羽の首級を祀つてある山西省解州と骸だけを祀つてある湖北省當陽とが次に位する本山で、これも全国到るところに祭祀してある。

清の高祖が滿洲に起つて、兵を中原へ進めた際、大變に苦戦をしたが、關帝の示顯を得て勝つたといふ觸れ込み。その實、漢民族に縁のない滿洲族の清朝が政略的にかつぎ出し、民衆の意を迎へるに努めたわけだが、この結果、急に關羽像を祀る關帝廟が到るところに築造されるに到つた。

佛教は印度から傳來し、一時は頗る盛大に行はれたものであつたが、今では各地に残る

堂塔伽藍が昔の面影を留めるに過ぎない現状で、揚子江南地方が比較的盛んだ。

僧侶のうちには眼に一丁字のない文盲が多いことから見ても、現在、支那の佛教がどんなものであるかは想像がつくであらう。

道教は元來、一種の哲學であつたものを、儒教と佛教とを加味し、その僧侶を道士と呼び、袖口の廣い道服を纏ひ、長髪を束ね、道帽を冠つてゐる。かれ等が呪符禁厭まじなひの法を案出し、宗教的形式を與へたものであるが、一時高貴な方の信仰を得て、儒教を凌ぐ盛んな位置にあつた。

宗教的形式

この一派の大僧正を真人といふのは、かれ等の教祖、老子を讚美した莊子の言葉から出たのである。昔からある神仙思想と結合し、怪しげな仙談妖術を主旨として、衆生を超脱させるといふわけで、出世とか輪廻りんねの説を立て、苦難を克服することを強ひたもので、一般民衆はこのために支配者に對しての反抗心を滅殺させられたが、巧みに時の政治の道具としたに過ぎない。

道教の廟を觀宮コウキウ、或は廟ミヤと呼んでゐるが、北支那から中支那へかけ、佛教と道教は盛んに行はれてゐる。

仙人の本質

老子が本來說いた意義とは違つてゐる、曲解した教義の下に、道教の利用から仙術が生れ、これにはいろ／＼な傳説が加り、神仙即ち仙人の本質を説いて、その存在を主張する葛洪の如き人さへ出てきた。

何人といへども仙人になり得るが、それには鍊丹を服用し、深呼吸を行ひ、上薬を用ひ、房事を避け、厳格な日常生活の修道によるのだが、さて仙人となればどういふことになるかといふと、かれは既に藥物で身を養ひ、術數で生命を延べてゐるから、内に疾なく外に患なく、舊身のまゝで死ぬことがない。不老長生とか不老不死になるといふのであるから、秦の始皇が徐福へ五百人の童子をつけ、船で東海へ仙薬を求めしめた事實に似てゐる馬鹿げたことが、今でも繰返されてゐるのだ。

そして上薬は金丹その他で、中薬は性を養ひ、下薬は病を治し、安心立命して長壽を保つものであるが、何人も仙人になり得るとはいへ、仙道に縁のないものはなり得ない。ではどんな人間が仙人になるのかといふと、一番下等の下仙となるにも多くの善行を積み、神仙たるの修養に努め、行を正しくしなくてはならない。更に地仙は三百の善行を行ひ、最上等の仙人である天仙は千二百の善事を積んで修道しなくてはならないと説いてゐる。

天仙・地仙・下仙

雲に乗り、霞を吸ひ、鶴に駕し、虎を馭して、仙人の姿はあつて無きが如く、天地の自然を意のままに變化し得、金を水と化し、水に入つて濡れないし、刀槍も身を傷けることがないといふのだ。

この道教の神仙思想が今でも怪教匪賊などに採用され、多くの秘密結社などで、呪符を胸に貼つてゐると、銃丸も身に當らないし、醫ひ當つて倒れたにしても、すぐと蘇生してくるなどといふことが迷信され、案外無智から生んだ勇敢な働きをみせた話も少くない。大刀會とか紅燈教、紅槍會などを始めいろ／＼の怪教秘密團體にはかうした事實が誠にやかに傳り、行れてゐる。

名山と仙薬

北支那であると泰山の如き名山に仙薬——丹砂、玉札、五芝、雄黄、曾青、雲母などを採りに入る際は齋戒沐浴した後、一切の魔障を避けるため、昇山符をつけ、直徑九寸ばかりの明鏡を背につけて、吉日を選んで登山しなくてはならないとか、それ等仙薬の調製にも矢筈しい規則が設けてある。

この神仙のことは昔の話だと思ふと大違ひで、支那の奥地にはかうした仙人とか生佛が自ら名乗つて出現し、忽ちの間に數千、數萬の信徒を獲得し、妖威を振つてみせること

も、往々にあるので、昔の話としては片づけられない。

現に道教の廟に於ける行事はなか／＼盛大に行れてるもので、北京の白雲觀の開帳を始め、滿洲唯一の楽しい年中行事である娘^{ニヤニヤ}祭、これも道教の一派で、御神體は三體の女神——中央が福壽、左右に治眼と授兒の側像が安置してある。

この娘々廟に祈願を籠めると、未婚の女は良縁を得るし、有夫の女は良い子孫を授けられ、金も儲かれば、出世も出来るし、病も治つて長壽を得るといふ、頗る靈顯あらたかな神さまとし、全滿州各地にある廟は一般から素晴らしい信仰を得てゐるものだ。

長い結氷期の冬籠りから、春の訪れである河畔の猫柳の芽が紅く燃え出し、いつか畑には高粱の緑、街路のアカシアの花の匂ひが漂^{たは}ひ始める頃ともなれば、人の心も浮々としてなごむ陰曆四月十八日前後、五日間がこの祭りで、大陸的色彩の豊かなものだが、この日の來るのを人々は待ち焦れてゐる。

いつもは見る影もない廟の所在地、祭りの日となれば遠近から押しかける參詣客で、身動きも出来ない人出で、一大歡樂郷を現出する丘の上にある廟をめぐつて、見渡す限り茫茫たる曠野にはアンペラとか天幕張りの小屋が立ち並び、芝居に、奇術に、見世物など、

遊覽娛樂

大道藝人か露店商人。農具、馬具、世帯道具から日用雜貨、材木まで商つてゐるといふわけで、一年に一回の祭りと市場も同じことだ。

遠くからは蒲^{カマ}銚型の幌馬車や荷馬車に一杯、老若男女の人が鮪詰めに乗り込み、田舎道をゆられながら娘々廟へと集つてくる。

幾萬、幾十萬を算する人出も珍しくなく、大石橋にある娘々廟へは滿鐵も臨時列車を運轉したやうな記憶もある位だ。

支那も近頃は遊覽娛樂場も大都市では獨立した設備で、その目的のため開かれてゐるが、北支那の田舎へゆくと、遊覽となれば大抵寺院とか廟觀の開帳を兼ねてゐるのが多い。

現に北京なども一年を通じての遊覽場所となつてゐるのは、矢張この例に漏れないのであつた。

東便門外にある三忠寺は正月二日のたゞ一日の開帳。

北新橋の精忠廟は正月二日と正月十三日から十七日まで五晝夜打つ通しで、これを燈^チ節と呼んでゐる。

德勝門外の大鐘寺は正月一日から十五日。

琉璃廠東の火神廟は正月一日から十五日まで開帳で、ここでは一般の見世物などより古い書畫骨董の陳列即賣が呼物になつてゐた。

おなじく琉璃廠官密内の廠甸は正月一日から十五日までが廟會。

西便門外の白雲觀は正月一日から十九日までが廟の開帳。

西四牌樓大街の護國寺は正月一日から七日まで、廟にはいろいろの商品を陳列し、見世物や大道商人で賑ひ、舊式の市場と變らない雜鬧をみせる。

崇文門北の隆福寺は正月一日から九十日間の長期な開帳で、前記の護國寺と同じく賑やかなもので、これと共に北京の兩大市會と呼んでゐる。つまり盛り場式開帳だ。

安定門外の西黃寺は正月十三日から十五日まで。

德勝門外の黒寺は正月二十三日から二十五日までで、喇嘛教の舞踊の佈札が催されるので有名であるが、俗に演鬼と云つてゐる。

前門大街の香廠は正月一日から三十日までが會期で、露店商人と芝居などがここに集る。

崇文門外の太陽宮は二月一日から五日間。

東便門南河坡の蟠桃宮は三月一日から三日までが縁日。

馬鞍山の柘潭寺は三月中旬が開帳。

朝陽門外大街の東嶽廟は三月一日から十五日まで。

西直門外迤北の高梁廟は清明節（陰曆三月の節句、陽曆では四月五日前後）に都人士が郊外へゆき、先祖の墓地を清掃して、その墓前で楽しく飲食して一日を送る習慣がある。

これを踏青節とも云ひ、冬の家籠りから解放され、燃え出た野や丘の青草を踏む意味からここへ遊覽に来る人も多し。土地により上巳の節句をさう呼ぶところもある。

宣武門内の城隍廟は清明節から三日間と十月一日に開帳。

城西の碧雲寺は四月一日から十五日間。

おなじく妙峯山は四月一日から十五日までと七月も十五日間を開山。

城東北のY髻山は四月中に十五日間を開山する。

永定門外十里河の關帝廟は五月十一日から三日間で、ここでは競馬と競車。奉納芝居があるので知れてゐる。

安定門大街の雍和宮は五月十三日に喇嘛の讀經行事。

廣安門内の善果寺は六月五六日が縁日。

崇文門外の龍君廟(荒神さま)は八月中に開帳三日。

西便門外の白雲觀は九月一日から九日まで壇を築いて讀經の行事。

廣安門外の五顯財神廟は九月十五日から三日間。

正陽門外の天壇は陽曆十月十日の民國々慶記念日に三日間を開放したが、今はいつでも自由に參觀し得ると云れる。

おなじく先農壇も以前は同様であつた。

阜城門内の白塔寺は十月二十五日に番僧たちが讀經するので、それに參詣し、後世の安樂を得るといふので、賑つたものだ。

以上は大概舊曆によるのであるが、遊覽場所として昔は、今のやうに劇場、映畫館、デパート、市場など盛り場の常設が少かつたので、どうしても寺院や廟觀の開帳縁日が唯一のものであつた。

支那人は天地間のあらゆる森羅萬象に精靈が宿つてゐると考へ、大樹には樹神があるとし、猥りに伐採すると禍害が來たと信じ、葬式がその側を通る時、神意を汚すを恐れ、

行列を止め、香燭を點じ、拜をなしてから改めて列を整へて進んでゆく。

門には家内へ邪惡の入るを防いでくれる門神、一家内の功罪を見守つてゐる灶神、早魃には雨乞ひの龍神、洪水には河神に祈り、蝗害には蝗神に願ふといふわけで、不可抗力と不可解な自然現象はすべて神の主宰するとして、蝗までそれを主宰する神がゐると思つてゐたのだ。

鬼神即精靈

人間は死んで、肉體は亡びても、精神はそこから分離し、鬼神——精靈となつて、一定の形なく、無數にこの世に存在してゐると信じてゐる。

先祖の祀り、招靈行事の盛んなのも、ここから來てゐるわけであるが、正月に先祖の靈を招くのに、北支那では大晦日の夜半、長竿を中庭に立て、家族一同でそれを禮拜するが、これを祖宗竿子と云ひ、先祖の靈がこの長竿により中天から乗り移つてくると考へるので、聊か滑稽ではあるが、實際に行ふてゐる地方もある。

非業の最後を遂げたものは、廟に祀る習慣で、これはそのままにして置くと、その精靈が妖怪と化し、人間に災禍を及ぼすものと云れ、鬼神として祀ればそのことがないわけで、支那で鬼といふのは亡者と同じだ。

祭祀を規定してある典禮には、東岳、火神、城隍（城市の守護神）先師、關帝、文昌などの神を祀るところは廟と名づけ、風雨、雲雷、嶽鎮、海濱、名山、大川、龍神、禦災捍患（公共とか戦争で犠牲になつた靈）、名臣忠節、賢良などの神を祭るとは祠と名づくとしてあるが、この區別は判然してない。

祭祀節會

一體、支那では祭祀節會といふものは頗る重視し、朝廷自らに天地日月を祀り、太廟祖宗を祭るし、民間でも先祖を祀り、商店では月に一回、歲神を祭る習慣だ。

各縣城とか市には城隍廟（わが縣社に當る）があるし、村落には土地廟（わが鎮守さま）があつて、春秋二季には盛大な祭典を行ふ。

その外、孔子とか關帝などの廟、その大祭は各地共に旺んで、寺院廟觀の開帳は前述した北京の例の通り、矢張これも各地共に行れてゐる。

花甲年

個人の家庭としては、最も一般的風俗として誕生日の祝宴。これは六十歳になると花甲年と稱して一倍祝賀を盛大にし、親戚知人は皆贈り物をし、その家では壽宴を催すのだが、高位大官になると三日も五日も一流の役者を招いで芝居を見せ、連日の祝宴は頗る壯觀なものだ。

六十歳前後は十年毎に壽宴を開くこと、北も南も變りがない。

次に支那人が盲信してゐるのは巫乩易占で、これを縁業として生活してゐるものも少数でない。

曾て蒋介石が南京に都を遷した時、廢娼令を布くと共に賣卜業者の追放を命じたことがあつて、支那では盲目がこれに係つてゐるのが多いところから、随分悲惨な光景を呈したが、今では又昔のやうに自由に營業が出来得るやうになつた。

巫と醫

巫女とか巫婆、呪文禁厭を行ふ道士などは精靈と惡魔と妖術などの迷信を適用したものであるが、これも易占に劣らない位に盛んで、昔の方術士が巫であり、醫師を兼ねてゐたものだ。

これは昔の醫師のことを醫と書いてゐたところからでも判るが、醫は三つの文字から構成され、醫は箭筒或は折り曲げた左腕中の矢を示し、彘は刀槍を握つた右手を示し、下の巫は方術士とか祭官を象徴してゐたものであると云れ、下部の巫が西に置き變へられ、醫といふ現在の文字に代つたのは、患者の手當に酒類などを用ひる專問の醫士の手に移つてからで、それからの巫は怪しげな術を施す縁業として残るに到つたのである。

昔、病氣は全て悪鬼妖魔の仕業とされ、これを撃退するには呪文、護符、祈禱の迷信的方法を以てしてゐたので巫は重用された。

當時、熱病患者はすべて三種の鬼魔がなす仕業とし、發熱の前、寒氣を覚えるのは、冷水の桶をさげてる鬼のためで、高熱は爐を抱へてくる鬼のなすところ、頭痛は他の鬼が患者の頭を叩くからだとしてゐたので、治療法としてはこれ等三種の鬼魔を祈禱呪文で追ひ拂ふより外はないとしてゐた。

これに類する治療法が現今も向北支那の或る地方に行れてるとしたならば、まさかと思ふ人も多いことであらうが、實際易者や巫婆の言葉に従ひ、一命を捨てるものも少くない。吉凶禍福、慶弔の裁斷を易者に求むる習慣は牢乎として脱け切れないものと見え、大都會ほどかれ等が繁昌をしてゐるのだ。

生活習慣 北支那篇・終

昭和十六年七月十五日印刷
昭和十六年七月二十日發行

生活習慣北支那篇

〔定價 金二圓〕

著者 米田祐太郎

發行者 高山菊次
東京市小石川區鷹籠町一八九

發兌 教材社
東京市小石川區鷹籠町一八九

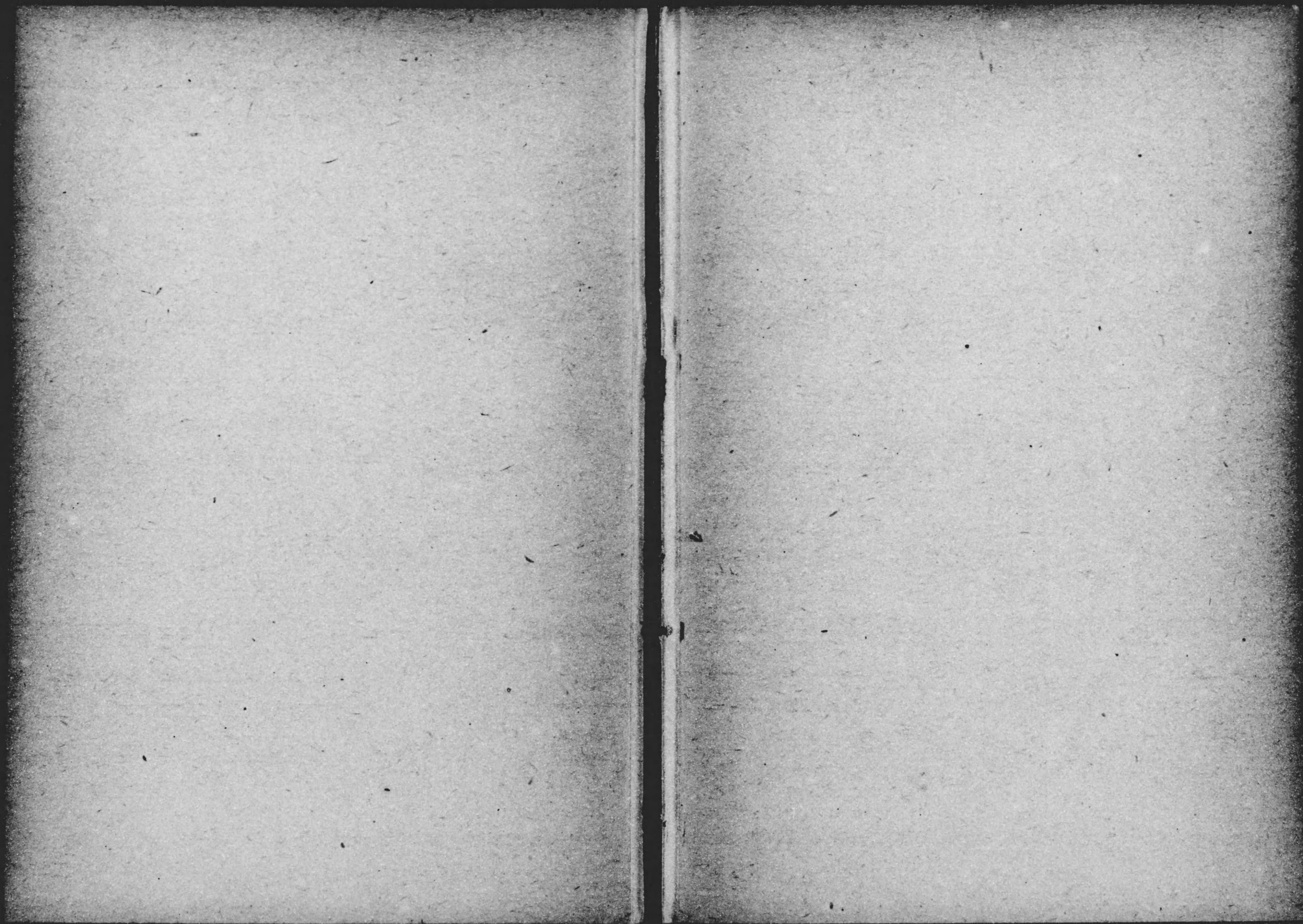
電話大塚(86)二〇三八番
振替東京五六二四三番

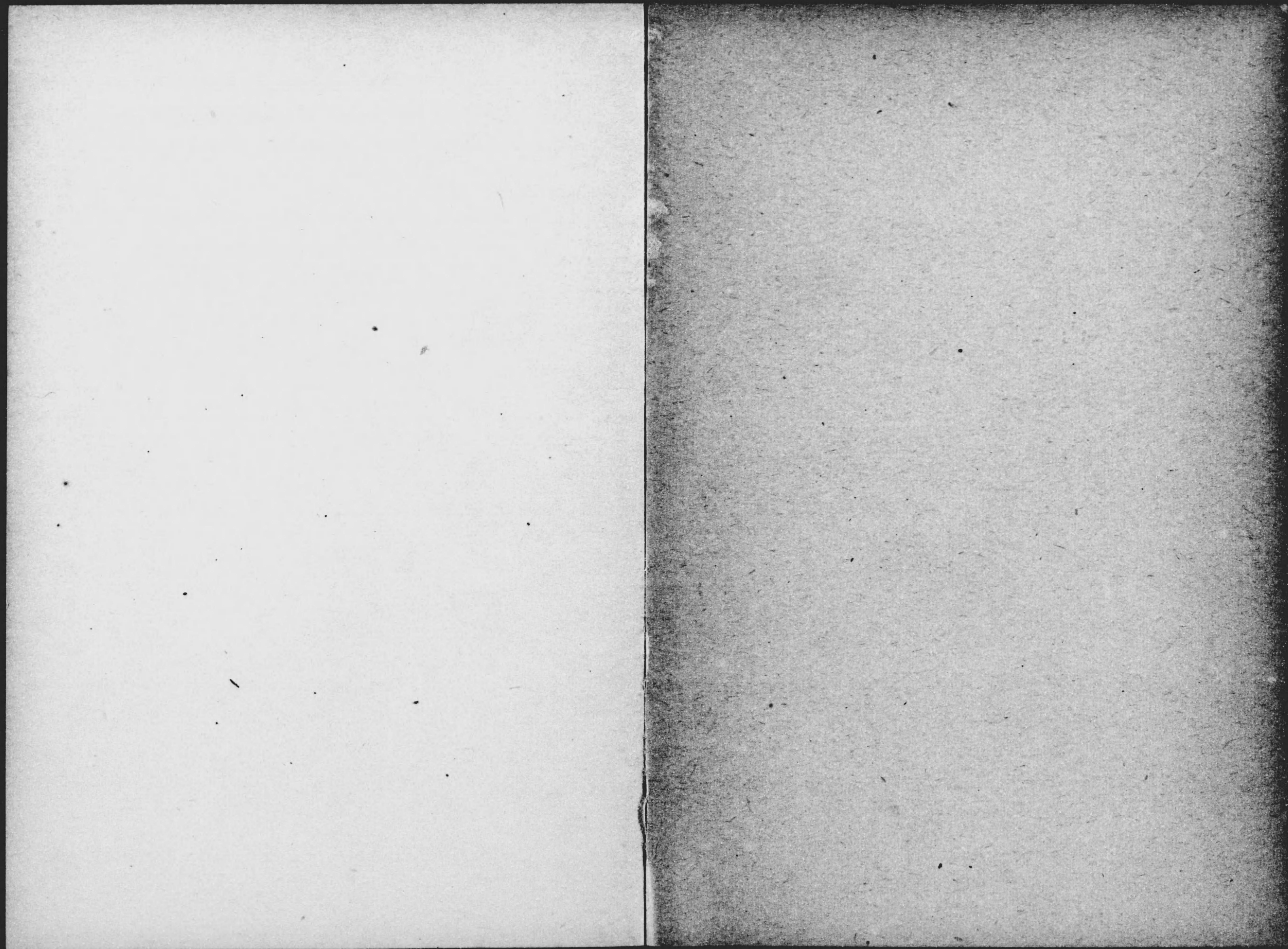
東京市豊島區尾崎一ノ三
印刷所 改洋社
代表者 米田 眞二

配給元 東京市神田區淡路二丁目九番地 日本出版配給株式會社

◇ 書評好係關那支の社材教 ◇

<p>米田祐太郎著 支那の商人生活</p>	<p>カール・クロウ著 支那四億のお客まさ</p>	<p>カール・クロウ著 支那人氣質</p>	<p>費孝通著 支那の農民生活</p>	<p>米田祐太郎著 支那商店と商慣習</p>
<p>¥ 1.70 〒 14</p>	<p>¥ 1.50 〒 14</p>	<p>¥ 1.50 〒 14</p>	<p>¥ 1.80 〒 14</p>	<p>¥ 2.00 〒 14</p>
<p>支那商人の宣傳廣告と商賣振興及び、その家庭と日常生活、衣食住と慶弔、年中行事、各省商人の特質等全て商人に關聯あるものを纏めてある。</p>	<p>三十年間支那に廣告と販賣に専心してゐた著者の苦心が彼のユーモラスな筆を通して大陸の市場を指す我々の心境にひしひしと迫り来る支那解剖の書である。</p>	<p>飄逸な挿繪を豊富に配した支那人のウラのウラ、底の底まで描いた百萬人の支那通書。著者は支那で三十年間も暮した米國第一の支那通である。</p>	<p>本書は支那の一村落を抽出してそれを全體に關聯せしめて研究した綜合的支那農民生活の研究報告書であつて、その新しき研究態度は斬新なものである。</p>	<p>新しく大陸に發展し、支那に活躍を望む人の爲に支那人の一般氣質が各業別に最も具體的に示される。完備せるエンサイクロペディアである。</p>
<p>東京 小石川 東 九八一 町 教 材 社 東 三 四 一 六 五</p>				





GL

NO. 11578

